

ドストエフスキーはなぜ『カラマーゾフの兄弟』を書いたのか

—『作家の日記』からの考察—

松原繁生

目次

序章	3
第1章:『死の家の記録』	10
第1節:流刑制度への鋭い批判	10
第2節:「他律的な罰」の否定と「自律的な罰」への沈潜	13
第2章:『罪と罰』	17
第1節:ラスコーニコフを苦しめる「自律的な罰」	18
第2節:ラスコーニコフとスヴィドリガイロフ:二人の生死を分けたもの	24
第3章:『おとなしい女』	30
第1節:アンナ夫人との関係	31
第2節:一筋の灯りも見えない『おとなしい女』	37
第4章:『おかしな人間の夢』	44
第1節:霊魂の不滅と善行	44
第2節:『おかしな人間の夢』	49
第5章:『作家の日記』	57
第1節:コルニーロヴァ事件	57
第2節:『作家の日記』とは何か	65
第6章『カラマーゾフの兄弟』	68
第1節:ロシア公開陪審員制度に対するドストエフスキーの態度	68
第2節:誤審を選んだドストエフスキーの意図	72
終章	85
参考文献	91
付属年表	

序章

ドストエフスキー(Федор Михайлович Достоевский, 1821-1881)が『カラマーゾフの兄弟』(Братья Карамазовы, 1879-1880)と『作家の日記』(Дневник писателя, 1873, 1876-1877, 1880, 1881)について書いた手紙から始めたい。持病であった慢性肺カタルの治療の為に滞在していた保養地エムスから妻アンナ宛てに書かれた1879年8月13日付けの手紙である。

私はね、愛する君よ、自分の死のことと、君と子どもたちに何を残してやれるかを(当地で本気になって)考えている。私たちはお金持ちと見られているけれど、実際には何も持っていない。現在私は『カラマーゾフ』を背負っている。見事に完成させる必要がある。宝石細工のような繊細さで仕上げなければならない。それなのに、これは骨の折れる、あぶなっかしい作品であって、どんだん力を取られている。とはいえ、これは運命を決する作品¹でもあるのだ。これによって名声を打ち立てなければならないのだ。そうしないと先の希望は何もない。この長編を終え、来年の末に『日記』²の予約購読の募集をし、集まった予約金で領地を買う。次の予約までの生活費と『日記』を出す資金は、単行本を売って何とか凌いでいく。³

この手紙からはアンナを心配させないための配慮が感じられる。『作家の日記』を復刊するまでの生活費と『日記』を出すお金は大丈夫なの?、「領地を買う約束は守れるの?」といった妻が質問するであろう問いの答えが前もって準備されている。この手紙は、バフチン(Михайл Михайлович Бахтин, 1895-1975)が『ドストエフスキーの創作の問題』(Проблемы творчества Достоевского, 1929)の中で手紙について書いている記述にぴったりと当て嵌まるものである。

書簡は、対話における応答と同じく、特定の人間に向けられていて、その人のありうべき反応、ありうべき返事を考えに入れている。そこにいない話し相手に対するこうした配慮は、程度の差はあるとしても強いものとなり得る。ドストエフスキーの手紙では、この配慮が非常に張りつめた性格を帯びている。⁴

妻のありうべき反応に対する配慮が完璧になされているとはいえ、この手紙の力点は、遺産や資金繰りにあるのではなくて、ドストエフスキーにとって「運命を決する作品」である『カラマーゾフの兄弟』を何としても見事に完成させることに置かれているようである。

ドストエフスキーは、『作家の日記』を1877年12月号で休刊させ、『カラマーゾフの兄弟』に専念する。そしてその最終号を1880年11月に発表し、1881年1月に『作家の日記』を復刊するのだが、同月28日にペテルブルグで急逝している。『作家の日記』を休刊させていた三年間、ドストエフスキーは『カラマーゾフの兄弟』の執筆だけに専念していた。⁵ その予約金だけで領地を買えたほどなので、『作家の日記』が一家の家計に資するところは大きかったはずである。アンナへの手紙の内容から考えると、『カラマーゾフの兄弟』の原稿

¹ 下線の強調は筆者、引用文中の斜字体は作者による。

² 『日記』とは『作家の日記』のことである。『作家の日記』の概要については、4頁のヤンコ・ラヴリンの文章(注7)を参照されたい。

³ Достоевский Ф.М. Полное собрание сочинений в 30 томах. Письма 1878-1881. Т. 30 Книга Первая. Л., 1988. С. 109. 以後のドストエフスキーの作品や書簡からの引用はすべてこの全集に依拠し、記載にあたっては必要と思われる省略を行う。また、本論文の翻訳は特記したもの以外は全て筆者による。

⁴ Бахтин М.М. Собрание сочинений в 7 томах. Проблемы творчества Достоевского. Т. 2. М., 2000. С. 103. 以後のバフチンの作品からの引用はすべてこの7巻全集に依拠し、記載にあたっては必要と思われる省略を行う。

⁵ 『作家の日記』の1880年8月号は同年6月8日にモスクワのロシア文学愛好者協会で行われたプーシキンに関する演説について書かれた号外的なもので、当該号で『作家の日記』が復刊されたわけではない。

料は『作家の日記』からの収入を下回っている。

『カラマーゾフの兄弟』の執筆を「骨の折れる、あぶなっかしい作品であって、どんどん力を取られている」と愚痴を言いつつ、この高齢の作家は「運命を決する作品」に立ち向かうことをやめようとはしていない。お金と労力の犠牲を払ってまで、ドストエフスキーが『カラマーゾフの兄弟』を完成しようとした理由は何だったのだろうか。本論文はその解明を目的としたい。

解明するための重要な手がかりが『作家の日記』に書かれている。休刊前の最終刊 1877 年 12 月号の最後の節「読者のみなさんへ」(К читателям) での説明である。

定期刊行を休止するこの一年間に、私はある芸術作品の執筆に専念する。その作品の構想は、『作家の日記』を刊行してきたこの二年の間に、知らず知らずのうちに成熟してきたものであった。⁶

『カラマーゾフの兄弟』執筆と『作家の日記』刊行の優先度と時間軸がこの短い文章に凝縮されている。興味をひくのは、「作品の構想は、『作家の日記』を刊行してきたこの二年の間に、知らず知らずのうちに成熟してきたもの」という箇所である。ドストエフスキー自身が「知らず知らずのうちに成熟してきた」と書いているので、この二年間(1876-1877 年)の『作家の日記』を読めば、『カラマーゾフの兄弟』の構想の成熟過程が分かるかもしれない。

この時期の『作家の日記』を要約するものとしては、スロヴェニアの文学研究者ヤンコ・ラヴリンの次の文章が適切と思われる。

二年にわたって発行されたこの個人月刊誌は、ドストエフスキーが以前『市民』誌に連載していた同名の欄の継続であったが、今回はより広い、より着実な基礎にもとづいていた。ドストエフスキー一人で書かれ、彼の妻が発行したこの「日記」は、彼らの収入を高めるとともに、ユーモアにも皮肉にも欠けないドストエフスキーのジャーナリスティックな素質を充分発展させる可能性を与えた。政治的事件、時事問題、犯罪と訴訟、歴史的観察、文壇に登場する作品と人物たち、心理学的現象、社会学的現象、ニヒリズム、社会主義、宗教、自殺、スラヴ問題、その他一連のテーマ、これらがすべてこの日記で論じられた。この日記は夥しい矛盾に満ちているが、また興味をそそる考えや観察も豊富である。その上それはドストエフスキー作品の根本思想、問題設定の鍵をわれわれに提供してくれる。⁷

本論文では、「ドストエフスキー作品の根本思想、問題設定の鍵」である『作家の日記』を『カラマーゾフの兄弟』の執筆理由の解明の軸に据えたい。より具体的には、『作家の日記』の中から、「犯罪と訴訟」と「自殺」の二つを取り上げる。

まず、「犯罪と訴訟」を取り上げる理由について述べたい。『罪と罰』(Преступление и наказание, 1866) と『カラマーゾフの兄弟』の二作品は、殺人事件の発生に合わせて裁判が開かれるという共通点を持っている。とはいえ、両作品における裁判についての記述には質的にも量的にもかなりの差異が見られる。まず質的な差が目立つのは量刑の年数である。前者では、二人を斧で斬殺したラスコーリニコフに対して、8 年という比較的寛大な判決が言い渡されているのに対し、後者では、父親殺しの真犯人ではない長男ミーチャに 20 年の厳刑が科されている。つぎに量的な差で際立っているのは、裁判についての記述量が比較にならないことである。前者では、エピローグの箇所でも 2 頁弱が裁判の経過や結果に費やされているにすぎないが、後者では、裁判の場面に第十二篇全体があてられ、その記述量

⁶ Достоевский. Дневник писателя. Т. 26. Л., 1984. С.126.

⁷ ヤンコ・ラヴリン/平田次郎訳『ドストエフスキー』理想社、1972 年、143 頁。

は90頁の長きにわたっている。

他方、1876-1877年の『作家の日記』の「犯罪と訴訟」に関する評論を見てみると、自ら傍聴した(或いは新聞記事で読んだ)ロシアの裁判の判決毎の賛否をドストエフスキーが書いていて、賛否の理由を明示した上で、こうあって欲しいという要望を書き続けている。裁判に社会の現実が反映されているとしてドストエフスキーが「犯罪と訴訟」に大きな関心を持っていたことが分かる。それらの裁判の記録をよく読めば、「真犯人ではないミーチャに20年の厳刑が科された理由」が解明出来るかもしれないし、ドストエフスキーに『作家の日記』を中断させて、『カラマーゾフの兄弟』執筆に向かわせたものが分かるかもしれない。

次に、「自殺」を取り上げる理由に移りたい。『カラマーゾフの兄弟』には、「自分はすべての人間に対して罪がある」という思想を形成した複数の登場人物が書かれており、しかもそれらの登場人物は、例外なく「愛し始める、或いは善行を始める」という具体的な贖罪行動を行っている点で特徴的である。彼らにおいては、思想と具体的な行動が不可分のものになっている。⁸

他方、『作家の日記』には『おかしな人間の夢—荒唐無稽な物語—』(Сон смешного человека -фантастический рассказ-, 1877) という短編が1877年4月号に発表されている。自殺を決めた人間が、周囲の人間を墮落させた罪を自覚し、自殺を思いとどまり、周囲の人間を愛し始め、善行を始めている。『おかしな人間の夢』には、思想と具体的な行動が不可分であるという点において『カラマーゾフの兄弟』の複数の登場人物と共通するものが見られ、何か吹っ切れたような、新しい希望のようなものが感じられる。

とはいえ、その僅か5か月前、1876年11月号に発表された短編は一筋の灯りも見えない暗さの点で異彩を放っている。ドストエフスキーは、1876年9月30日に飛び降り自殺をした貧しいお針子についての評論を『作家の日記』10月号の「二つの自殺」で書いたあと、11月号に『おとなしい女—荒唐無稽な物語—』(Кроткая -фантастический рассказ-, 1876) を電光石火の速さで発表している。当該号には評論が見当たらず、『おとなしい女』だけで構成されているので、ドストエフスキーは短編執筆だけに没頭している。『おとなしい女』では、自殺者はお針子から質屋の妻に変えられていて、「自分を愛すると同じように配偶者を愛することは可能か」という問題が中心テーマに置かれている。妻の自殺後、夫は「人々よ、互いに愛し合うべし」これを言ったのは誰だ? これはいったい誰の遺訓だ?」⁹と独白してこの短編は終わっている。この夫の独白は、12年前に最初の妻マリヤをなくした時にドストエフスキーが手帳に書き残したメモ¹⁰を想起させ、ドストエフスキーが抱えていた倫理上の課題が12年経過した時点でも解決されていなかったことを示している。

1876年11月の『おとなしい女』から1877年4月の『おかしな人間の夢』までの間にドストエフスキーの思想が転換していると考えない限り、一筋の灯りも見えない暗さが、何か吹っ切れたような、新しい希望に変化していることの説明はつかない。この思想の転換が、ドストエフスキーに『作家の日記』を中断させて、『カラマーゾフの兄弟』執筆に向

⁸ Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 14. Л., 1976. С. 262.

第2部第6編第2章の「ゾシマ長老の早逝した兄」(О юноше брате старца Зосимы)で、ゾシマ長老の兄マルケルは「全ての人間や物にたいして自分が一番罪が深い」と言い始め、周りの召使や小鳥や木々に謝罪、感謝し、愛し始める。

Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 14. Л., 1976. С. 270-271.

第2部第6編第2章の「ゾシマ長老の青年時代の思い出」(О священном писании в жизни отца Зосимы)で、ゾシマ長老は従卒アフナーシーを理由なく殴った事に罪深さを感じ、彼の足下に身を投げて謝罪し、僧院に入る。

Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 31.

第4部第11編第4章の「聖歌と秘密」(Гимн и секрет)で、懲役二十年の判決を受ける裁判の前日、被告ミーチャは、アリョーシャに「《餓鬼》の夢を見て「全ての人間に罪がある」事に気づいたので、全ての人に代わって懲役に行き、懲役囚達と心を通わせたり、彼らの為に尽くそうという啓示を感じた」と、その胸の内を打ち明けている。

⁹ Достоевский. Дневник писателя. Т. 24. Л., 1982. С. 35.

¹⁰ レオニード・グロスマン/北垣信行訳『ドストエフスキイ』筑摩書房、1966年、222頁。

「キリストの教えとおりに人間を自分自身と同じように愛することは不可能だ。掟は地上の個人を結びつけようとしても自我がじゃまをするのだ……」

かわせたものである可能性が高そうである。

以上のことから、本論文は、「ドストエフスキーに『カラマーゾフの兄弟』執筆に向かわせたもの」の解明を目的とし、「『作家の日記』をその解明の軸」とし、より具体的には「犯罪と訴訟」と「自殺」についての評論に着目してゆきたい。

考察の直接の対象は、1876-1877年の『作家の日記』と『カラマーゾフの兄弟』となるが、それだけでは十分ではあるまい。特に思想が転換していることを考慮に入れるなら、転換前の思想についても考察する必要があるだろう。本論文の主たる目的は、あくまで、『カラマーゾフの兄弟』の執筆を作家が迷うことなく選択した理由を解明することにある。とはいえ、その解明過程において、ドストエフスキーの思想の転換に直面する可能性が高いと思われるので、本論文を全6章構成にして、彼の思想の推移をその始まりから追うことにしたい。そうしないと、全体像を見失う恐れがある。結果としてドストエフスキーの思想の推移の究明が本論文の第二の目的として加わることになった。

第1章『死の家の記録』(Записки из Мертвого дома, 1861-1862)から本論文を始めているのは、ドストエフスキーの後半生のスタートがシベリア流刑であり、彼の思想の原型が形作られたのがシベリアであったと思われることが主な理由である。シベリアの監獄においてドストエフスキーが目当たりにしたのは「他律的な罰」である流刑制度が機能していない実態であった。犯罪者たちが自ら精神的にその刑罰を求める苦悩、すなわち「自律的な罰」¹¹に苦しんでいることを目撃した彼は、苦悩が最高の浄化力を持ち、魂を最高に強固にするのではないかという考えを抱くようになった。以後、ドストエフスキーは「自律的な罰」に沈潜する。

第2章の『罪と罰』は二つの点において重要な作品である。一つ目は「自律的な罰」のさらなる考察である。『死の家の記録』において犯罪者が自ら精神的にその刑罰を求めたのと同じことが、『罪と罰』の主人公ラスコーリニコフに起こるかどうかという試みをドストエフスキーは行い、「自律的な罰」をめぐる思索を深化させている。二つ目は自殺の問題である。ラスコーリニコフの矯正と復活を予感させるエピローグで小説は終わっているが、当初の構想では、彼は自殺することになっていた。ラスコーリニコフの代わりに自殺する人物がスヴィドリガイロフである。二人の生死を分けたものを考察することで、自殺についてのドストエフスキーの思想を究明したい。

第3章の『おとなしい女』は、ドストエフスキーの思想が大きく転換する直前の作品として重要である。1864年に最初の妻マリヤが死んだ時からのドストエフスキー自身の課題は「自分を愛するように他人を愛せない」ことであった。その状態が少なくともこの短編までは継続しており、一筋の灯りも見えない暗さを示す作品である。他人の中で最も身近な存在である配偶者との間に潜んでいる問題を取り上げて、ドストエフスキーが12年来の課題に今一度挑んでいる理由を、ドストエフスキーが二番目の妻アンナに送った11通の手紙から考察したい。

第4章の『おかしな人間の夢』では、『おとなしい女』から『おかしな人間の夢』執筆にいたるまでの5か月間の『作家の日記』における自殺に関する評論、そしてドストエフスキーの思想の転換に影響を与えたと思われるものを取り上げたい。『おかしな人間の夢』には、思想と具体的な行動が不可分であるという点において『カラマーゾフの兄弟』と共通するものが見られ、何かが吹っ切れた、新しい希望のようなものが感じられる。『カラマーゾフの兄弟』がその一つ前の作品である『おかしな人間の夢』から影響を受けている可能性はかなり高い。この章では『おかしな人間の夢』を執筆したドストエフスキーの意図について考察したい。

第5章第1節のコルニーロヴァ事件は、小説ではなく、実際に起こった殺人未遂事件についての『作家の日記』における評論であり、犯罪と訴訟に分類されるものの一つである。ドストエフスキーが『作家の日記』で言及している刑事事件のすべてに対して、一件の事例を除いて、無罪または執行猶予付きの判決が下されている。有罪となった一件の事例を誤審ではないかと主張しているのがコルニーロヴァ事件である。この事件をめぐって、1876年5月号・10月号・12月号、1877年4

¹¹ 「自律的な罰」の定義を「犯罪者が自ら精神的にその刑罰を求める苦悩」とする。

月号・12月号と、5ヶ月にわたって、しかも月によっては複数の小節に分けて評論がなされている。この事件の結末について、米川正夫はこう書いている。「ドストエーフスキイは、殺人未遂の廉でシベリア徒刑を宣告せられた哀れなコルニーロヴァなる一婦人のために弁護の筆を取り、熱烈な調子で無罪を主張したことがある。この一文は社会の激しい輿論を惹起し、ために裁判所は事件の再審理を行った結果、ついに無罪の宣告を下すにいたった。一作家の意見が裁判所の宣告を覆したということは、おそらく他にその類例を見ない」。¹² 自分の評論が社会を動かし、無罪の判決を勝ち取ったという成功体験と、無罪判決の10日後に発表された『おかしな人間の夢』の何かが吹っ切れた、新しい希望のようなものは繋がっているように思われる。とは言え、ドストエーフスキイは最後の作品である『カラマーゾフの兄弟』においては、ミーチャに下された懲役二十年の「誤審判決」を、コルニーロヴァ事件のように再審によって逆転させていない。ここには作者のなんらかの意図があったはずである。それを解明するためにも、コルニーロヴァ事件について考えてみたい。

第5章の第2節では『作家の日記』とは何かについて考えてみたい。本論文の目的の解明の軸として『作家の日記』を位置づけている以上、どこかで考えてみる必要があるからである。

第6章の『カラマーゾフの兄弟』では、第12篇の裁判の場面を中心に考察してゆきたい。裁判に着目した理由は『カラマーゾフの兄弟』で最終の到達点に達したと思われるドストエーフスキイの思想が裁判の場面に凝縮されているのではないかと考えたからである。「誤審」という題で書かれた第12篇からは、本論文の問いである「ドストエーフスキイはなぜ『カラマーゾフの兄弟』を書いたのか」のヒントになるものが見つかるはずだ。この点においても『作家の日記』の犯罪と訴訟についての記述が大きな助けとなるだろう。

すでに述べたように、この論文を全6章構成にした理由はドストエーフスキイ思想の推移を、その始まりから追わないと、全体像を見失う危険性を感じたからである。その目的のために選んだ5つの小説¹³の考察を進めていくと、5つの小説ごとに、ドストエーフスキイの主張が含まれていることに気づいた。本論文では筆者が考えるドストエーフスキイの主張も提示してゆきたい。筆者が見るに、5つの小説ごとの主張は、彼自身の思想の推移を示している。思想の転換が、ドストエーフスキイをして、『作家の日記』を中断させて、『カラマーゾフの兄弟』執筆に向かわせたものであるとするなら、それ以前のドストエーフスキイ思想の推移を究明しておくことは全体像を見失わない為にどうしても必要な作業となるので、5つの小説ごとの主張は、この論文が目指すものと関係がないわけではない。

ここで、バフチンのポリフォニー論についてもほんの少しだけ触れておきたい。

ドストエーフスキイのポリフォニー小説における主人公に対する作者の新しい芸術的な姿勢とは、すなわち本気になって実行され、最後まで貫徹されている対話的な姿勢であり、それが主人公の自主性、内的な自由、未完結性と未決定性を確立させている。¹⁴

新しい芸術的な姿勢がポリフォニー小説における主人公たちの独立性、内的な自由、未完結性と未決定性を保証しているというバフチンのポリフォニー論に、筆者も賛成したい。その保証の受益者は主人公だけに留まらない。読者もまた束縛されない自由さをドストエーフスキイのポリフォニー形式から感じているように思われる。とはいえ、筆者の主要な関心はポリフォニー論にはないので、バ

¹² ドストエーフスキイ/米川正夫訳「作家の日記」、『ドストエーフスキイ全集 15 下巻』河出書房新社、1974年、507頁。本書において、米川は「カイーロヴァ」と誤記している。『作家の日記』の別の項での婦人の名前と混同したと思われる。「カイーロヴァ」と原文のまま引用すると、意味不明となるため、本稿では「コルニーロヴァ」に変更して引用している。

¹³ コルニーロヴァ事件はノン・フィクションであって、小説ではないので、ここでは数に入れていない。

¹⁴ Бахтин. Проблемы поэтики Достоевского. Т. 6. С. 74. М., 2002.

フチンの関心との間にはかなりのずれがある。バフチンの関心があくまでも小説における思想どうしのポリフォニックな関係にあるのに対し、筆者の関心はポリフォニックな関係やポリフォニー形式ではなく、ポリフォニックな記述から透かし見えるドストエフスキー自身の思想の方にある。

「ポリフォニックな記述から透かし見えるドストエフスキー自身の思想」という筆者の主要な関心についてだが、ドストエフスキーの思想に迫ろうとする時、ポリフォニー形式が障壁となっていて、彼の思想に迫ることを妨害していることも、皮肉なことに、これまた事実である。ドストエフスキーの思想は小説に書かれてはいるのだが、登場人物の思想として書かれている場合でも、作者によって幾重にも相対化が図られているため、思想の解明は困難なものにならざるを得ない。

それでは、ドストエフスキー自身の思想を解明しようとする際に障壁となっているポリフォニー形式は、どういう経緯を経て形成されたのであろうか。1873年の『作家の日記』の冒頭部分からゲルツェンがドストエフスキーに語ったアネクドートを引用したい。筆者にはこのアネクドートが、ポリフォニー形式の形成についてのドストエフスキー自身の解説のように思われてならない。

ひとつあなたにアネクドートをお話ししましょう。わたしがペテルブルグにいた時に、ベリンスキーがわたしを自宅に引っぱっていき、懸命に書いた自作の論文を、読んで聞かせようとしたことがありました。『A氏とB氏の会話』という題でした（彼の著作集に入っています）。この論文の中でA氏は、つまり、もちろん、当のベリンスキーのことですが、非常に聡明な人間として書かれているのに対し、論敵であるB氏のほうはいくらか劣る存在として書かれているのです。ベリンスキーは読み終わると、熱病に罹った時のように性急な期待の表情でわたしに尋ねました。

「さあ、どうだね、きみはどう思う？」

「そうだね、いいことはいいよ、でも、きみが大層利口なのはわかるけれど、あんな馬鹿を相手に貴重な時間を浪費するなんて、いいもの好きじゃないか。」

ベリンスキーは長椅子に身を投げて、顔をクッションに埋め、ありったけの声で笑いながら、どなったんですよ。

「やられた！ 一本取られた！」、と。¹⁵

このアネクドートをゲルツェンから聞いたドストエフスキーは衝撃を受け、後にバフチンがポリフォニー形式と名づけることになる新しい文学形式を創り始めたように思われる。ドストエフスキーは「どちらか一方の優位が明らかな論争はつまらない」という厳しい原則の下に小説を書いている。したがって、「ある種のイデオロギイや人物像に対する評論家ドストエフスキーの強い好み」¹⁶とバフチンが表現しているドストエフスキーの思想を、ポリフォニー小説の中から純粋なかたちで取り出すことは容易ではない。については、ポリフォニー小説以外のものから彼

¹⁵ *Достоевский. Дневник писателя. Т. 21. Л., 1980. С. 7-8.*

補足しておけば、この引用文で紹介されているのは、ゲルツェンが重視していた創作手法（「どちらか一方の優位が明らかな論争はつまらない」）を理解していなかったベリンスキーが彼にやりこめられたという「アネクドート」である。ゲルツェンとのこの対話がドストエフスキーに「衝撃を与えたか、或いは考え込ませた」ように思われる。なぜなら、ドストエフスキーはこの引用の前に、『作家の日記』の編集方針を「わたしに衝撃を与えるか、或いはわたしに考え込ませるようなすべての事柄を話題としよう。」と明記した上で、この挿話を書いているからである。

¹⁶ *Бахтин. Проблемы поэтики Достоевского. Т. 6. С. 105. М., 2002.*

「かりにある種のイデオロギイや人物像に対する評論家ドストエフスキーの強い好み」が、小説に現われることが時々あるとしても、その好みは本質的とは言えないような諸機会（例えば『罪と罰』の象徴的なモノローグ風エピローグ）に現われるにすぎず、ポリフォニー小説の力強い芸術的論理を打ち破るほどの力を持たない。芸術家ドストエフスキーは常に評論家ドストエフスキーに打ち勝つのである。」

の思想を見つけなければならない。本論文で『作家の日記』を『カラマーゾフの兄弟』の執筆理由の解明の軸に据えているのは、ドストエフスキーが『作家の日記』に書いている思想から信頼性の高いもの¹⁷を抽出し、補助線として使用することで、『カラマーゾフの兄弟』に書かれている主張を解明するためである。¹⁸

¹⁷ 筆者は本論文において、二つの条件を設定している。一つは本人が書いたものでなければならないことであり、もう一つは取り上げる思想の信頼性の高さが担保されていることである。「犯罪と訴訟」に書かれている評論の信頼性は高い。ドストエフスキーは、新聞記事を通して、あるいは自身で実際に傍聴した公開陪審員制裁判における諸々の判決について、その賛否と理由を明示した上で、自らの要望を書き続けている。したがって、「犯罪と訴訟」の評論からはドストエフスキー思想の核心部分を読み取ることができるだろう。「自殺」については、ドストエフスキーは読者からの投書に対して反論することを習慣としていて、双方向のコミュニケーションを目指している。ドストエフスキーが反論している内容は、自説を擁護するために行われるものであり、しかも批判者の意見との相違点を明確にしているので、信頼性が高いと思われる。

¹⁸ 『作家の日記』の補助線としての機能は『カラマーゾフの兄弟』以外の4小説においても発揮されている。

第1章:『死の家の記録』

ドストエフスキーは「四年の懲役生活は長い学校であった。わたしは確信をつかむ時日を与えられたのだ」。¹⁹ という文章を1873年の『作家の日記』に書いている。ところが、最重要であるはずの「確信をつかんだもの」が明示されておらず、いまひとつはつきりしない。そこで第1章の目的を「確信をつかんだもの」の解明としたい。より具体的には、「流刑地の罰が流刑者の更生に有効と考えていたのか」と、「流刑地での確信が後年の創作活動にいかなる影響を与えたのか」の二点としたい。

小林秀雄は、「オムスクの監獄で、四年間、ドストエフスキーはどのような生活をしていたか。幸い、彼は「死人の家の記録」という素晴らしい体験談をのこして置いてくれた。僕等はこれを開けばいいのである」²⁰ と、書いている。『死の家の記録』を中心に、『罪と罰』、『カラマゾフの兄弟』、『作家の日記』、書簡など、本人が執筆したものを使って解明してゆきたい。

第1節:流刑制度への鋭い批判

1) 夜間用の用便桶と足枷

『死の家の記録』は、ドストエフスキーとしては珍しく、鏡に映るがごとく現実を再現するというロシア・リアリズムの正道を踏み、緻密な観察者の目を通して描かれた作品であるために、当時のロシアの文学者や批評家たちに高く評価された。²¹

工藤精一郎は、『死の家の記録』が緻密な観察者の目を通して描かれた作品であることを強調している。この作品が評価されている理由は、緻密な観察者の目を通しての描写という客観性の高さにあるようである。

しかしながら、ドストエフスキーが客観的な立場を離れ、激しい口調で主観的な意見を述べている箇所がないわけではない。第二部(Часть Вторая)第一節の病院(Госпиталь)においてドストエフスキーが問題にしているのは、病気に罹って近くの陸軍病院に入院した囚人が直面する悲惨な事態である。立派な便所が扉からすぐのところにあるのに、夜間に扉が施錠され、用便桶が一晩じゅう病室におかれていた不潔極まりない実態が描かれている。「わたしが知っているのは、現行の制度がろくでもないものであり、形式主義の無益な本質がこの例にほど大々的にあらわれたことはなかった」²² と、鋭い制度批判が行われている。そして、次に俎上にあげられているのは、足枷の問題である。

肺病患者でさえわたしの目の前で足枷をつけたままで死んでいった。[……]

肺病患者が実際に逃亡すると心配するほうがどうかしている。特に病状がかなり進んでいることを考慮に入れるなら、どこにそんな心配をする者がいるだろう？ 逃亡する目的で肺病を装って医師をだます事は不可能である。そんな病気ではない。一目見ただけでわかるのである。ついでに言うが、囚人に足枷をはめるのは囚人の逃亡防止或いは逃亡を遅らせるためだけなのだろうか？ 全く違う。足枷はひとえに、悪名をきせ、恥辱を感じさせ、肉体と精神に苦痛を与えるためなのである。²³

足枷を瀕死の肺病患者にまで強制するのは肉体と精神に苦痛を与えるためという強い制度批判が行なわれている。ドストエフスキーは検閲ではねられるリスクを冒してでも書き

¹⁹ Достоевский. Дневник писателя. Т. 21. Л.,1980. С. 12.

²⁰ 小林秀雄『ドストエフスキーの生活』新潮社、1964年、61頁。

²¹ ドストエフスキー/工藤精一郎訳『死の家の記録』新潮社、1973年、461頁。

²² Достоевский. Записки из Мертвого дома. Т. 4. Л.,1972. С. 137.

²³ Достоевский. Записки из Мертвого дома. Т. 4. Л.,1972. С. 139.

たかったようである。しかしながら、リスクを冒すと同時に、リスクを封じるための慎重かつ周到な準備をドストエフスキーは行っている。

その『死の家の記録』の完全で確定的なプランが現在、頭の中にでき上がっています。これは印刷全紙六枚か七枚の本になるでしょう。私という個人は消えます。知られざる男の手記になりますが、その面白さは請け合います。[……]

しかしひょっとすると恐ろしい災難に遭うかもしれません。つまり発行禁止です(完璧に、最高度に検閲に合わせた書き方ができる自信はあります)。もしも検閲にひっかかったら、その時は全体を幾編かに分けていろいろな雑誌に分載することもできます。それでもお金にはなりますし、結構儲かると思います。²⁴

上記の引用は、1859年10月9日付けで兄ミハイル宛てにトヴェーリから投函された手紙であり、検閲対策が事前に準備されていたことを示している。作者が施したと思われる準備について、時間軸もふまえながら再構成してみたい。

1855年にニコライ一世が死に、アレクサンドル二世が即位している。この年は、ちょうどドストエフスキーがオムスク監獄を出て、セミパラチンスクで従事した兵役の二年目にあたり、『死の家の記録』を起稿した年とされている。除隊し、トヴェーリを経てペテルブルグに1859年末に戻った彼は、1861年1月に、『死の家の記録』第一部(Часть Первая)を、『ロシア世界』に連載し始める。その直後、同年2月19日にアレクサンドル二世によって、農奴解放令が発布されている。同年4月、『ロシア世界』から『時代』へと、出版社変更が行なわれている。翌1862年1月、『死の家の記録』第二部を『時代』に連載し始めている。

用便桶と足枷についての制度批判は第二部からの引用で、二年目になってから発表されている。つまり、第一部が当局の検閲をパスして無事に出版された事を確認した上で、ドストエフスキーは翌年になって第二部の連載を開始しているわけである。「全体を幾編かに分けていろいろな雑誌に分載」という手紙の内容通りの行為が、実際に行われている。

作家らしい繊細な工夫も同時にほどこされている。制度批判に鋭く切り込んだ第二部第一節を、肺病患者の臨終という厳粛な場面を使って、客観性の高い記述で終わらせる工夫である。

亡くなった時にわたしの頭にうかんだミハイロフの死についての印象の数々や万感の思いを無意識に繰り返しながら、肺病患者について、ここで喋り出したのかもしれない。[……]

彼にはシャツさえも重く感じられたのだ。囚人たちは協力し合ってシャツをぬがせてやった。ミイラのように骨だけになった手足、痩せこけた腹部、波打つ胸、ちょうど骸骨のようにはっきりと見える肋骨も含め、彼のひよろ長い全身は見るにしのびなかった。彼の全身に残されたものは、魔除け袋のついた木の十字架と、やせ細った足から今なら外せそうな足枷だけだった。[……]

しずまりかえった中で、足枷がガチャンと床に落ちた……足枷は拾い上げられ寝台に戻された。死体が搬出された。急にみんな大声で喋り出した。既に廊下へ出ていた下士官の鍛冶屋を呼びにいかせる声が聞こえた。死体から足枷を外さねばならなかった……²⁵

臨終の場面では足枷が陰の主人公のような役割を果たしている。ドストエフスキーは、主観的な制度批判を行う一方で、文学的な香りを感じさせる客観的な観察記録をその直後

²⁴ Достоевский. Письма. 1832-1859. Т. 28 Книга Первая. Л., 1985. С. 348-349.

²⁵ Достоевский. Записки из Мертвого дома. Т. 4. Л., 1972. С. 140-141.

に配置している。この場面はおそらく制度批判の度合いを弱める意図をもって配置されたと思われる。

第三節「(病院の) つづき」(Продолжение)の冒頭に、作者の注として、次の文章が組み入れられている。これも検閲を意識した配慮の一つかと思われる。

(作者注—わたしが罰や刑についてここで書いていることは、すべてわたしが監獄にいた時代のことであった。いまは、すべてが改められたし、改められつつあるとのことであった)²⁶

『死の家の記録』は、「妻殺しの罪で徒刑囚となったゴリヤンチコフという貴族地主による手記」という設定にされているが、「私という個人は消えます。知られざる男の手記になります」という兄ミハイルへの手紙が示している事実は、その設定自体が検閲を意識したものだということである。作家活動の再開に賭けていたドストエフスキーは、自分が特別な監視の対象となる元政治犯だったということをよく理解していた。最初の段階で検閲にひっかかれば、以後の作家活動が困難になるのは避けられない。慎重かつ周到な検閲対策をする以外に選択肢はなかったように思われる。

2) 笞刑

第二部の流刑制度への批判は用便桶と足枷だけにはとどまらず、流刑制度の罰の根幹とも言うべき笞刑制度が真正面から批判されている。第二節では笞刑の執行官が描かれている。

彼は笞刑の執行官を命じられるのが常だったが、ぞくぞくするほど笞で殴ったり棒でなぐるのが好きだった。急いで付け加えるが、わたしはそのときジェレビャトニコフ中尉を変質者たちの中でもひとときわ化け物じみた男と見ていたが、囚人たちも同じように見ていたのだった。[……]

兵士たちは力いっぱい笞でぶん殴る、哀れな囚人の目から火花がとびちる、悲鳴をあげだす。ジェレビャトニコフは、すぐうしろについて走りながら、笑って笑って激しく笑い転げ、両手で脇腹をおさえ、身体をまっすぐのばす事ができないほどで、しまいには見ているのが気の毒になるほどである。彼はとにかくうれしいのである。おかしくて仕方ないのである。²⁷

第二節だけを読むのであれば、異常な性癖を持つ笞刑執行官がいるという理解も可能であるが、次の第三節になると笞刑制度が全面的に否認されている。

わたしが言いたいのは、最も優れた人間でも習慣により鈍化されると野獣に劣らぬほど暴虐になるということである。血と権力は人を酔わせる。粗暴と放縦は成長して知と情に入り込み最終的には最も異常な現象が甘美なものとなる。暴虐者の内部で個人と公民としての在り方は永久に破滅し、一方で、人間の尊厳、懺悔や復活への回帰は殆ど不可能となる。それに加え、かような横暴が可能という実例は社会全体にすぐに伝染する。かような権力は誘惑的である。かような現象を平気で見ていられる社会は既にその土台が病んでいるのである。

一言で言うなら、他の人たちに対する体刑の権利が一人の人間に与えられることは社会悪の一つであり、公民活動の全ての萌芽を試みを社会内部で根絶させる最も強力な手段の一つであって、社会を必然的かつ撃退しがたい崩壊へと導く十分な要

²⁶ Достоевский. Записки из Мертвого дома.. Т. 4. Л.,1972. С. 152.

²⁷ Достоевский. Записки из Мертвого дома.. Т. 4. Л.,1972. С.147. С.149.

因となるのである。²⁸

つまり、ドストエフスキーはジェレビャトニコフを非難するだけではなく、囚人に対する体罰の権利が一人の人間に与えられることは社会悪の一つであって、それは社会を崩壊に導きかねないと主張しているのである。

「血と権力は人を酔わせる。粗暴と放縦は成長して知と情に入り込み最終的には最も異常な現象が甘美なものとなる。暴虐者の内部で個人と公民としての在り方は永久に破滅し、一方で、人間の尊厳、懺悔や復活への回帰は殆ど不可能となる」。この記述から読者の多くはドストエフスキーの作中人物たち——『罪と罰』のスヴィドリガイロフ、『悪霊』のスタヴローギン、『カラマーゾフの兄弟』の父親フォードル・カラマーゾフら——を思い浮かべるのではないだろうか？

少し補足しておけば、ソ連の文芸学者ペレヴェルゼフ(1882-1968)は、『ドストエフスキーの創造』(Творчество Достоевского)において、『死の家の記録』の登場人物が後の長編に登場する人物の雛型になったとしている。²⁹ 雛型について言及している研究者は米川正夫を含めるとかなり多く、有力な先行研究の一つとなっている。

第三節では、一般の刑吏についての記述も見られる。

刑吏たちは豊かに暮らしていた。お金があるので食いものは贅沢で酒も飲む。金は袖の下で入ってくる。裁判で体刑を言いわたされる民事事件の被告は前もってわずかでも、なけなしのものをはたいてでも、刑吏に贈りものをする。[……]

刑吏は、処刑をはじめのまに、心の状態のたかぶり、力のみなぎりをおぼえ、自分が君主であることを自覚する。その瞬間、彼は俳優である。群衆は彼を見て恐れおののいている。そして彼は、むろん快感をおぼえながら、最初の一撃の前に生贄に向かって叫ぶ、『負けるな、打つぞ！』しきたりになっている宿命的な言葉である。人間の本性をここまでも歪めることが可能なことを想像するのは難しい。³⁰

笞刑の実行者である刑吏の実態についての記述は、一握りのエリートたちだけではなく、一般の刑吏も暴虐者になることを示している。人間の本性を歪めるとして笞刑を糾弾しているドストエフスキーの姿勢に躊躇は見られない。笞刑は1863年に法律で禁止されているので、『死の家の記録』第二部が刊行された1862年時点では、現実に施行されている刑罰であった。笞刑の糾弾にはかなりの覚悟と勇気が必要だったと思われる。

第2節:他律的な罰の否定と自律的な罰への沈潜

第二部の一年前に発表された第一部は、それまで、ほとんど知られていなかったシベリア流刑の実態が客観的に描かれており、大多数の読者に大いなる感銘を与えて『死の家の記録』の評価を決定づけたようである。

この作品について小林秀雄は次のように述べている。「クロボトキンは、「死人の家の記録」を、ドストエフスキイの作品中最も芸術的に完成した作品だと称している。トルストイは、ロシアで嘗て書かれたものでこの右に出る作品はないと言った。又、ツルゲネフが、作中の浴場の場面をダンテスクと激賞したのも周知の事である」。³¹ しかしながら、第一部でも主観的な記述が完全に封印されているわけではない。

²⁸ Достоевский. Записки из Мертвого дома.. Т. 4. Л.,1972. С. 154-155.

²⁹ ペレヴェルゼフ/長瀬隆訳『ドストエフスキーの創造』みすず書房、1989年

³⁰ Достоевский. Записки из Мертвого дома.. Т. 4. Л.,1972. С. 156-157.

³¹ 小林秀雄『ドストエフスキイの生活』新潮社、1964年、61頁。

監獄と強制労働の制度が犯罪者を矯正するものでない事は言うまでもない。二つの制度は犯罪者を罰して凶悪な犯人に社会の安寧をおびやかされる事のないように社会を保護しているだけである。監獄と最も重い労役が犯罪者の内部に発生させるものは、憎悪、禁じられた快樂に対する激しい渴望、恐るべき無思慮だけである。

有名な独房制度も、誤った、虚偽の、外面的な目的を達しているにすぎないとわたしはかたく信じている。独房制度は人間から生命の汁を吸い取り、人間の魂を苦しめ衰弱させ脅かした上で、精神的にカラカラに干からびているミイラである半狂人を、矯正と悔悟の模範としているのである。³²

この引用は、第一部第一節「死の家」(Мертвый Дом)からのものである。ドストエフスキーは監獄と強制労働の制度に代表される「他律的な罰」が犯罪者の矯正に役立たないと明言している。

監獄の中で弱りはて蝟燭のように溶けていく者もいれば、監獄に来るまでこの世にこんなに楽しい生活や勇敢な仲間たちとの愉快的集まりがある事を知らなかった者もいる。そう、監獄にはそういう連中も来るのである。

教養があり高度の良心と自覚と人間の心を持っている男を例に取ってみよう。この男の場合は、自ら苦しむことにより、あらゆる刑罰に先立って、自らの心の痛みが本人を消耗させてしまう。彼は自分が犯した罪に対して、最も厳格な法律よりも容赦なく、かつ無慈悲に自らを裁くのである。かと思うと、その隣にいる男は、監獄にいる間じゅう、自分の犯した殺人の罪についてただの一度も考えたことがない。³³

第三節「最初の印象」(Первые впечатления)では、教養があり高度の良心と自覚と人間の心を持つ男にとっても、犯した殺人の罪についてただの一度も考えた事がない者にとっても、監獄や強制労働が矯正の役目を果たしていないことが書かれている。監獄制度や流刑制度に対する批判は第二部だけではなく、第一部でも行われているのである。

ドストエフスキーはオムスク監獄での囚人たちが苦悩していたことについての追想を1873年の『作家の日記』に書いている。『死の家の記録』を発表してから12年経過した時点での追想である。

囚人たちのうち誰一人として長い内なる精神上の苦悩を免れなかったことを言明しておきたいと思う、苦悩は最高の浄化力を持ち、魂を最高に強固にするのである。わたしは彼らが孤独の内に物思いに沈んでいるのを見た。わたしは彼らが教会での懺悔の前に祈る姿を見た。彼らが突如として吐く個別の言葉や、彼らの叫び声に耳を傾けた。彼らの顔を今でも覚えている。——おお、わたしは誓って言うが、彼らは誰一人として、自分が正しいとは、内心考えていなかったのである！³⁴

この引用文が示しているのは、誰からも命ぜられていないのに囚人たちが自然に体験している苦悩を目撃したドストエフスキーが、苦悩こそが犯罪者の矯正に役立つのではないかと考え始めたことである。

彼らの内誰一人として、自分のことを犯罪人と考えるのをやめた人はいなかった。一見したところ、彼らは恐ろしい、残忍な人たちだった。[……]

³² Достоевский. Записки из Мертвого дома.. Т. 4. Л.,1972. С. 15.

³³ Достоевский. Записки из Мертвого дома.. Т. 4. Л.,1972. С. 43.

³⁴ Достоевский. Дневник писателя. Т. 21. Л.,1980. С. 18-19.

大部分は陰鬱で、沈んだ人たちであった。犯した犯罪のことについて話す人はいなかった。わたしはただの一度も不平らしい声を聞いていない。[……]

どうかすると、生意気かつ挑戦的な口調で自慢げに言い出す者もあった。すると「徒刑囚全員」が、一斉に、その出しゃばり者を取っちめたものである。そんな事は語るべきものではないとされていたのだ。³⁵

ドストエフスキーは、「誰一人として、自分のことを犯罪者と考えるのをやめた人はいない」と、すべての囚人が例外なく内省的であり苦悩していたと書いていて、12年前の『死の家の記録』に書いた「監獄にいる間じゅう、自分の犯した殺人の罪についてただの一度も考えたことがない囚人の存在」をすっかり忘れていようである。とは言え、より重要なのは、ドストエフスキーが、精神上的の苦悩が最高の浄化力を持ち、魂を最高に強固にすると考え始めたことだと思われる。以後のドストエフスキーは「自律的な罰」に沈潜していく。

「教養があり高度の良心と自覚と人間の心を持っている男を例に取ってみよう。この男の場合は、自ら苦しむことにより、あらゆる刑罰に先立って、自らの心の痛みが本人を消耗させてしまう。彼は自分が犯した罪に対して、最も厳格な法律よりも容赦なく、かつ無慈悲に自らを裁くのである」。³⁶ 『罪と罰』が執筆される5年前に書かれた『死の家の記録』のこの記述は、ラスコーリニコフが陥ることになる無秩序を、的確に、しかも生き生きと予言している。他律的な罰の底が浅く、犯罪者の矯正に役立っていないことを確信したドストエフスキーは、5年後にラスコーリニコフを創造し、「自律的な罰」による人間の救済と浄化を追究しようとしていたと思われる。

小括：

ソ連期の法学研究者のカルロヴァは研究書『ドストエフスキーとロシアの裁判』(Достоевский и Русский суд)の「自由の讃美」(Апофеоз Свободы)³⁷ という章において、『死の家の記録』について、興味深い視点を提供している。カルロヴァは「自由なくば全ての生は死人のごとくである」、「苦役は辛いことが問題なのではなくて、答で強制されることが問題」、と自由が剥奪されていることに注目し、ツルゲーネフがダンテ的と評した浴場の場面も不自由の観点から評している。「自由」という視点は、既に述べた「その後の小説に登場させる人物像の雛型を得たこと」や「鏡に映るが如く現実を再現することの重要性」と共にそれぞれ有力な先行研究の一つとなっている。しかしながら、ここまで述べたことを総合すると、「四年の懲役生活は長い学校であった。わたしは確信をつかむ時日を与えられたのだ」と『作家の日記』に書いたドストエフスキーが確信したのは、「自律的な罰」の重要性だったと、結論づけるのが妥当なように思われる。その根拠を三つ示したい。一つ目は、『死の家の記録』の記述である。「他律的な罰」が犯罪者たちの矯正と浄化に何の役割も果たさず、むしろ害になっていることが明快に述べられている。二つ目は、5年後の1866年に『罪と罰』が書かれていることにある。13日間目を覚まさずにいれば完全犯罪となったであろうほど物証に欠ける殺人事件に、証拠を与え続けることになるラスコーリニコフの奇妙な言動をドストエフスキーは執拗に書いている。彼はラスコーリニコフの奇妙な言動を「自律的な罰」の一部と考え、『罪と罰』で考察を深めようとしていたのではないだろうか。三つ目は、1873年の『作家の日記』の記述である。誰にも命ぜられていないのに囚人たちが自然に体験する苦悩は「自律的な罰」そのものを指していると思われる。

以上の三つの根拠に加えて傍証となる事実がある。「自律的な罰」へのドストエフスキー

³⁵ Достоевский. Дневник писателя. Т. 21. Л., 1980. С. 18.

³⁶ Достоевский. Записки из Мертвого дома. Т. 4. Л., 1972. С. 43.

³⁷ Карлова Т.С. Достоевский и Русский суд. Казань. Издательство Казанского Университета. 1975. С.33-48.

の沈潜は1866年の『罪と罰』や1873年の『作家の日記』を最後に終わっているわけではない。最後の作品となった1879-1880年の『カラマゾフの兄弟』でもドストエフスキーは「自律的な罰」について書いている。

第2部第6編第2章の「ゾシマ長老の伝記的資料—謎の客」(Таинственный посетитель)³⁸の主人公は、出家直前の若きゾシマ長老に、14年前の殺人を告白し、「行って人々に告白しなさい」というゾシマ長老の助言にいったん従う覚悟をしたものの、どうしても踏み切れず苦しみ続ける。捜査が完全に打ち切られ、完全に忘れ去られた事件のことで、殺人者である主人公だけが、強くなる一方の良心の痛みを苦しんでいる。良心の痛みを取り除きたいという欲求と、妻や子どもたちに悲しみを与えたくないという配慮、両立し難い矛盾の中で、揺れ動き、苦しみ続けた主人公は極度に衰弱するまで追い込まれ、つには、ただ一人秘密を知るゾシマ長老の殺害すら考えるが、ぎりぎりのところで回避し、名の日のお祝いの席で警察当局に陳述書を出し、最終的には安らぎを感じ、ゾシマ長老に感謝しつつ、一週間後に死ぬ物語である。

『カラマゾフの兄弟』で「自律的な罰」に苦しんでいるのは「謎の客」一人だけではない。第4部第10編第4章の「ジューチカ」(Жучка)で、アリューシャは自律的な罰に苦しむイリューシャに言及している。「病気のあの子は、僕(アリューシャ)のいる前で、三度も、涙を浮かべて親父さんにこう繰り返していました。『僕が病気になったのは、パパ、あの時ジューチカを殺したからなんだ、神様の罰があたったんだ。』と。どうしてもこの考えが頭を離れないんです」。³⁹ イリューシャの苦しみに注がれるアリューシャを通してのドストエフスキーの眼差しは謎の客に注がれるそれと同じものではないだろうか。

流刑地での確信が後年の創作活動に与えた影響は大きく、ドストエフスキーの「自律的な罰」への沈潜は年を経る毎に強いものになっていった。二十代の若さで体験した流刑が、作家に与えた影響の大きさはいくら強調しても足りないほど大きなものであった。イギリスの歴史家であり、文学研究者でもあったE・H・カーは、魂の救済における力強い有益な一段階として監獄(流刑)時代を評価している。翻訳は少し古めかしい(1952年)が原文のまま引用する。

『罪と罰』のエピローグに始まり『作家の日記』や『カラマゾフの兄弟』におわる後の叙述において、『死の家の記録』の各行にかすかに辿られる倫理問題化す(←ママ: 筆者注)傾向をドストエフスキーは結論までもっていき、時々、気取った調子をまじえながらも、この監獄時代を自分の魂の救済における力強い、有益な一段階として扱っている。⁴⁰

『死の家の記録』の意義は、ドストエフスキーが生涯にわたって悩みぬき考えぬいた「自律的な罰」への沈潜の出発点になったことにあるのではないだろうか。

³⁸ Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 14. Л., 1976. С. 273-283.

³⁹ Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 482.

⁴⁰ E・H・カー/中橋一夫/松村達雄譯『ドストエフスキー』社会思想研究会出版部、1952年、79頁。

第2章:『罪と罰』

『罪と罰』が起稿された1865年はドストエフスキーにとって不安や悲哀が続いた年であった。まず身近な人びとが相次いで世を去った。1864年の4月16日に最初の妻マリヤが、ついで6月10日に共同事業者であった兄のミハイルが亡くなっている。兄の急逝により、それまで兄が担ってきた多くの仕事と責任がドストエフスキーの肩にのしかかることになり、金銭感覚の疎い作家に多大なストレスをもたらすようになる。⁴¹ 1865年4月14日付けのヴランゲリ宛の手紙において、ドストエフスキーは自らの置かれている状況を次のように訴えている。

ああ友よ、私は借金を完済し再び自分が自由と感じる事さえ出来るなら、何年であろうと喜んでもう一度懲役に行きます。強制されて、つまり金に窮して、大急ぎで長編を今からまた書き始めようとしています。長編は感動を与えるものになるでしょう。でも、わたしに必要なのはそんな事じゃないのです！ 食うに困っての仕事、金の為の仕事が私を押し潰し、喰い潰しました。[……]

貯えていた全ての力、全てのエネルギーの中で私に残っているものと言え、何か不安でぼんやりとしたもの、何か絶望に近いものだけです。不安、悲哀、これ以上なく冷え切った大騒ぎ、わたしにとってこの上なくアブノーマルな状態です。おまけにたった一人きりなのです。わたしには40年もの間一緒だった人たちがいなくなりました。ところが一方では、自分はやっと生き始めようとしている感じが絶えずしています。おかしいですよ？ 猫みたいな不死身さです。⁴²

だが「わたしにとってこの上なくアブノーマルな状態」はさらに続き、愛人との関係も破綻に終わる。かつての愛人ポリーナ・スースロワに会うためにドイツの保養地ヴィースバーデンへ向かったドストエフスキーは賭博で有り金をすべて失い、バーデン・バーデンに逗留していたツルゲーネフに借金を申込み、50ターレルの送金を受けるはめになった。⁴³ ラヴリンによれば、「この金は全部ポリーナの手に押さえられた。彼女はその間にこの無責任な同伴者にいや気がさして、彼を一文無しのままホテルに置き去りにして、急いでパリに帰っていった」という。⁴⁴

こうして金も愛人も失った作家は、雑誌『ロシア報知』の出版者カトコフ(1818-1887)宛てに、新しい長編小説の執筆を対価として前金300ルーブルの送金を申し込む以外には選択肢がないところまで追い込まれる。つぎに引用する1865年9月10-15日付のカトコフ宛の手紙の主目的は送金依頼にあるのだが、この手紙では小説の構想も語られている。

あなたの雑誌『ロシア報知』に私の中篇を掲載させていただけないものでしょうか？ わたしはそれを当地ヴィースバーデンで既に2か月間書き続け、いま書き上げようとしております。印刷全紙5枚から6枚のものになるでしょう。[……]

これは或る犯罪の心理報告です。事件は最新のものであって、今年の事です。大学を除籍された、町人身分出身の青年が極貧の暮しをしていますが、浮薄で考えが揺れ動いている為に、今流行の或る奇怪な「未完成の」思想に取り憑かれて、自分の忌まわしい境遇から一気に脱出することを決意します。彼は一人の老婆を殺す決意をするのです。[……]

⁴¹ 兄は新しい月刊雑誌『時代』の編集者、マネージャーの役割を引き受けていた。兄の死に伴ってドストエフスキーの肩にのしかかった責任については、ラヴリン『ドストエフスキー』43頁を参照されたい。

⁴² *Достоевский. Письма 1860-1868. Т. 28 Книга Вторая. Л., 1985. С. 119-20.*

⁴³ このことを示す8月20日付けの礼状が残っている。詳細については *Достоевский. Письма 1860-1868. Т. 28 Книга Вторая. Л., 1985. С. 129.* を参照されたい。

⁴⁴ ラヴリン『ドストエフスキー』72頁。

犯行の直後から彼が感じた人々との疎絶や断絶、その感覚が彼を苦しめ始めたのです (замучило его)。[……]

さらに私の小説には次のような考えが示唆されています。すなわち、法律によって課せられる刑罰が犯罪者に与える恐怖は、立法者が思っているよりも遥かに弱いということです。犯罪者が自ら精神的にその刑罰を求めることが、その理由の一部になっています。知的成熟が最も劣っている人々の間で (на самых неразвитых людях)、全く思いも寄らぬような場合に、わたしはそうした実例を見て来たのです。それを、知的成熟度が高い新しい世代の人物において (на развитом, на нового поколения человеке) 表現してみたかったのです。そうする事によってこの考えはより鮮明になり、はっきり見えてきますから。⁴⁵

第1章で考察したように、ドストエフスキーはシベリアの監獄において「自律的な罰」の重要性を確信してペテルブルグに戻ってきた。『罪と罰』の執筆を通して、ドストエフスキーはこの確信についての考えをより鮮明にしようと試みている。そこで第2章では次の2点に注目して『罪と罰』を考察してゆきたい。第1節で扱うのは「自律的な罰」の問題である。『死の家の記録』において犯罪者が自ら精神的にその刑罰を求めたと同じことが、「知的成熟度の高い新世代の青年」にも生じるのかという試みが『罪と罰』において行われている。主人公ラスコーリニコフに「自律的な罰」が『死の家の記録』における犯罪者たちと同じ形で現われて来るのかどうかを確認したい。第2節では、『罪と罰』における「自殺」の問題を取り上げたい。「8年前の回想」というドストエフスキーの初期の創作ノートには「この長編にすべての問題を残らず盛ること」⁴⁶と書かれている。ドストエフスキーは、新たな問題を何度も書き足すことで、実際にもすべての問題を『罪と罰』に盛ろうとしている。興味を引くのは、当初の構想では自殺させることになっていた主人公ラスコーリニコフの代わりに自殺するスヴィドリガイロフが最後のノートになって初めて登場することである。⁴⁷ スヴィドリガイロフの急な登場は、『罪と罰』執筆直前のドストエフスキーにとって自殺が重大な問題となっていたことを意味している。ラスコーリニコフとスヴィドリガイロフ、二人の生死を分けたものを考察することで、ドストエフスキーの当時の自殺観に迫りたい。

第1節:ラスコーリニコフを苦しめる「自律的な罰」

『死の家の記録』において「犯罪者が自ら精神的にその刑罰を求める苦悩」を目撃したドストエフスキーだが、『罪と罰』では、主人公であるラスコーリニコフをまったく違う形で描いている。シベリア流刑の最初の一年が終わるまで、「知的成熟度の高い新世代の人物」であるラスコーリニコフには「犯罪者が自ら精神的にその刑罰を求める」ことは起こらず、「理性」の面で老婆殺害を後悔することはない。その代わりに殺害前には予期しなかった夢や幻覚といったさまざまな「情緒の動き」が彼を苦しめ、疲労困憊させている。どういう理由からそんな現象が起こるのか? 「情緒の動き」に焦点を当て、『罪と罰』を読み解いていきたい。⁴⁸

⁴⁵ Достоевский. Письма. 1860-1868. Т. 28 Книга Вторая. Л., 1985. С. 136-7.

⁴⁶ Достоевский. Преступление и наказание. Рукописные редакции. Т. 7. Л., 1973. С. 148.

⁴⁷ 『罪と罰』の創作ノートは何回かに分けて書かれている。スヴィドリガイロフの名前は、「8年前の回想」という題で書かれた初期のノートには見当たらず、最後の創作ノートになって初めて見出される。「自律的な罰」が古くからの構想であったのに対し、「自殺」は最終段階で付け加えられた新しい問題であることが、創作ノートの推移から分かる。「自殺」は、本論文第3章『おとなしい女』、第4章『おかしな人間の夢』、第6章『カラマーゾフの兄弟』など、『悪霊』を含めたすべての作品で扱われる重要な問題となる。

⁴⁸ 犯罪そのものや登場人物相互の思想論争など従来の研究で行われてきた「理性」的なものはすべて省くことにした。予審判事ポルフィーリーがラスコーリニコフに与える助言だけは含めるが、助言の内容はラ

a) 第1の声と第2の声

金貸しの老婆殺害の決行を迫られたラスコーリニコフは、2日目に街を歩き回りペトロフスキー島で眠りにおち、百姓馬が殴り殺される田舎町にいた幼年時代の夢を見る。彼は作中において四つの夢を見るが、これはそのうちの「第一の夢」である。その夢から覚めたあとのラスコーリニコフはなぜか身が軽くなったような心持ちを抱く。

目を覚ましてみると、全身汗びっしょりで髪の毛まで汗でぐっしょり濡れ、ぜいぜい息を切らしていた。彼はぞっとして起き上がった。

「夢でよかった。」と彼は、木陰に座って、深々と息を吸い込みながら呟いた。[……] 彼は立ち上がると、こんな所に迷い込んだことに驚いて、あたりを見まわしてから、T橋に向かって歩きだした。顔は青ざめて目は燃えあがり、手足はぐったりしていたが、急に呼吸が楽になったような気がした。あんなに長く自分を押しえつけていた恐ろしい重荷を今やさっぱり振り捨ててしまったのだと感じると、心が急に軽々と穏やかになった。⁴⁹

老婆殺しを正義とする理性の力（以後これを「第1の声」と呼ぶ。インテリが陥りがちな理性への崇拝に基づいた声である）と、それに反発しようとする情緒的な力（こちらを「第2の声」と呼ぶ。「第1の声」が脳からの指令だとすれば「第2の声」は心の奥底からそれに反発しようとする声である）の二つが拮抗し、状況に合わせて強まったり弱まったりしている。ラスコーリニコフがセンナヤ広場で金貸しの老婆の妹を見かけ、翌日の夜に彼女が不在であると思いこんだ時や、偶然居合わせた大学生から「老婆を殺して金を奪いその金で全人類への奉仕をする事は正当」という発言を聞き異常な興奮を感じたりする時には、「第1の声」だけが作用し、彼をヒートアップさせる。暫くすると、「第1の声」に反発しようとする無意識な力がラスコーリニコフに働きかける。深い眠りに誘うという形でヒートアップし過ぎた「第1の声」をクールダウンさせる例が多いが、幻覚や夢として現われることも多い。この不思議な反作用が「第2の声」である。

ラスコーリニコフが見た「第二の夢」は動的で緊張感に満ち溢れたたペテルブルグとは真逆の、静的でのんびりとしたオアシスの光景を映し出したものである。

彼は絶えず幻覚を見た。実に奇妙な幻覚ばかりだった。一番多かったのは自分がアフリカのどこか、エジプトのとあるオアシスにいる幻覚だった。キャラバンが休憩していて駱駝たちがおとなしく寝そべっている。シュロの木がぐるりと周りに生えている。みんなが食事をしている。彼だけは、すぐ横をさらさら流れている小川から水を口づけで飲んでばかりいる。あたりはたいそう涼しく、この世のものとは思えぬほど美しい、青く冷たい水が色とりどりの石や金色にきらきら輝く清らかな砂の上を走って行く……突然、時計の打つ音がはっきり聞こえた。彼は身震いし、正気づき、頭を持ち上げ、窓の方を眺め、何時かを考え、すっかり正気づいて、まるで誰かにソファからもぎ離されたように急に飛び起きた。⁵⁰

殺害決行を決めたラスコーリニコフにとって、残された時間を有効に使い殺害手順の点検を行うことが理性的な行動と思われるが、情緒を司る「第2の声」は準備に集中することを許さない。殺人を実行した後も「第2の声」はラスコーリニコフを苛み続ける。

「第1の声」と「第2の声」の相剋から、自殺するか、それとも自首しようかと逡巡し

スコリニコフの「情緒の動き」に合わせたものだけに絞っている。

⁴⁹ Достоевский. Преступление и наказание. Т. 6. Л., 1973. С. 49-50.

⁵⁰ Достоевский. Преступление и наказание. Т. 6. Л., 1973. С. 56.

ていた彼を一変させるのは、通りで旧知のマルメラードフが馬車に轢かれるところに出くわした時である。ラスコーリニコフはマルメラードフをアパートに運び上げるなどして、救急活動の中心となって迷いなく的確に行動する。マルメラードフの死を目にして、主人公は残された家族に有り金の全てを渡す。救急活動の実務に集中している間は、ラスコーリニコフを「第2の声」が苛むことはない。

彼は急がずにゆっくりと降りて行った。体全体が熱に燃えていた。彼は気づかずにいたが、突然迸り出た力強い生命感に溢れた、新しく限りない感覚に満ち満ちていた。この感覚は、死刑を宣告された人が、ふいに思いがけず赦免を宣告された時の感覚に似ていた。[……]

通りに出た時は10時を過ぎていた。5分後に彼は橋のところ、さっき女が身投げした同じ場所に立っていた。「もう十分だ！」彼は、きっぱりと、勝ち誇ったように言った。「蜃気楼なんか消え失せろ、偽りの恐怖も、幽霊も！……あるのは生命だ。おれは今生きてるじゃないか。俺の生命は、あの婆アと一緒に死んじゃいなかったんだ！あの婆さんに天国を、——こう祈れば十分さ、なあ、もう平静に戻るべき時だ。今こそ理性と光明の王国があるんだ、それに……意志と力の王国が……さあ、見てみようじゃないか！力比べをしようじゃないか！」——彼はある闇の力に向かって、挑むように昂然と言いつくした。——だっておれはもう、一尺四方の空間で生きることを承知したんじゃないか！⁵¹

死の世界に限りなく近づいていたラスコーリニコフは、突然溢れんばかりの力強い生命感に満ちた感覚を感じる。先ほど女が身投げした橋の上に立ちながら、ラスコーリニコフは生きていることを実感する。だが「理性と光明の王国」という「第1の声」が彼を元気にしたのだと誤解している彼のカラ元気は長くは続かない。下宿に戻った彼は見知らぬ訪問者から「人殺し」と言われ、再び自らの衰弱を実感し極度の嫌悪を覚える。自分は虱のような卑小な存在だと落ち込んで前後不覚に陥り、老婆殺しの夢「第三の夢」を見る。

目を覚ました蠅が、急に飛び立ってガラス窓にぶつかり、悲し気にぶんぶん羽音を立てた。その瞬間、部屋の隅の小さな戸棚と窓のあいだの壁に、女の外套らしきものがぶら下がっているのが見えた。[……]

突然寢室のドアがかすかに開き、そちらの方でも笑ったり囁いたりしているような気がし始めた。狂気が彼をとらえた。渾身の力で老婆の頭を打ち砕き始めたが、斧の一撃ごとに、寢室からの笑い声や囁きが一層激しく大きくなり、老婆の方は全身で笑い転げているのである。彼は逃げ出そうとしたが、玄関の間全体が既に人で一杯になり、階段へ向かうドアは開け放たれ、踊り場にも階段にもそのずっと下にも至るところに人がうようよ詰めかけ、みんな彼を見つめている。しかし姿を潜め待ち受けている、無言のままに……彼の心臓は縮みあがり、足がくっついたように動かない……彼は悲鳴をあげようとして、目を覚ました。⁵²

「第三の夢」では「第2の声」が前面に出て来てラスコーリニコフを再び苛んでおり、「理性と光明の王国」があると、彼にカラ元気を与えた「第1の声」は完全に圧倒されている。

b) ポルフィーリーの言葉

9日目には予審判事のポルフィーリーが自身の警察予審部判事執務室で、出頭して来たラ

⁵¹ Достоевский. Преступление и наказание. Т. 6. Л., 1973. С. 146-147.

⁵² Достоевский. Преступление и наказание. Т. 6. Л., 1973. С. 213.

スコリーニコフの心理分析を行ない、ラスコーリニコフが自殺を試みようとしたことまで見抜いている。彼の心理分析はラスコーリニコフを的確にとらえていて、12日目には、ついに「貴方が殺したんですよ。ロジオン・ロマヌイチ。貴方が殺したんですよ……」⁵³と宣告するに至る。

ポルフィーリーは、ラスコーリニコフに自首を勧める。ポルフィーリーは、意識の混濁から殺人を犯した若いラスコーリニコフが減刑されることを望んでいて、生か死かのぎりぎりの選択についての重要な助言を行っている。

貴方が信仰をお持ちでないことを、私は承知しています。大丈夫、きっと日々の暮らし(жизнь)が連れて行ってくれます。暫く経つと、ご自分でも気に入るようになりますよ。ただ、今の貴方には、空気が必要です、空気が、空気なんですよ！ [……]

万一、——これから四、五十時間の間に、別のやり方、何らかの怪奇な方法で事件にけりをつけよう、つまり自殺しよう(ばかげた推測ですが、まあどうかお許し願います)というお気持ちが起こったら、その時は、短くて良いので正確な書置きを残して下さい。ほんの二行、ほんのちょっとで結構です、品物を隠した石の場所も書いておいてください。そのほうが立派ですからな。それでは、さようなら……良いご判断と、立派なスタートを祈っております。⁵⁴

ポルフィーリーは、空気さえ換えれば、日々の暮らしが正しい方向へ連れて行ってくれるとの助言を行っている。ポルフィーリーの助言は「第2の声」を「第1の声」より優先させればきっと正しい方向へ向かって生き始めることができるというものである。最後の部分の発言は、ラスコーリニコフが自殺を選択するケースもあり得ると考えた上でのものであるが、冷たく突き放したトーンは感じられない。

「ポルフィーリーの言葉はドストエフスキーのそれと同じものではないか」という指摘をする研究者が多い。番場俊は「ラスコーリニコフとの最後の対話のなかで発せられる彼の言葉は、そのままわれわれ読者に突きつけられた作家ドストエフスキーの言葉のように響くのだ」⁵⁵と書いている。清水正も番場とよく似たことを書いている。

ラスコーリニコフはポルフィーリーによってすべてを看破されてしまっている。[……] 換言すれば、ポルフィーリーはラスコーリニコフの犯罪を予知し、姿なき目撃者として、その現場に居合わせたごとくである。しかし、驚くべきことは、事実の看破にあるのではなく、彼のラスコーリニコフに対する”予言”であり、その的中である。その意味で彼は批評家である以上に予言者である。それでは、彼が現実社会における”予審判事”の役割から”予言者”の役割を荷なうことになった秘密はどこに存するのであろうか。ポルフィーリーはラスコーリニコフとの三度目の会見において、明らかに予審判事から予言者へと変身しているが、これは彼が作者の意図と結託したということである。換言すれば、作者がポルフィーリーにラスコーリニコフの運命を耳打ちしたということである。⁵⁶

二人の先行研究者たちの見解に筆者も同意するが、その論拠として付け加えたいと思うのは、『罪と罰』にポルフィーリー・ペトローヴィチの姓(фамилия)が書かれていないことである。『罪と罰』の主要な登場人物の中で名と父称だけで呼ばれているのは、ポルフィー

⁵³ Достоевский. Преступление и наказание. Т. 6. Л., 1973. С. 349.

⁵⁴ Достоевский. Преступление и наказание. Т. 6. Л., 1973. С. 351. С. 353.

⁵⁵ 番場俊「『罪と罰』の捜査担当官ポルフィーリー・ペトローヴィチ、あるいは文学と法の交錯に関する反人物論的考察」『現代思想』第38巻4号、2010年、294頁。

⁵⁶ 清水正『ドストエフスキー『罪と罰』の世界』鳥影社、1991年、265頁。

リーとカチェリーナ・イワーノヴナの二人だけである。ドストエフスキーがはっきりとした意図を持ってカチェリーナを名と父称だけで呼ぶことに変更したことは創作ノートから分かる。⁵⁷ ポルフィーリーの場合は、カチェリーナのノートのような証拠が見つかったわけではないが、自身の思想や助言を代弁する機能を彼に委託したことを暗示するために、ドストエフスキーが姓を書かないことを選択したと筆者は考えている。⁵⁸ だからこそ「日々の暮らしが正しい方向へ連れて行ってくれる」というポルフィーリーの助言は、番場が言うように、「読者に突きつけられた作家ドストエフスキーの言葉のように響く」のである。ラスコーリニコフが持つ最大の問題は、理性の指令である「第1の声」だけを重視し、それに反発する「第2の声」を軽視し続けることにある。「日々の暮らし」とポルフィーリーが表現している「第2の声」を重視しさえすれば、正しい方向に向かえるというのがドストエフスキーの助言だったと思われる。

c) 最後の夢

不思議な事に、シベリアで牢獄に入るとラスコーリニコフを押し潰していた嫌悪感は逆に薄らいでくる。次の引用はエピローグのシベリア流刑の場面である。「すでに牢獄にいて自由の身となった彼は、以前の自分の行為を再び俎上に上げ熟慮するにつけ、行為の全てが、あの運命的な時に感じたほど、愚かで醜悪なものとは思えなくなった」。⁵⁹ 結果として殺人に対する反省は見られず、悔悟している様子は見られない。明らかに「第2の声」よりも「第1の声」が前景化している。「愚かで醜悪なもの」に追い詰められていたラスコーリニコフが流刑先にたどり着いた時、それまで優位だった「第2の声」が勢いを失い、老婆殺しを正義とする「第1の声」の優位が強まっていたのである。そんな彼が見る「第四の夢」はこれまでの総括的なものとして読むことができる。やや長いが引用する。

病気の間に彼はこんな夢を見た。アジアの奥地からヨーロッパへ伝わった恐ろしい前代未聞の流行性疫病のために、全世界が犠牲にならねばならなかった。数人の、甚だ少数の選ばれた人々を除き誰もが滅びなければならなかった。ある新しい織毛虫、顕微鏡的な微生物が現れ、人間の体に巣食うのである。その微生物というのは、知恵と意志を授けられた精霊であった。それに取り憑かれた人々は、直ぐに魔物に乗り移られたように興奮し狂人じみた行為を行った。その病気に感染した人ぐらい、自らを聡明かつ真理を確信していると考えた人たちが出現したことは過去には一度も、一度もなかった。彼等ほど自らの判断を、学問上の結論を、道徳的な確信や信仰を、揺るぎなきものと考えた人たちは過去には一度もいなかった。村中が、町中が、国中が、

⁵⁷ *Достоевский. Преступление и наказание* Рукописные редакции. Т. 7. Л., 1973. С. 204.

カチェリーナ・イワーノヴナの姓 (фамилия) は『罪と罰』の本文の何処にも書かれていない。九等官として奉職していたマルメラードフの正式な妻なので、マルメラードフと書かれるのが普通なのだが、実際には一度も書かれていない。ところが「8年前の回想」という形でドストエフスキー自身の初期の創作ノートを見てみると、「обиженная им Мармеладова」という例を含め、姓で書かれている例が複数残っている。カチェリーナは貧しさから脱出する為にマルメラードフの求婚を受け入れた人物で、収入の道を失い酒に溺れたマルメラードフを蔑視し続け、その価値観も女学校でもらった《賞状》に象徴される娘時代の名誉ある生活だけにあり続けた人物であった。そのことを強調する意図から、ドストエフスキーは名と父称で呼ぶ事に変更し、姓で書かれている他の登場人物と区別しようとしたと筆者は考えている。

⁵⁸ ちなみに本稿の第6章『カラマーゾフの兄弟』で「ドストエフスキーが自身の思想を代弁させる役割を弁護士に委託した」と、筆者が考えるフェチュコーヴィチ弁護士は、姓だけで書かれていて、名や父称が見当たらない。他方、フェチュコーヴィチ弁護士と対決する検事イッポリト・キリーロヴィチは名と父称で呼ばれている。法廷での直接の対決者である論告者と弁護人の呼び方を分けることによって、職務上の機能を越えるものをフェチュコーヴィチに与えていることをドストエフスキーが読者に暗示しているのではないかと筆者は考えている。

⁵⁹ *Достоевский. Преступление и наказание*. Т. 6. Л., 1973. С. 417.

感染し狂人じみた行為を行った。みんなが不安に駆られ、互いに理解し合えず、誰もが自分一人にだけ真理があると思いこんで、他人を見て苦悶し、我と我が胸を叩いたり、泣いたり、手を揉みしだいたりした。誰をどう裁いてよいかも分からなければ、何を悪とし善とするかで意見を一致させることも出来なかった。また誰を有罪とし誰を無罪とするべきかも分からなかった。人々は無意味な憎悪に駆られ互いに殺し合った。軍となって集まったものの、軍が行軍の途上で、突然足の引っ張り合いをし始め、隊伍が乱れ、兵士たちは互いに飛びかかり、突き合ったり切り合ったり、噛み合ったり、食い合ったりした。町という町では、一日中銅鑼が打ち鳴らされ、みんなを呼び集めたが、誰が何の為に呼んだのか誰一人知らず、みんなが不安に駆られていた。日常の仕事も放棄された。めいめいが思い思いの考えや善後策を提案し意見の一致をみなかったからである。農作も中止された。方々で人々が集まって何かを取り決め、何があっても分裂しないと誓っておきながら、すぐにたった今決めたこととまるで違うことをし始め、互いに相手を非難し、殴り合ったり切り合ったりした。火事が起こり飢饉が始まった。誰もかもが、何もかもが滅びていった。疫病が蔓延りどんどん広がっていった。世界中でこの災難を免れたのはほんの一握りの人々で、新しい種族と新しい生活を創始し地上を一新して浄化する使命を帯びた清らかで選ばれた人々だったが、誰一人、どこにもそうした人々を見た者はおらず、また彼らの言葉や声を聞いた人もいなかった。ラスコーリニコフはこの無意味な夢が、自分の記憶にこんなにも悲しげで悩ましい反響を残し、熱病による夢の印象がこんなにも長く消えずに残っていることに苦しんだ。⁶⁰

この夢が示しているのは、織毛虫に感染して自らの判断、学問上の結論や道徳的な確信を揺るぎなきものと考えていたのがラスコーリニコフその人であったということである。ラスコーリニコフが、ポルフィーリーの言っていた「日々の暮しが連れて行ってくれる」ことにやっと気づいたことを示しており、『罪と罰』を総括し象徴する記述であるだろう。エピローグの最終頁にも次のような叙述がある。

それに、こうしたあらゆる、あらゆる過去の苦しみが今更どうだと言うのだ、一切が、自分の犯罪や、判決や、徒刑さえもが、今の彼には、感激の潮に浸った彼には、何か外的な、奇妙な、まるで他人の身に起こった事実のような気がした。[……] 彼はただ感じていただけであった。弁証法の代わりに日々の暮しが到来したのであり、そして意識の中に何か全く別のものが形成されなければならなかったのである。⁶¹

「知的成熟度の高い新世代の青年」に何が起こるかを考える中で、ドストエフスキーは「弁証法の危うさ」と「日々の暮し」の重みを感じ取っていたのである。

ここまで、ラスコーリニコフが見る夢を中心に、『罪と罰』を読み解いてきたが、そこからは心の奥底からくる自律的な叫びである「第2の声」についてドストエフスキーが執拗に書き続けていることがわかる。夢や幻覚の形を通して出現する「第2の声」は圧倒的な迫力でラスコーリニコフを苦しめ続ける。インテリたちが信奉する「第1の声」の強さや危うさに気付いていたからこそ、ドストエフスキーは「第2の声」についてかくも執拗に書いたと思われる。「知的成熟度が最も劣っている人々」の間で「自律的な罰」として「犯罪者が自ら精神的にその刑罰を求める」現象は、「知的成熟度の高い新しい世代の人物」には同じ形では現われてこない。理性の声である「第1の声」に対して、それに反発しようとする情緒的な声である「第2の声」がインテリたちを苦しめ続けるのであり、それこそ

⁶⁰ Достоевский. Преступление и наказание. Т. 6. Л., 1973. С. 345. С. 419-20.

⁶¹ Достоевский. Преступление и наказание. Т. 6. Л., 1973. С. 422.

が彼らにとっての「自律的な罰」だったのである。『罪と罰』での考察を経て、ドストエフスキーの考える「自律的な罰」の範囲は「第2の声」を含んだより広いものにまで拡大されてきている。

第2節:ラスコーリニコフとスヴィドリガイロフ:二人の生死を分けたもの

第2節では、ラスコーリニコフとスヴィドリガイロフを比較し、二人の生死を分けたものはなにかについて、考えていきたい。

本論に移る前に、既存の研究では二人の共通点や差異に関してどのように考えているのかを確認しておきたい。例えば、二人における慈善的な振る舞いにかんして、清水正は、「スヴィドリガイロフは”慈善”に対する空想家ではなく、誰よりも現実家であったことを認めざるを得ないだろう」と述べている。⁶² 要するに、スヴィドリガイロフは現実的な慈善家であるが、ラスコーリニコフはそうではないと清水は見なしている。たしかに、スヴィドリガイロフはソーニャの義理の弟妹たちの養育費と、ラスコーリニコフらへの支援を惜しまなかった。しかしながら、次のような場面を読めば、じつはラスコーリニコフも現実的な慈善家であると言うことができる。「ラスコーリニコフは通りの真ん中でマルメラードフが馬車に轢かれる事件を目撃し、彼をアパートに運び上げ、医者と呼ぶ救急活動の中心になって迷いなく的確に行動する。彼の死を目の当たりにして、残された家族に主人公は有り金の全て（母親から受取った35ルーブリの残金20ルーブリ）を渡す」。⁶³ あるいは、「大学在籍中に、ある夜の火事に際して、もう火の手のまわったある貸間から二人の幼い子どもを救い出してその時に火傷をする」。⁶⁴ これらの場面が示すのは、ラスコーリニコフも切迫した状況で機敏に動く善行の実行者であるということだ。

そのため、二人の共通点や差異をより細やかに読み解く必要がある。差異を読み解く作業にあたっては、スヴィドリガイロフが行っている言動のすべてを抽出し、それに対応するラスコーリニコフの言動とを比較し、差異が見られるものだけを拾い上げた。二人の差異を読み解いていく中で、彼ら二人のさりげない動作や日常の習慣に、生死の分岐点が潜んでいるのではないかと疑われる三つの要素が浮かび上がってきた。周囲の人間から愛されているか否か、夢を見るか否か、生きようとしているか否か、の三つである。この三つについて考察してみたい。

1) 愛される者／愛されない者

ラスコーリニコフの周囲の人びとは彼に対して好意的だ。もちろん、友人のラズミーヒンが話すように、ラスコーリニコフとは気難しくて陰気で傲慢で気位の高い、しかも極貧で社会的地位が上昇しそうな男である。

僕は1年半ほどロジオンとつきあっていますが、気難しくて陰気で傲慢で気位の高い男です。最近は（ことによると、ずっと以前からかもしれませんが）猜疑心が強くてヒポコンデリーです。寛大で親切でもあります。自分の気持を話すのが嫌いで、言葉で心の内を述べるぐらいなら、むしろ残酷な仕打ちをしかねない。でも、時々ヒポコンデリーじゃなくなって、ただ冷淡に、そして不人情と言えるほどに無感覚になります。実際のところ、まるで二つの矛盾した性格が交代で出てきているようです。⁶⁵

それでも彼は多くの人びとから愛される男でもある。ラズミーヒンはラスコーリニコフを友人として一貫してサポートし続けているし、下宿先の料理女のナスターシャは一文無

⁶² 清水正『ドストエフスキー『罪と罰』の世界』196-7頁。

⁶³ Достоевский. Преступление и наказание. Т. 6. Л., 1973. С. 139.

⁶⁴ Достоевский. Преступление и наказание. Т. 6. Л., 1973. С. 412.

⁶⁵ Достоевский. Преступление и наказание. Т. 6. Л., 1973. С. 165.

しのラスコーリニコフの味方である。母ブリヘーリアの愛、妹ドゥーニャの自己犠牲を感じさせる愛に加え、娼婦であるソーニャからも愛の助言を受け、ラスコーリニコフはぎりぎりのところで自首を決意し、シベリア流刑期間中に復活の兆しを感じられるまで回復してゆく。

これに対して、スヴィドリガイロフは誰からも愛されない男として描かれている。ドゥーニャ、ラスコーリニコフ、ソーニャと子どもたちといった、スヴィドリガイロフと会ったことのある登場人物たちが、彼に対して好意的な関係を結んでいるとは言えない。ドゥーニャは2回にわたり、至近距離からピストルを彼に発射するし、ラスコーリニコフにとってのスヴィドリガイロフは否定すべき謎めいた存在である。子どもたちは彼を見るやいなや「全員言いやうのない恐怖を浮かべて即座に逃げ出した」。⁶⁶ つねに理解することの難しい発言ばかりするスヴィドリガイロフは、ソーニャに「驚きと怯えと、定かならぬ重苦しい疑惑」⁶⁷ を与える。自分自身の子どもたちとの絆も希薄そのものである。「わたしの子どもたちは伯母のところにおります、財産があつて裕福ですから、別にわたしという人間は必要ない。おまけにわたしはろくな父親じゃありません！」⁶⁸ という彼の発言からは親子の望ましい関係とはかけ離れたうすら寒いものしか感じられない。

自殺する前の最後の夜は安食堂、魔窟、最後に遊園地というふうに場所を転々としながら、場末の歌手や行きずりの二人の書記たちと過ごしているが、愛情のかけらも感じられないような荒んだ記述が行われている。スヴィドリガイロフはラスコーリニコフと同じような孤独と絶望を抱えながらも、周囲の誰からも愛されない人物であった。

2) 夢を見る者／夢を見ない者

第二の違ひとして、ラスコーリニコフは全編を通じて四つの夢を見るが、スヴィドリガイロフは自殺する前の夜になって初めて夢を見たことを挙げたい。「第1の声」(理性)と「第2の声」(自律的な罰)が闘うたびに、ラスコーリニコフが夢を何度も見るのに対して、スヴィドリガイロフは夢を見ない。

まず確認しておきたいのは、スヴィドリガイロフはいかなる事態が起ころうとも動揺も逡巡もしないことである。このことはラスコーリニコフと鮮やかな対照を成している。たとえ6年前に喧嘩で揉めた後に死んだ奉公人のフィーリカが幽霊となって出現したとしても、彼は少しも驚かない。

屋敷づきの奉公人で、フィーリカというのがおりました。フィーリカの埋葬を済ませて直ぐ、私がうっかり「フィーリカ、パイプだ」と怒鳴ったところ、部屋へ入って来て私のパイプがある棚の方へ真っ直ぐ行きかけたのです。私は座ったまま、「こいつ仕返しに来やがったな」と考えました。何故なら、彼が死ぬ前に私たちは激しい喧嘩をしたからです。そこで私はこう言ってやった、「よくも貴様は、肘の破れた服を着て俺の前へ出て来られたな、一出て行け、ろくでなしめが！」すると、背を向けて出ていったきり、二度と来ませんでした。妻にはその時話さずにおきました。私はその男のために追善供養をしようと思っていました、そう良心に恥じる場所があったので。」⁶⁹

幽霊にすら物怖じしないことから分かるのは、スヴィドリガイロフの内部で「第1の声」と「第2の声」が闘ったことがないことである。そんな男の内面に微かな変化の兆しが見れるのは、自殺を決意した最後の夜であり、そこで彼は初めて夢を見る。

⁶⁶ Достоевский. Преступление и наказание. Т. 6. Л., 1973. С. 384.

⁶⁷ Достоевский. Преступление и наказание. Т. 6. Л., 1973. С. 385.

⁶⁸ Достоевский. Преступление и наказание. Т. 6. Л., 1973. С. 222.

⁶⁹ Достоевский. Преступление и наказание. Т. 6. Л., 1973. С. 220.

彼は微睡み始めた。悪寒の震えは収まっていた。何か突然毛布の下で彼の手足に沿って走り過ぎたような気がした。彼は身ぶるいした。「ふう畜生、鼠だな。」と彼は思った。「子牛の肉をテーブルに置きっぱなしにしておいたからだ……」彼は毛布を跳ね除け、起き上がって、寒い目をするのをとても嫌っていた、突然また何か不快なものが足に沿ってずっと走った。彼は毛布を跳ね除け蠟燭に火を灯した。悪寒に震えながら屈み込んでベッドを見回した——何もいなかった。毛布をつまんで揺すぶってみた。すると、一匹の鼠が突然敷布の上へ跳び出した。彼は捕まえようと跳びかかった。しかし、鼠はベッドから逃げ出さず、四方八方へとジグザグに走り回り彼の指の下をすり抜け、腕を伝わってひょいと枕の下へ隠れた。彼は枕を投げ飛ばしたが、その瞬間何か懐へ飛び込んでさっと走り、音を立てて、背中の中のシャツの下へ入ってしまった。彼は神経的な身震いを覚え、はっと目ざめた。⁷⁰

この夢の場面が示すのは、スヴィドリガイロフの内部で何か動き出しているということである。自殺を決断したことを契機として、それまで経験したことのなかった知覚が彼の内面で動き始める。だが、ラスコーリニコフとは違って、夢が語りかける警告に柔軟に対応する感受性をスヴィドリガイロフは持っていない。夢は彼を救ってくれないのである。「一晩じゅう悪夢の見続けだ！」彼は、全身叩きのめされたように感じながら、毒々しい気持ちで起き上がった。⁷¹ 結局、彼は悪夢への愚痴をこぼしながら自殺用の銃を点検し、手帳に遺言めいた文言を書き付ける。こうして自殺は決行される。

3) 生きようとする者／生きようとしない者

ラスコーリニコフとスヴィドリガイロフは似通った絶望的な状況に置かれており、自殺という選択肢が等しくあり得たにもかかわらず、二人は生死を分ける決定をする。第三の違いとして、生への意志を弛むことなく示し続けたラスコーリニコフとそうではないヴィドリガイロフに注目したい。

限りなく死に近づいていたラスコーリニコフが、不意に迸り出た力強い生命感に満たされて、生への意志を示す場面がある。

「蜃気楼なんか消え失せろ、偽りの恐怖も、幽霊も！……あるのは生命だ。おれは今生きてるじゃないか。俺の生命は、あの婆アと一緒に死んじゃいなかったんだ！ あの婆さんに天国を、——こう祈れば十分さ、なあ、もう平静に戻るべき時だ。今こそ理性と光明の王国があるんだ、それに……意志と力の王国が……さあ、見てみようじゃないか！ 力比べをしようじゃないか！」——彼はある闇の力に向かって、挑むように昂然と言い足した。——だっておれはもう、一尺四方の空間で生きることを承知したんじゃないか！」⁷²

なにがあっても生きようとするラスコーリニコフの対極に位置するのがスヴィドリガイロフである。彼はラスコーリニコフとは違って生きることに執着しない。それゆえ、ラスコーリニコフは彼にとっては生に執着する浅ましい男に見える。

それにしても、あのラスコーリニコフはしぶとい奴だ！ あれだけ多くのことに堪えてきたんだから。やがてあの馬鹿らしい考えが抜け落ちたら、大した強か者になれるだろう、しかし今は、あまりにも生きることに執着しすぎる。この点じゃ、ああい

⁷⁰ Достоевский. Преступление и наказание. Т. 6. Л., 1973. С. 390.

⁷¹ Достоевский. Преступление и наказание. Т. 6. Л., 1973. С. 393-4.

⁷² Достоевский. Преступление и наказание. Т. 6. Л., 1973. С. 147.

う連中は——あさましい。まあ、あいつのことは、俺の知ったことじゃない。⁷³

生に執着しないスヴィドリガイロフだが、自暴自棄に陥っているというわけではない。彼は自殺に向かってあくまで冷静に行動している。前述したように周囲の人間が彼に対して好意的に接することはないが、彼自身は他者への配慮を忘れない。自殺する前の日のソーニャに対する発言を引用する。

生きてください、長生きしてください、あなたは他の人の役に立つんだから。ついでに……ラズミーヒン君に、わたしがよろしく言っていたとお伝えください。こういうふうに伝えてください——アルカージー・イワーノヴィチ・スヴィドリガイロフがよろしく言っていた、と。きっと頼みますよ」。⁷⁴

ソーニャに対する気遣いに加えて、ラズミーヒンへの伝言依頼は、ドゥーニャの伴侶になると目される男に、好きだった人を託そうとする配慮が滲み出ている。こういった振る舞いが示すように、最後まで冷静沈着な彼に自暴自棄による混迷は生じておらず、それゆえ彼が生を望まないのは、あくまで彼自身の意志によるものなのである。

小括：

第1節では、ラスコーリニコフの夢や幻覚に注目しながら「自律的な罰」が生じているか否かを検討した。それにより明らかになったのは、「自律的な罰」の形成が、インテリにおいては一般の囚人より時間がかかるということであった。その理由はインテリが理性を信奉しすぎていることにある。

ドストエフスキーは『死の家の記録』において次のように述べている。「わが国の賢人たちが民衆に教えうることは少ない。わたしは確信をもって断言するが——その逆である。賢人たち自身が、民衆から、更に学ばねばならないのである」。⁷⁵ おそらくドストエフスキーも自身の「自律的な罰」の形成に、囚人たちに比べて多くの時間を要したことを実感していたのだろう。インテリに何が起こるのかを『罪と罰』で改めて考え直しながら、ドストエフスキー自身も弁証法の危うさと日々の暮しの重要性を再認識したのではないだろうか。

心の奥底から出てくる叫びである「第2の声」が夢や幻覚の形を取って弁証法（「第1の声」）を信奉するラスコーリニコフを苦しめ続けている。実はその夢や幻覚こそが彼にとっての「自律的な罰」であるのだが、ラスコーリニコフは自分を苦しめている現象の本当の意味にはエピローグまで気づかない。夢や幻覚の形を取って現われる「自律的な罰」を軽視してはならない。これこそがドストエフスキーの主張であっただろう。

第2節では自殺問題の考察を行った。自殺問題でのドストエフスキーの主張は、第2章冒頭で紹介したヴランゲリへの手紙通りであっただろう。限りなく死に近い不安、絶望、悲哀といった動揺を最終的には生へと転換させるドストエフスキーの決意である。ドストエフスキーは『罪と罰』で自殺の問題を深く掘り下げて考えようとしているのだが、そのためには自殺する主人公を新たに設定する必要があった。それがスヴィドリガイロフである。『罪と罰』の創作ノートでは、スヴィドリガイロフは次のように性格付けられている。

スヴィドリガイロフ—絶望、極度にシニカルな
ソーニャ—希望、極度に実行し難い

⁷³ Достоевский. Преступление и наказание. Т. 6. Л., 1973. С. 390.

⁷⁴ Достоевский. Преступление и наказание. Т. 6. Л., 1973. С. 385.

⁷⁵ Достоевский. Записки из Мертвого дома. Т. 4. Л., 1972. С. 122.

(これをラスコーリニコフ自身に発言させねばならぬ)⁷⁶
彼(ラスコーリニコフ)は強く二人に引きつけられている⁷⁷

窮地に立っていたラスコーリニコフにとってスヴィドリガイロフとソーニャのどちらを取るかが究極の選択肢であったことがよく分かる。この選択の差は大きい。スヴィドリガイロフの道は自殺に通じ、ソーニャの道は更生と復活の道に通じるからである。他者から愛されず、夢を見ず、生きようとする意志を持たなかったスヴィドリガイロフは自殺し、生きる意志を持っていたラスコーリニコフは生き残る。

二人の生死を分けたこれら三つの分岐点は、スヴィドリガイロフが実際に行った言動を抽出し、ラスコーリニコフのそれとを比較し、差異のあるものだけを事務的に拾い上げた結果浮び上がってきた生きる上での習慣や思想であって、相互に影響しあうものではなく、並列的なものである。

筆者は『罪と罰』でドストエフスキーが大きな決断を行ったと考えている。その決断とは自らが保持しているラスコーリニコフ的な要素だけを残して残りの人生を歩いていくというものである。スヴィドリガイロフ的な「絶望、極度にシニカルな」要素は全面的に切り捨てられることになった。ドストエフスキーが自殺しようとすることは『罪と罰』以降、生涯にわたって一度もなかった。倫理的な生き方についての思想の一つの到達点に達したドストエフスキーは、約10年後に思想的な転換を行うまで、ある意味で安定した思想の下で生き続ける。

次に問題となるのは、ラスコーリニコフ(つまりドストエフスキー)はキリスト者であるソーニャの道を選んだのかどうかという問題である。これについては『罪と罰』のエピローグに、はっきりと書かれている。

徒刑生活の最初、彼は彼女が宗教で自分を悩まし、福音書の話を持ち出して、聖書を押し付けるだろうと思っていた。ところが、驚いたことに、彼女は一度もその話を持ち出さず、一度も福音書を渡そうとさえしなかった。病気に倒れる少し前、彼は自分から福音書が欲しいと言った。彼女は黙って本を持って来た。もっとも今まで彼は開こうとしなかった。彼は今も福音書を開かなかった。だが、ある考えがふと彼の頭にひらめいた。『今はもう彼女の信念が俺の信念であってもいい筈だ。少なくとも彼女の感情、彼女の願望ぐらいは……』⁷⁸

『罪と罰』のエピローグにおける「彼は今も福音書を開かなかった」という叙述が物語っているのは、ラスコーリニコフの更生と復活への予感を生み出したものはキリスト教への帰依ではなかったということである。『今はもう彼女の信念が俺の信念であってもいい筈だ。少なくとも彼女の感情、彼女の願望ぐらいは……』というラスコーリニコフの内心の語りは、キリスト教への帰依の可能性を閉ざしたものではないが、全面的な帰依への意志ではないだろう。

ソーニャの道に関しての残る問題は、「希望、極度に実行しがたい」という問題である。ここで、二人の生死を分けた三つの分岐点にいったん戻って、三つの分岐点からソーニャの問題について考えてゆきたい。

「夢を見る」ことを、「自己の内部で善悪が闘っている」と同じと仮定するなら、「夢を見る」ことを「苦悩する」という言葉に置き換えることが可能となる。夢を見ることもなく、時折現れた幽霊に対しても、からかいの態度や、高圧的な態度で臨んだスヴィドリ

⁷⁶ Достоевский. Преступление и наказание. Т. 6. Л., 1973. С. 354.

ドストエフスキーはこのメモ通りの内容を小説の中でラスコーリニコフに独白させている。

⁷⁷ Достоевский. Преступление и наказание Рукописные редакции. Т. 7. Л., 1973. С. 204.

⁷⁸ Достоевский. Преступление и наказание. Т. 6. Л., 1973. С. 422.

ガイロフは苦悩しない人間であり、全編を通じて苦悩し続けているラスコーリニコフとは、はっきりと異なっている。結局、二人の生死の分岐点は、1)「愛されているかどうか」、2)「苦悩しているかどうか」、3)「自殺しない強い意志を持っているか」の3点と言えよう。

1)「愛されているかどうか」については「他の人から愛されているか」というレベルに留まっていて、ソーニャのように「他の人を自分のように愛することができるか」というレベルではないことが重要である。ソーニャが行う「他の人を自分のように愛する」行為は「極度に実行し難い」ことであり、ドストエフスキーも『罪と罰』の段階では実行可能とは思っていなかった。つまり、ソーニャの道を行くかどうかの決定については、先送りする以外の選択肢はなかったのである。ドストエフスキーにとって宿題となった「他の人を自分のように愛する」問題については、第3章の『おとなしい女』において考察してゆきたい。

2)「苦悩しているかどうか」と第1節で考察した「自律的な罰」との間には接点がある。「自律的な罰」が全く働かない人間は自殺する可能性を持っているが、夢や幻想を見て「第2の声」すなわち「自律的な罰」を感じる感受性を持っている人が自殺をすることはなく、ドストエフスキーの中ではこの問題は解決している。

3)「自殺しない強い意志」を、ドストエフスキー自身は『罪と罰』以後の人生を通じ、一貫して持ち続けていて、それが揺らぐことはなかったが、ドストエフスキーは自分が自殺しないことだけでは魂の安らぎを得ることができず、他者が自殺することに胸を痛め、自殺の問題を考え続ける。この問題については第4章の『おかしな人間の夢』において考察してゆきたい。

第3章:『おとなしい女』

『作家の日記』の1876年10月号第1章に「二つの自殺」という評論がある。彼にこの評論を書かせたのは、同年9月30日に起こった或るお針子の飛び降り自殺であるという。

ひと月ばかり前、ペテルブルグのありとあらゆる新聞に、ペテルブルグでの自殺事件が、小さい活字で短く数行掲載された。裁縫女をしている若くて貧しい娘が、「生計をたてる仕事はどうしても見つからなかった理由で」、四階の窓から飛び降りたのである。両手で聖像を抱いて飛びおりて、地面に墜ちたことも付記されていた。両手で抱いた聖像——自殺では今まで聞いた事がない奇妙な特徴である！ これは何ともおとなしく、つましやかな自殺である。不平や怨みつらみは何もなかったらしい、ただ——食えなくなって、「神様の御心にそわなくなった」ので——お祈りをして死んだのである。外見は如何に単純に見えようとも、長い間にわたって考えることがやめられず、妙に目について、それが自分自身の責任のように思われる事実がある。自らを滅ぼしたこのおとなしい魂は、意識せずとも思いを悩ませる。ところで、この死亡事件はわたしに、この夏に知らせを受けた亡命者の娘の自殺⁷⁹を思い起こさせた。とは言え、なんとかけ離れた二つの創造物、まるで二つの異なった惑星から来たかのようである！ 何と違いのある死に方なのだろう！ これら二つの魂のうち、一体どちらが地上でより多く苦しんだであろうか？⁸⁰

「二つの魂のうち、一体どちらが地上でより多く苦しんだであろうか？」ドストエフスキーはこの問いで「二つの自殺」の評論を結んだあと、短編小説を電光石火の速さで書いている。お針子の自殺から着想を得た短編小説『おとなしい女—荒唐無稽な物語—』は1876年11月号に発表されており、当該月に発表されている評論はないので、ドストエフスキーは1か月間かきりきりになって『おとなしい女』の執筆に没頭していたことになる。

『おとなしい女』では、窓から飛びおりて自殺する女は質屋の妻という設定に変えられていて、「自分を愛するように配偶者を愛することは可能か」という問題が中心テーマに置かれ、「人々よ、互いに愛し合うべし」これを言ったのは誰だ？ これはいったい誰の遺訓だ？」⁸¹という、妻に自殺された質屋の独白で終わっている。この表現は12年前に最初の妻マリヤが死んだ時にドストエフスキーが問題としていた「キリストの教えどおりに人間を自分自身と同じように愛することは不可能だ。掟は地上の個人を結びつけようとしても自我がじゃまをするのだ……」⁸²が依然として未解決であることを示している。

ドストエフスキーは過去に何度も八方塞がりの危機的な状況に陥った経験を持っているが、危機的状況が強ければ強い程、毎回驚くべき対応力を発揮して解決策を考え出してきた。シベリア流刑を終えた後で書かれた『死の家の記録』や債鬼に追われ成就しない恋愛に苦しみながら書かれた『罪と罰』は、暗闇の中でもがきつつも、それぞれ一筋の灯りが見えることで共通している。ところが『おとなしい女』には一筋の灯りも感じられない。

山城むつみは『ドストエフスキー』の第三章「マリヤの遺体とおとなしい女」において『おとなしい女』論を書いており、そこでドストエフスキーの生涯において決定的な意味を持つ他者は最初の妻マリヤであったとしている。ドストエフスキーは生涯で二度結婚しているので、ドストエフスキーの二人の配偶者を比較する先行研究者が多いのは不思議なことではない。

⁷⁹ 1875年12月にゲルツェンの娘エリザベータがイタリアのフィレンツェでクロロホルムで自殺している。

⁸⁰ *Достоевский. Дневник писателя. Т. 23. Л., 1981. С. 145-6.*

⁸¹ *Достоевский. Дневник писателя. Т. 24. Л., 1982. С. 35.*

⁸² グロスマン『ドストエフスキー』222頁。

作家の死後、よくも悪くもその遺品遺稿を手の届く限り厳重に管理したのが、マリヤとちがって「良妻」だった後妻アンナ・グリゴリエヴナであったということは、作家の伝記に現われる最初の妻の面影を限られたものになっているようだ。マリヤはドストエフスキーの生涯において決定的な意味を持つ他者だったはずである。アンナさえ、グロスマンとの私的な会話ではこう語っていたのだ。フォードル・ミハイロヴィッチは最初の妻を熱愛していた。それは彼の「あらゆる喜びと苦悩を伴った本物の強烈な愛情」だった、と。⁸³

山城は、『おとなしい女』が執筆される12年前の1864年4月16日に死んだマリヤが『おとなしい女』執筆に決定的な影響を与えていると見なしているが、筆者はこれに対し次のような三つの問いを提起してみたい。「第一に、死後の12年間を通じて、果たしてマリヤはドストエフスキーに決定的な影響を与え続けていたのだろうか？ 第二に、二番目の妻アンナはグロスマンに対して「ドストエフスキーのマリヤへの熱愛はあらゆる喜びと苦悩を伴った本物の強烈な愛情だった」と発言したとされるが、この発言は「善き人」としてのドストエフスキー像のイメージを植え付けたいアンナの意図に基づくものではないだろうか？ 第三に、悪戦苦闘の中で執筆された『罪と罰』でさえ一筋の灯りを感じさせているのに、12年前に死んだマリヤのことを思い出してドストエフスキーが出口の全くない真っ暗闇に陥るようなことが、果たしてあり得るだろうか？」

以上の問いから、本章では『おとなしい女』を山城とは異なるアプローチで考察する。まず第1節では『おとなしい女』執筆の数か月前にドストエフスキーがドイツからアンナに送った11通の手紙を精査し、この時期の二人の関係を把握する。これを踏まえたのち第2節では手紙で把握した夫妻の関係と『おとなしい女』との関連を探りながら、なぜ、この作品からは一筋の灯りも感じられないのかについて考察してみたい。

第1節:アンナ夫人との関係

ドストエフスキーとアンナの関係を11通の手紙を使って精査する前に、先行研究者たちの見解にふれておきたい。まず、中村健之介は、アンナから見たドストエフスキーについて次のように書いている。

アンナは夫のことを「おそろしいほど不公平な人だ」とも書いている。ストラーホフ⁸⁴以上にアンナこそ、ドストエフスキーの中にかれ自身がどう制御しようもない「ねたみ深く」「わがままな」人間が棲んでいることをよく知っていた。

ドストエフスキーの親友アポロン・マイコフが妻に宛てた手紙には次のようにある。「アンナ・グリゴリエヴナ〔ドストエフスキー夫人アンナ。アンナはマイコフ夫人に何か打ち明け話をしたらしい〕がお前に話したことというのは、そしてお前が手紙に書きたくないと言っていることというのは、いったい何なのだ。彼女の夫は普通では考えられないような性格の持ち主で、それで人を苦しめるというのは、それはまったくの事実なのだが、それはいまに始まったことではない。その時その時の束の間の幻想によって、愛情やら嫉妬やら、ありとあらゆる要求をむきだしにあらわにして、人を悩ますのだ。そんなことはみんないまに始まったことではない。」(1879年6月22日) ドストエフスキーの近くにいた人たちはみな、ドストエフスキーが「奇妙な人」「おそろしいほど不公平な人」「普通では考えられない性格の持ち主」であることを知っていたのである。⁸⁵

⁸³ 山城むつみ『ドストエフスキー』講談社、2010年、202頁。

⁸⁴ ドストエフスキーの友人でドストエフスキー伝の執筆者(1828-1896)

⁸⁵ 中村健之介『知られざるドストエフスキー』岩波書店、1993年、135-6頁。

他方、カーは、ドストエフスキーの妻になることがどれほど大変なことかを予言した人物がいると書き、その上で、アンナ夫人がめざましい成功をドストエフスキーにもたらしたと評価している。

アンナ・コルヴィン＝クリューコフスカヤ（妻であるアンナとは別人：筆者注）は、ドストエフスキーの人生途上をよぎった、最も気持のよい魅力のある人物であろう。ドストエフスキーの創造した中で最も魅力ある女主人公も彼女のおかげで生まれたようなものだが、それだけでなしに、彼の性格や彼らのはかない友情に対する鋭い解釈もまた彼女によって与えられるのである。

彼の妻となる人は（とアンナは妹に語った）自分自身を完全に彼にささげねばなりません。生活をすべて彼にささげ、彼以外のことは何も考えてはならぬのです。しかし私にはできない。私は自分自身生きたい。その上、彼はとても神経がつかれてがつかつと求めるのです。彼はたえず私をとらえて自分自身に私を引きよせようとしているように思えます。彼と一緒にいると私は自分自身には決してなれぬのです。

のちに、同じくアンナではあるが、全然性質を異にしたドストエフスキーの第二の妻が、まことにめざましい成功を以て全く没我的な役割を演ずることになるのだが、この批評こそはそれに対する予言的な見事な分析である。⁸⁶

カーによれば、ドストエフスキーのめざましい成功の裏にはアンナの存在がある。だが、没我的な役割を彼女が終始一貫して果たしたてきたかと言えば、そうではない。結婚して3か月後の1867年5月ドレスデンの下宿先で書かれたアンナの日記には、親戚との金銭問題から国外へ逃れたが、それでもなお親戚のことを意識しつつ賭博にのめり込むドストエフスキーへの不満がくすぶっている。その一節について、カーは現存する彼女の日記において最も激しいものであるとみなしている。

そうだ。彼が自分の家庭について心を悩ますような人でないことは明らかだ。フォードルには、あの馬鹿なドイツ女エミリア・フォードロヴナ⁸⁷が困らないように、フォードル・ドストエフスキー⁸⁸があまり酷い仕事をしないで済むように、パーウェル⁸⁹の要求は何一つ拒ばない（←原文のママ）ように、ということの方が心にかかるようだ。一方、私たちがあれこれと不足勝ちだというようなことは彼にはまったく無関心なのだ—それに気がつきもしない。もちろん、私は彼の妻であり、あの人のものなのだから、私がそんな詰らない不便や困窮はすべて我慢しなければならないと彼は考えているのであろう。多分、彼が一文なしだと私に分っても、私は不平をいってはならないのだろう。しかしエミリア・フォードロヴナやその連中が困らないようにするために、私たちが困るとするならば、エミリア・フォードロヴナの外套を取り戻すために私の外套を質に入れるのだとすると、誰が何といおうと、非常に不愉快な感情が私の中に湧き上がってくる。私の尊敬し、愛している人のうちに、このような不注意、このような理解のなさ、このような思いやりのなさを見出すのは、私には恐ろしいま

⁸⁶ カー『ドストエフスキー』178-9頁。

⁸⁷ ドストエフスキーの亡兄ミハイルの妻のこと。

⁸⁸ ドストエフスキーの亡兄ミハイルの長男のこと。

⁸⁹ ドストエフスキーの一度目の妻マリアの長男、継子のこと。

での苦痛だ。兄は自分を助けてくれたのだから、その家族を助ける義務があると彼はいう。しかしフォードルは私を助ける義務はないのであろうか、私は彼に私の全生命をあたえなかったというのであろうか。彼の幸福のためには心から喜んで苦しむ覚悟で私は自分の魂を彼にあたえなかったというのであろうか。しかし、彼はそんなことは何とも思っていない。それは当然のことだと考えている。妻が平和に生活して、明日は食べるものがなくなるなどと、いついかなる瞬間にも心配させることのないように、彼は心をつかう義務があるとは考えていない。⁹⁰

何とも思っていないとアンナが非難している当事者であるドストエフスキーが、この時期のアンナをどう考えていたかについての書簡が残っている。次の移住地であるスイスのジュネーヴから、親友のマイコフ宛てに投函された1867年8月16日付けのものである。

わたしは病的な性格なので、妻がわたしのためにひどく苦しむだろうと予測していました。(実はアンナはわたしが当初予想し期待していたよりもはるかに強く、奥深い性質を持っており、わたしの守護天使になってくれたことが数多くありました。とはいえ、同時に子どもっぽい、20歳の子らしいところも沢山あって、それはそれで素晴らしいし自然でもあります、ただわたしの方できちっと対応する力や才能を持っていないのです。ロシアを発つ際にそういったあれこれが頭に浮かんで来ました、とはいえアンナは、繰り返しますが、わたしが当初予想し期待していたよりもはるかに強く、奥深い性質を持っていることがわかりました。それでもやはり、まだ安心出来たわけではありません。)⁹¹ [……]

何より悪いのはわたしの本性が低劣であり、かつ極端に熱中することにあります。何処へ行こうが、何をしようがわたしはとことんまで行ってしまいます。これまでもずっと境界を超えてしまうことばかりだったのです。⁹²

ドストエフスキーによるこのアンナ評は、彼女の長所をかなり正確に見抜いていると同時に、自らの力不足についても書いている。引用の後半部分は自己評価であり、自分の病的な性格を自覚し友人に伝えている。自己評価について重要なのは、一旦興味を持つ対象が現れると境界を超えることを厭わず突き進むという自分自身の特性をドストエフスキーが自覚し、友人に告白している点である。

さて、それから9年が経過した1876年夏のアムスで書かれた手紙では夫婦の関係はどう変化しているのだろうか。ドストエフスキーは7月5日に、妻と二人の子どもを当時居住していたペテルブルグ南方ノヴゴロド県のスターラヤ・ルーサに残し、ドイツの鉱泉地エムスに向けて出発する。エムスはドイツ西部フランクフルトの近辺に位置しており、鉱泉治療のためにドストエフスキーは当地を3年続けて訪問している。1876年夏の手紙は11通残っており、最初の日付が経由地であるベルリンからのもので7月7日付け、それ以降のものは全てエムスからで最後の日付が出発前夜の8月6日付けとなっている。これら11通の手紙を読んで印象に残るのは、アンナ夫人に対する賞賛、気遣いと尋常ならざる心配である。まず賞賛の例として7月24日付けのものを引用する。

余人をもって代え難い貴重なる妻アーネチカ、天使のような7月18日付けの可愛い手紙に対して息が詰まるほど君に接吻します。愛する人よ、どうして君は自分のことをありふれた女性と呼ぶのでしょうか？ 君は滅多にいない女性で、どんな女性よりも

⁹⁰ カー『ドストエフスキー』247-248頁。

⁹¹ *Достоевский. Письма 1860-1868. Т. 28 Книга Вторая. Л., 1985. С. 205.*

⁹² *Достоевский. Письма 1860-1868. Т. 28 Книга Вторая. Л., 1985. С. 207.*

優れています。君は自分の才能を疑っていますよね。でも君は家政全般にあずかるのみならず、わたしの仕事はもとより、家族みんなの心配事や厄介なことまで、それに自分のことまで全部やってくれています。しかもわたしの仕事にさえも細かい所まで尽力してくれています。夜も寝ずに『作家の日記』の購読者リストの整理や経理に尽くしてくれています、そう当面はもっとお金が必要ですよね、将来に備えなくっちゃね。

でもこんなことぐらいは君の力からしたら何でもないのです。君を女王さまにして、完全無欠な王国を与えることを望みます。誓ってもいいです。君は王国を統治するでしょう、どうにもならない国を治めることになったとしても、君には知恵があります、健全な理解力や感情、処理能力までもが。君は「どうしてわたしのように若くなく、美人でもない女を貴方は愛することが出来るのでしょうか」と追伸で書いてますよね。君が言ってるのは全くの的外れです。わたしにとって君は魅惑そのものであり、余人をもって代え難いのです。見る目のある人が君を見たら、誰でもそう言うに違いない。君のことで時々嫉妬するのはその為です。⁹³

アンナが家政全般に優れていることに加え、ドストエフスキーの仕事の処理にも尽力していることが分かる。知恵に加え健全な理解力、感情、処理能力までも兼ね備えたアンナの美質をドストエフスキーは正確に認識し、アンナ讃歌とでも呼ぶべきものを書いている。7月15日付けの手紙ではアンナの過労が気遣われている。

愛する人よ、君の事で胸が痛む。ここエムスでよく考えてみた、君がどれほど悩み、どれほど働いているか。そしてその見返りは何なのかを。少しは収入が増えるかもしれない、でもそれは来年のことであって、取らぬ狸の皮算用ではないだろうか。わたしはね、アーニャ、どうにもならないほど君に恋焦がれているので、君以外のことは何も考えられないのだよ。今年の冬はこうなって欲しいと考えている。スターラヤ・ルーサにいて二人で健康を取り戻し、ペテルブルグに移動するんだ。これ以上わたしの為に速記や清書をしてもらうことはない。わたしは決めたんだ、予約購読者がもし増えたら、助手を、例えばニキフォロヴァ⁹⁴を何が何でも採用するのだ。⁹⁵

これらの手紙を読むと、アンナが25歳の年齢差を感じさせない素晴らしい力量を持った伴侶としてドストエフスキーから信頼されていると判断できよう。とはいえ同時に尋常ならざる心配や愛の告白も手紙の内容から読み取れる。エムスから投函された7月13日付けの書簡から引用する。

君が水曜日に投函した（最初の）手紙を今日やっと受取りました。もう火曜日なのに。今になって考えると、去年も5日目にしか届きませんでした。あの忌々しいペテルブルグ中央郵便局が（検閲の為に：筆者注）留め置いているのでしょうか。なぜあれだけ心配したのかよく分かりませんが、昨日は君のことをとても心配していました。帰宅の道中で君に何かが起こっている、病気か何かと思いこんでしまったことが問題だったのです。思い出して下さい、ペテルブルグでお別れを言った時も色んな心配を洗いざらい君に話しましたよね。そんなわけで昨夜は4時間も寝ていません。寝付くことも、考えを纏めることも出来ませんでした。[……]

でも今はとても嬉しくてこの手紙を書いています、良かったです。昨日のわたしの

⁹³ Достоевский. Письма. 1875-1877. Т. 29 Книга Вторая. Л., 1986. С. 112.

⁹⁴ アンナの友人で、少し先には出版関係業務を手伝うことになる人物。

⁹⁵ Достоевский. Письма. 1875-1877. Т. 29 Книга Вторая. Л., 1986. С. 98-99.

手紙⁹⁶は、君には気に入らないものかもしれませんが。でも他にどうしたらよかったですでしょう、わたしはもう少しで気が狂いそうだったのです。⁹⁷ 昨日の手紙には、火曜日（本日のこと：筆者注）中に電報で返事を貰えなければ、水曜日にエムスを出発するという数行を書き込もうとしたぐらいです、結局は削りましたが、何が何でもそうするつもりでした。でも有難いことにうまくいきました。君に接吻し、熱愛しています。⁹⁸ [……]

長く離れていた後はいつも、わたしが君に恋焦がれ、魂を奪われたような状態で家に帰るのをご存知ですよね。でもね、わたしの天使よ、今回は少し違うのです。君に魂を奪われたような状態でわたしがペテルブルグを出発したことに、君はおそらく気づいていたのではないのでしょうか。二人でかなり言い合った後で、わたしはぶつぶつ言いながら旅行の支度を始めて苛々していたのです（これがわたしの性格なのです）が、同時にわたしは君に恋焦がれだし、直ぐにそれをはっきりと理解して、驚きさえたのでした。[……]

ペテルブルグで過ごした最後の数日間、君に恋焦がれた原因は二人で一緒に寝たからではないかと、エムスで脳裏に浮かんで来たことを想像してみてください。もう長い間一緒に寝ていませんでしたね、何年もです（子どもたちが誕生してからです）、これが私に影響を与えたのかもしれませんが。アーニャ、こんな考えは即物的過ぎると言わないで下さい、即物的なだけではないのです。[……]

わたしがエゴイストだったのは事実です。君は椅子で眠り、気詰まりに思ったことでしょう、朝まで一人で寝ていても、わたしは、君が傍にいて呉れることで、またこの感覚がわたしにとってとても新鮮なものなので、楽しくなりました。昔は我々も一緒に寝ていました、そのことを長い間忘れていたのです。⁹⁹

じつを言えば、この手紙は性的な事柄についての記述が多い。そのことを示すのは伏字の多さである。手紙の公表にあたって、アンナが具体的事実や過度に性的な表現に伏字を施しているからである。この伏字だらけの手紙は「苦痛と思えるまでに君を愛している、アーニャ、わたしの事を笑わないで欲しい。君に愛を告白する事にすら愉悅を感じる」¹⁰⁰と結ばれている。この時期のドストエフスキーとアンナの関係についてラヴリンは次のように書いている。「ドストエフスキーが年が経つとともに、ますます、まだ若い自分の妻に（性的な意味でも）魅かれていたことは、真に注目し値する。温泉地エムスから彼女に宛てた手紙は、彼の年齢の者が書いたものというよりも、むしろ、官能に溺れた、恋する若者を思わせる」。¹⁰¹

ここで重要なのは二人の間で何があったかではなくて、この時期のドストエフスキーが妻のことばかり考えていた、いや妻のことしか考えられなくなっていたという事実である。ドストエフスキーは「何処へ行こうか、何をしようかわたしはとことんまで行ってしまいます。これまでもずっと境界を超える事ばかりだったのです」¹⁰²と自らを評していたことを既に紹介しているが、その通りの状態に陥っている。次に7月26日付けの手紙を取り上げてみたい。

⁹⁶ *Достоевский. Письма 1875-1877. Т. 29 Книга Вторая. Л., 1986. С. 254.* ドストエフスキーが妻宛てに送ったというこの手紙は残っていない、その内容はわかっていない。

⁹⁷ *Достоевский. Письма 1875-1877. Т. 29 Книга Вторая. Л., 1986. С. 95.*

この頁の注釈にこの手紙の行方は不明と書かれている。アンナ夫人が何らかの理由で公表しなかったようである。1876年の夏にエムスからアンナ夫人に宛てて送られた手紙が11通以上あったことは確実である。

⁹⁸ *Достоевский. Письма 1875-1877. Т. 29 Книга Вторая. Л., 1986. С. 95.*

⁹⁹ *Достоевский. Письма 1875-1877. Т. 29 Книга Вторая. Л., 1986. С. 97.*

¹⁰⁰ *Достоевский. Письма 1875-1877. Т. 29 Книга Вторая. Л., 1986. С. 97.*

¹⁰¹ ラヴリン『ドストエフスキー』理想社、130-131頁。

¹⁰² *Достоевский. Письма 1860-1868. Т. 28 Книга Вторая. Л., 1985. С. 207.*

わたしの天使よ、わたしが嫉妬していると、そんなに心配して貰うことは無用です。わたしは少し苦しみました、今では全て良い方に考えています。アーニカについては常に信じて来たし、これからも信じていきます。でもこの件については、後日そちらに着いてから思う存分話しましょう。[……]

何があっても8月7日にはエムスを発ちます。なので、可愛い天使よ、君はこの手紙に答えて、8月2日に手紙を出して下さい（絶対にですよ、1日に書いて、2日には必ず発送するように）。わたしは6日に受取ることになります。出発前日になります。この手紙の後、つまり2日の発送以降は、書いて貰わなくていいです。わたしの方ではギリギリまで書き続け、出発前日にも送ろうと思っています。[……] 君のことを夢に見ました。[……]

追伸 :ところで君はわたしのことを夢に見たことは一度もなかったのでしょうか？ 103

この手紙からは、嫉妬がドストエフスキーを過度に追い詰めていたのではないかと、アンナがかなり心配していたことが想像できる。嫉妬の話題が夫婦間で取り上げられた理由や、どういう展開を経て決着したかについてはよく分からないし、あまり重要とも思えない。重要なのは、いったん気になり始めると直ぐに境界を超えてしまうドストエフスキーの性癖の方である。7月26日付けの手紙に対する返事を6日後の8月1日に書けという依頼はそもそも可能なのであろうか？ アンナの最初の手紙がエムスに届いたのが投函後6日目であった理由がペテルブルグ中央郵便局の検閲にあるのではないかとドストエフスキーが毒づいていたことは既にご紹介した通りである。勿論、到着した当日に、折り返して返事を書くことは不可能ではない。ただ、返事を書くことを他のことに優先させる強い意志を要求していることになる。良い乳母が見つからないので6歳の長女と4歳の長男の世話を一人で見なければならず、しかも予約購読者の管理事務などで忙しくしているアンナに本当に配慮しているならば普通は書かないだろうというのが率直な感想である。しかも、前の年は5日間、この年もロシアからの最初の手紙が6日かかって到着しているのに、最後の返書だけはきっと4日で到着すると勝手に想定して、無理な依頼をしていることも理解に苦しむ。8月7日にエムスを出発し、スターラヤ・ルーサに12日に到着するという予定をドストエフスキーは立てているので、到着してから話せばよいことなのだが到着するまで待てない。何が何でも自分のエムス出発までに返事が欲しいのである。夢の話も奇妙である。幼児二人を抱えてクタクタになって睡眠を取っているであろうアンナ夫人に自分のことを夢に見たことが一度でもあったのか？ との質問をわざわざしている。

結婚初年度の1867年ドイツに出国した際にアンナを悩ませたものは、親戚への扶養義務を妻へのそれより優先させる夫の態度と、止めることが出来ない賭博癖であった。9年にわたる夫人のたゆまぬ努力によって、完済には未だ3年を要したものの、借金問題にも目途がつき、長期間にわたってドストエフスキー家の頭痛の種となっていた債権者と親戚の問題はほとんど解決しつつあった。その代わりに新たな問題が生じて来た。妻アンナへの過度な依存である。外部から見れば、大作家と聡明な妻の関係は持ちつ持たれつの理想的な関係かと思われるが、ドストエフスキー本人にとってはそうではなく、自らの苦境脱出に果たしたアンナの役割は、まさに余人をもって代えがたいものであった。八方塞がりの中で『罪と罰』の構想を練っていた1865年のドストエフスキーは全ての役割を一人でこなす必要があった。それに比較すると、1876年のドストエフスキーにはアンナという味方がいる。アンナは、編集者兼マネージャーとしての役割を持っていた亡兄ミハイルが果たしていた役割を完璧にこなしている。その妻がいなくなれば、債権者との交渉や軌道に乗りかけた『作家の日記』の運営や経営がうまくいかなくなることは明白であるし、子どもたち

103 *Достоевский. Письма 1875-1877. Т. 29 Книга Вторая. Л., 1986. С. 115-116.*

の世話や家政のコントロールもうまくいかない。おまけに自分は25歳年下の妻に性的魅力を感じている。作家はアンナなしの人生は考えられなくなっていて、そのことを11通の書簡が色濃く示している。『おとなしい女』執筆2-3か月前のドストエフスキーの心理状態は、そういったものであったように思われる。

第2節:一筋の灯りも見えない『おとなしい女』

第2章の小括で論じたように、ドストエフスキーは『罪と罰』で一つの思想的な到達点に達している。それ以降の彼は生を礼賛する姿勢を取り続ける。死んでしまえば全てがおしまいだ。どんなに苦しくても猫のようにしたたかに生き続け、五感を十分に働かせて心の奥からの声に柔軟に耳を傾ける姿勢が重要である——生を礼賛する姿勢を、ドストエフスキーは生涯にわたって揺らぐことなく取り続ける。

ところが、ドストエフスキーにとっては赤の他人であるはずの無名のお針子の自殺¹⁰⁴が彼を震撼させたのである。「他人の自殺を自分の責任」¹⁰⁵と考えてしまった作家は1か月のあいだ評論活動を棚上げにし、『おとなしい女』の執筆に没頭する。

『おとなしい女』では自殺者はお針子から質屋の妻に変更されている。¹⁰⁶ 他者の自殺を考えるにあたり、配偶者との確執から自殺する女性を、ドストエフスキーが主要な作中人物に据えているのはなぜだろう。その理由はアンナにあると思われる。すなわち、ドストエフスキーにとって最も身近な他人であり、何人にも代えがたい最愛の人アンナが、自分から去ってしまうことへの不安が、『おとなしい女』を書かせたのではないか。もしかするとアンナが去って行ってしまふかもしれない——そんな不安がドストエフスキーを悩ませた時、彼は創作を通して夫婦間に潜む問題をつぶさに検討しようとした。実際にも、この短編の主人公である質屋夫妻とドストエフスキー夫妻はよく似ている。『おとなしい女』には16歳の質屋の妻と41歳の夫が登場し、二人の年齢差は25歳であるが、ドストエフスキーとアンナの年齢差もやはり25歳¹⁰⁷であって、中年男と年若い妻という組合せの構図も作品に一致している。また、『おとなしい女』執筆の2-3か月前にドストエフスキーがドイツの鉱泉地エムスからアンナに11通の手紙を送り、その中で夫婦関係について考えていたことも見落とせない。以下、本節では、アンナとの別離への不安からドストエフスキーが夫婦間に潜む問題を創作において点検していると考えて、『おとなしい女』を読み解いていきたい。

1) 支配する夫と沈黙する妻

『おとなしい女』は自殺した妻の夫の視点から物語られており、一見するとモノローグ形式の作品と思えるが、じつは夢想家である夫の理想と、それに反撥する妻の相剋がポリフォニックに描かれている。この小説の中心テーマは「自分を愛すると同じように配偶者を愛する事は可能か」という問題である。

短編は「著者より」(От автора)という前置きから始まる。「まず一人の夫を想像してい

¹⁰⁴ *Достоевский. Дневник писателя. Т. 23. Л., 1981. С. 146.*

無名のお針子の自殺については、第3章の冒頭で引用している『作家の日記』1876年10月号の「二つの自殺」を参照されたい。

¹⁰⁵ *Достоевский. Дневник писателя. Т. 23. Л., 1981. С. 146.*

「長い間にわたって考えることがやめられず、妙に目について、それが自分自身の責任のようにまで思われる事実がある。」という記述が『作家の日記』1876年10月号の「二つの自殺」でなされている。

¹⁰⁶ *Наседкин Н. Н. Достоевский Энциклопедия. М., Алгоритм, 2003. С.94.*

ドストエフスキー百科事典では、1876年9月30日に飛び降り自殺したマリヤ・ボリソワと、遺書の偽造容疑で当時の新聞記事で話題になっていた退職近衛兵で高利貸のセドコフの訴訟事件が組み合せられているという見解を採用している。

¹⁰⁷ ドストエフスキー(当時46歳)とアンナ(同21歳)がペテルブルグで結婚したのは1867年2月15日で年齢差は25歳であった。ちなみに最初の妻マリヤはドストエフスキーより7歳年下であった。

ただきたい。自殺したその妻は数時間前に小窓から身を投げ、遺骸がテーブルの上に安置されている。彼は狼狽してしまって、自分の考えを未だに纏められない。彼は部屋の中を歩き回りながら、この出来事の意味を理解しよう、「自分の考えを一点に集中しよう」と、努めている」。¹⁰⁸ ここから物語はこの夫婦の出会いへと焦点を移していく。質屋を営む語り手の「わたし」のもとに、両親を亡くした16歳の女が質入れにやって来る。彼女と接するうちに、「わたし」は好意を抱いて結婚を申し込むが、条件を付ける。「わたしは、彼女が初めのうち、ひどく不安に思っているのが分かっていたが、不安を減らそうとせぬばかりか、わざと煽り立てるように、食べることに不自由はさせぬが、着飾ったり芝居や舞踏会等の贅沢は一切させない、贅沢は将来目標を達してからの話だと、率直に言っておいた。厳格な調子で言うこと自体に、わたしは夢中になったのである」。¹⁰⁹

こうして二人は結婚するが、夫は自分の持つ夢想家としての理想を自ら説明しなくとも、妻自身が自ら洞察し理解することを強制する。つまり自分は変わらずに、妻が自発的に変わることを強いている。妻は当初は言い争うが、しだいに沈黙で対抗するようになる。

当初は諍いのようなものは無かったが、やはりだんまりを決め込んでいた。覚えているが、彼女は其の頃いつも何やらこそこそわたしを盗み見していた。わたしはそれに気づいていたが、ますます沈黙を強めた。[……]「叛逆と独立」——これなのであった。できはしなかったが。そう、あのおとなしい顔が段々ふてぶてしくなっていく。打ち明けて言うなら、彼女はわたしが虫唾が走るほど嫌になってきたのである。わたしはそれをちゃんと観察していたのだ。¹¹⁰

二人のあいだに陰悪なものが漂いだした頃、昔の連隊仲間のエフィーモヴィチと妻が逢引の約束をしたことを夫は知り、その現場を立ち聴きする。夫はエフィーモヴィチへの妻の応対に満足感を感じ、逢引の現場に割って入り、彼女を連れ帰る。

それから家へ着くまで一言も口をきかなかった。わたしは彼女の腕を取って歩いたのだが、彼女は抵抗しなかった。それどころか、彼女は深い驚愕に打たれていて、それが家へ着くまで続いた。家に着くと、彼女は椅子に腰を下ろして私の顔をじっと見すえた。彼女は驚くほど真っ青だった。唇は直ぐに冷笑の色を浮かべたけれど、彼女は直ぐに真面目くさった厳しい挑戦の面持ちで私を見つめた。当初は、わたしがピストルで彼女を射ち殺すものだと思込んでいたようだ。しかしわたしは黙ってポケットからピストルを取り出してテーブルの上に置いた。¹¹¹

このピストルは質屋が防犯目的で常時保管していたもので、彼はその扱いを妻に教えたことがある。翌日の早朝、妻がピストルを手にして接近していることに就寝中の「わたし」は気付くが、あえて寝たふりを続ける。「諸君は質問されることだろう、助かると期待していたのかと。わたしは神に誓って諸君にお答えしたい、百に一つも期待していなかったと。何の為に死を受け容れようとしたのか？ では、逆に質問しよう、自分が心から愛する存在からピストルを向けられた後の人生に何の価値があるのか？」¹¹²

結局、妻は夫を撃たなかった。最愛の妻が撃たなかったことに「わたし」は大きな達成感と勝利感を感じたが、妻を許す代わりに罰を与える。ここで重要なことは、夫は罰の理由を妻に説明していないことである。

¹⁰⁸ Достоевский. Дневник писателя. Т. 24. Л., 1982. С. 5.

¹⁰⁹ Достоевский. Дневник писателя. Т. 24. Л., 1982. С. 10-11.

¹¹⁰ Достоевский. Дневник писателя. Т. 24. Л., 1982. С. 15.

¹¹¹ Достоевский. Дневник писателя. Т. 24. Л., 1982. С. 20.

¹¹² Достоевский. Дневник писателя. Т. 24. Л., 1982. С. 20-21.

我が家へ彼女を迎えるにあたり、わたしは親友を迎えるのだと考えた。親友がどうしても必要だったのである。しかも親友を養成し、完成させ、征服までしなければならぬと、はっきり考えていた。

十六歳になったばかりで、先入観を抱いている娘に、直ぐに説明することができただろうか？ ピストル事件の恐ろしい惨事といった偶然の助けが無かったら、どうすれば自分が臆病者でないことや連隊が私を臆病者と宣告したのは不公正だったことを彼女に明言できただろうか？ 惨事はタイミングよく起こってくれた。ピストルの試練に耐えたわたしは陰鬱な過去の全てに復讐したのである。このことには誰も気が付いていなかったが、彼女は気づいていた。このことがわたしにとって決定的であった。なぜなら、彼女こそがわたしにとってすべてであり、夢におけるわたしの未来のすべての希望だったからだ！ [……]

一言で言うなら、わたしは意図をもって大団円を引き延ばしたのであった。あの出来事はさしあたってわたしを安心させるのに十分だったし、わたしの夢には十二分といえる多くの光景と材料を含んでいた。わたしが夢想家だったことが良くなかったのだ。わたしの方では材料が十分足りていたので、彼女の方でも待ってくれるだろうと考えてしまったのである。¹¹³

会話不在の状態はピストル事件の前と後で変化していない。「夫という人間を洞察し、理解することを自発的におこなわせる」ことを企図した夫の罰は、妻がどのような心理状態にあるかを考慮していない。夫は妻に憐憫を感じると同時に彼女の屈服が嬉しくてたまらなると吐露している。憐憫を感じている部分と度外れた自意識が同居している。身近にいる最愛の妻を愛おしいと思う声より、自分で創り出したルールや自分の満足感を優先している。普遍的なレベルでなら、人類愛を巧みに語ることでできる人間が、個別的なレベルになると、最も身近で、しかも深く愛している人でさえ、支配したいと望んでいることが表現されている部分である。

2) 妻の異変

春になって二人の関係に異変が起こった。長らく沈黙していた妻が不意に歌を歌い出したのである。

突然、彼女がわたし達の居間の自分の机で仕事をしながら低い低い声で、……歌い始めたのが聞こえた。この珍しい出来事がわたしの心に驚くべき印象を与えた。[……]

当初、少なくとも最初の数分間は、疑惑と恐るべき驚愕が突如姿を現した、それは恐ろしくかつ奇妙で、病的かつ執念深い何かであった。『歌っている、しかも俺の傍で！ 彼女は俺の事を忘れたのか、一体どうしたんだ？』¹¹⁴

長い冬の期間中、許さない状態のまま放置していた妻の状態が明らかに変調したことに夫は気づく。仰天した夫は妻に駆け寄るが、何も言わない妻の「厳しい驚き」に粉碎される。「お前はまだ愛が要るのか」と問い質されているように夫は感じる。彼は妻の変調に驚き、このままの生活を続けてはいけないと判断し、質屋を畳んでブローニュで新しい生活を始めようと提案する。妻に謝罪し、妻との夫婦生活を何よりも大事にするという決断を行うが、「おとなしい女」が夫に期待していたのはそれまで通りの生活を続けることであり、ブローニュでの新生活ではなかった。夫はブローニュで新生活を始めさえすれば

¹¹³ Достоевский. Дневник писателя. Т. 24. Л., 1982. С. 24-5.

¹¹⁴ Достоевский. Дневник писателя. Т. 24. Л., 1982. С. 26-27.

すべてが良い方向に向かうと、一人よがり決めこんで、妻の言葉を正確に理解しようとしていない。

しかしわたしは彼女の恐怖に気を留めなかった、新しいものが燦然と輝いていたのだ！……わたしが過ちをしてしまったことは事実である。疑う余地の無い事実である。複数の過ちだったかもしれぬ。わたしは次の日、目を覚ますなり朝っぱらから（それは水曜日のことだった）、早速過ちをしてしまった。急いで彼女を自分の親友にしてしまったのである。わたしはあまりに、あまりに、急ぎ過ぎたのだが、懺悔は必要であり不可欠であった——いや懺悔以上のものだった！
わたしはこれまで自分に隠してきたことさえ隠さなかった。¹¹⁵

ブローニューでの新生活のことばかりを考え妻の恐怖には鈍感なままの夫だったが、妻に対する懺悔を誠実に行い、本心を吐露して夫なりの方法で筋を通している。

彼女は本当に、全てがそれまで通りであり続けると信じていたのだ、それまで通りに、二人が六十歳になるまで、彼女は自分のテーブルに座り、わたしも自分のテーブルに座っているのだと信じていたのだ。ところが突然——わたしが夫として近づいてくる、そして夫には愛が必要である！ おお、何という誤解、何という盲目さ！¹¹⁶

夫はブローニューでの新生活ですべてが解決すると決めてしまい、性生活の急な再開を含め、妻が望まない行動を急ピッチで進めてしまう。ブローニューへの外国旅券を取る為に外出した夫の不在中に、家政婦が妻の様子を見にいくと、妻は、両親との思い出の象徴である聖像を胸におしつけたまま、投身自殺に踏み切る。「彼女はわたしの愛に吃驚したのだ。そしてわたしの愛を受けたものかどうかを深刻に自問し、深刻さに堪えかねて、死を選んだのだ」。¹¹⁷ 帰宅した夫は五分前に妻が投身自殺をしたことを知り、初めてことの重大さに気づく。

どうしても知りたいことは、彼女がわたしを尊敬していたかである？ 彼女がわたしを軽蔑していたかどうかの有無は分からぬ？ が、軽蔑していたとは思えない。わたしを軽蔑しているかもしれぬという考えが、冬の間一度も私の頭に浮かばなかったのが、なぜなのか不思議でたまらない。

わたしは、あの時、彼女が厳しい驚きで私を見た、正にその瞬間まで、全くのところ、正反対のことを確信していたのであった。まったくのところ、厳しい驚きであった。わたしは即座に、彼女がわたしを軽蔑していることが分かった。永久に取り返しがつかないことが分かった！ ああ、いくらでも軽蔑してくれ、いくらでも、例え一生にわたってでもいいのだ——生きてさえ、生きてさえいてくれたら！¹¹⁸

妻を安心させることよりも自分のやりたいことを優先してしまった夫がいくら後悔しても覆水が盆に返るわけではない。この小説の中心テーマである「自分を愛するように配偶者を愛する事は可能か」がここで問われている。

「人々よ、互いに愛し合うべし」——これを言ったのは誰だ？ これはいったい誰の遺訓なのだ？ 時計の振り子は、無感覚で嫌な音を立てている。夜中の二時だ。彼女の

¹¹⁵ Достоевский. Дневник писателя. Т. 24. Л., 1982. С. 29-30.

¹¹⁶ Достоевский. Дневник писателя. Т. 24. Л., 1982. С. 31- 32.

¹¹⁷ Достоевский. Дневник писателя. Т. 24. Л., 1982. С. 33.

¹¹⁸ Достоевский. Дневник писателя. Т. 24. Л., 1982. С. 34.

小さな靴が、彼女を待っているかのように、小さな寝台の傍に並んでいる…… いや、真面目な話だが、明日彼女が運び出されたら私は一体どうしたらいいのだ？¹¹⁹

短編小説はここで終わっている。最愛の妻を失った夫が最終的に何を感じ、反省しようが、全ては遅すぎるのである。「どうしたらいいのか」という主人公の夫の嘆息が象徴しているのは、問題の解決策が見つからないことである。

小括：

第3章に書いた内容を時間軸で並べると、ドストエフスキーがエムスからロシアへ向け帰国したのが1876年8月7日、お針子が自殺したのが9月30日、それをもとに『作家の日記』に「二つの自殺」について書いたのが10月、自殺者を質屋の妻に変更して『おとなしい女』を発表したのが11月である。他の評論は全て棚上げにして人妻の自殺問題に集中しているので、執筆時のドストエフスキーの関心が夫婦の破綻にあったことは間違いないであろう。ドストエフスキーはアンナの喪失を真剣に怖れた。極度の心配性であるドストエフスキーのアンナへの依存の度合いはそれほどまでに大きかった。依存の度合いが大きければ大きい程、アンナを喪失した時の絶望の度合いも大きなものとならざるを得ない。この点にかんしてグロスマンの次のような解説が示唆的である。

この短編小説（『おとなしい女』：筆者注）の後書きには、何もかも持ち去られた人間の孤独な絶望が描かれている。[……] これは世界文学のなかでもっとも力強い絶望の小説の一つである。告白する主人公は、著者が説明するところによれば、破局に仰天しながらも、懸命に「自分の考えを一点に集中しよう」としている。彼の複雑極まる弁証法で、ぜひとも発見しなければならないのに依然として秘密のままに解明されない真実の苦しい模索が押し進められて行く。これはドストエフスキーの全作品のなかでおそらく内的独白のもっとも優れた見本といえるだろう。[……] 彼は『おとなしい女』を「幻想的な物語」と称したが、序文では自分のこの試みを「最高度にリアルなもの」と考えていると言っている。¹²⁰

「ドストエフスキーは自分の古いメモから妻殺しの話のプランを取り除いて、内面的悲劇はそのまま保存しながら、女主人公に新しい特徴を付け加え、まるで違った結末にして、作品の調子をすっかり変えてしまった」¹²¹ と上記の引用の前に書かれているので、グロスマンは筆者と違ってアンナに注目しているわけではない。ただし、「何もかも持ち去られた人間の孤独な絶望」や「ドストエフスキーの全作品のなかでおそらく内的独白のもっとも優れた見本」という箇所は執筆時のドストエフスキーの心中を的確に表現していると思われる。「この試みを「最高度にリアルなもの」と考えている」という部分は、『作家の日記』1876年11月号から全ての評論を外して、夫婦間に潜む問題を考える試みがドストエフスキーにとって緊急の課題であり、「最高度にリアル」であったことをよく示している。

『おとなしい女』において、妻の喪失を避けるためのありとあらゆる点検をドストエフスキーは行ったはずである。厳格なルール、会話の不在、押金主義、自分が変わることなしに妻に理解してもらおうという希望、性生活の在り方、これらの全ての項目はドストエフスキー夫婦にも当て嵌まりそうな問題である。

エムスから出した7月15日付けのドストエフスキーの手紙には、アンナがこの時期でも速記を続けていたと書かれているので、『おとなしい女』もアンナの口述速記によって書き

¹¹⁹ Достоевский. Дневник писателя. Т. 24. Л., 1982. С. 35.

¹²⁰ グロスマン『ドストエフスキー』374頁。

¹²¹ グロスマン『ドストエフスキー』371頁。

留められていた可能性が高い。¹²² アンナに口述する過程で、ドストエフスキーにとって一番重要であった伝言だけは確実に行われたはずである。記録が残っていないので、推測するしかないのだが、それは、おそらく、「アンナが一番大切な人なので、離れて行かないで欲しい」というものであったと思われる。アンナが自分とともに生きてくれるならば、「おのれみずからの如く他の人たちを愛す」という境地に行きつかなくても、一筋の光も見えない暗さで小説が終わっていても、まだ時間は残されているのである。「生きてさえ、生きてさえいてくれたら」という短編に書かれている独白をアンナに伝える目的でドストエフスキーが『おとなしい女』を書いた可能性を完全に否定することは難しい。

『おとなしい女』がアンナのことを意識して書かれたのではないかと思われる理由がもう一つある。それは、『おとなしい女』のヒロインである妻の名前が書かれていないことである。ドストエフスキーはヒロインの名前に、『地下生活者の手記』でリーザを使っていたように具体的な名前を書くことができたはずなのに、そうはしていない。ドストエフスキーの全作品中でアンナの名前が使われているのはたった一度きりで、それもアンナと結婚する前の1846年の処女作『貧しき人々』のアンナ・フォードロヴナだけとなっている。これに対し、一人目の妻マリヤの名前を使った回数は9回で、結婚する前に書かれた1848年の『ボルズンコフ』では二人の名前として使っており、マリヤの死後も1866年の『賭博者』、1871年の『悪霊』、1876年の『百歳の老婆』、1879-1880年の『カラマーゾフの兄弟』の各作品で一人ずつの名前として使っており、1870年の『永遠の夫』、1875年の『未成年』には、それぞれ二人ずつの名前に使っている。

夫婦間で実際に会話があったかどうかは興味を引くことではあるが記録が残っていない。ただ、1867年9月16日付けのアンナの速記日記に、ドストエフスキーとの会話が記録されているので、その一部を最後に引用しておきたい。

わたしは黙っていたが、少し後で、夫が自分のことをそんなにも罵るのを我慢したくないこと、悪口雑言には慣れていないこと、もし、<今にいたっても？>罵る癖がぬけていないのなら、もう夫の言うことは聞かないつもりだと言ってやった。こんな風にわたしたちはかなり激しくやりあうことが多かった、言ってしまえば、うまくいったので、それ以上喧嘩をするのがいやになり、仲直りするように努めるのだった。

しかし今日のフェージャはとて執念深かった。長い間わたしを叱責して、ついには、千人に十人と評価していたが、百人に百人の普通の女だとわかった、と言ってわたしを侮辱した。しかしこんなことは言ってもしかたがない。自分の妻が賢く、善良で、教養に溢れていると思っている亭主がいないことは明白だし、そう、こんなことを言うべきでないことも、まったくのところ、明らかではないか。

晩にフェージャは口述した。わたしは書きながら泣いていた。わたしがこの世の誰にもまして愛している人がわたしを分かってくれず、その人がわたしの中に、わたしが持っていない数々の欠点を見つけ出すのだ。そう考えただけで、悲しくて悲しくてならなかった。後でフェージャは、おまえはなんで泣いているんだ、話してごらん、と言った。でも、話せば長くなるし、どうせわかってもらえないのだから、話すことなんかないし、そう思って話はいいかげんにして切り上げた……¹²³

この引用は、ジュネーヴ滞在時に略号を使った速記で書かれたもので、『おとなしい女』

¹²² Достоевский. Дневник писателя. Т. 24. Л., 1982. С. 385.

ソ連アカデミー版30巻全集に、「1876年11月号の後半部に関するテキストの断片が А. Г. Достоевская によって手書きで書きこまれていることが、一つの例として、知られている」との記述がなされている。この記述は、『おとなしい女』のテキスト作りにアンナ夫人が参加していたことを示すものである。

¹²³ Щербина В. Р. (Глав. Ред.) и др. Расшифрованный Дневник А. Г. Достоевской // Литературное Наследство ; Т. 86. М., 1973. С. 183.

執筆直前のものではない。¹²⁴ とは言え、『おとなしい女』における夫婦の会話に繋がるものを持っているし、何よりも、「どうせわかってもらえない」とアンナが思っていた事実は重い。

『おとなしい女』では「自分を愛するように配偶者を愛する事は可能か」という重要な問題が中心テーマに置かれているのだが、ドストエフスキーは、『おとなしい女』では解決できていない。この問題の解決は、5か月後に発表される『おかしい人間の夢』まで待たねばならない。

一筋の灯りすら感じられず、出口が全く見えない真っ暗闇のまま終わる『おとなしい女』だが、むしろこの暗さによってドストエフスキーの思想はさらに深化していった。『おとなしい女』の最大の意義はこの点にこそ求められるのではないだろうか。

¹²⁴ 略号を駆使してアンナにしか読めない特殊な速記法で書かれているので、ドストエフスキーを含めて他の人間には理解不能な形で書かれている。

第4章:『おかしな人間の夢』

『おかしな人間の夢—荒唐無稽な物語—』は靈魂の不滅と善行の問題についての短編であり、同じ副題を持つ『おとなしい女—荒唐無稽な物語—』の5か月後に発表されている。『おとなしい女』の主人公は、全編を通じ茫然自失状態で狼狽しているだけで真っ暗闇から抜け出せていない。他方、『おかしな人間の夢』になると「おのれのごとく他人を愛す」という『おとなしい女』では解決できていなかった問題が解決されていて、何か吹っ切れた、明るい希望が感じられる。僅か5か月の間にドストエフスキーの思想に大きな転換があったことが考えられる。この章では、『作家の日記』に書かれている「靈魂の不滅」と「善行」についての評論を中心に取り上げ、ドストエフスキー思想の転換の有無と、その内容について考察したい。

『おかしな人間の夢』を特徴づけているのは明るさだけではない。この短編は主人公の心の動きの独白だけで成り立っていて、他の登場人物の発言は皆無である。つまり完全なモノログ形式で語られている。これに対して、『おとなしい女』は形式的には夫の独白体で語られているが、内容的には自殺した妻と夫の思想が衝突しているさまがポリフォニックに描かれている。この二作品に続く作家の絶筆『カラマーゾフの兄弟』はポリフォニー形式で書かれた典型とされている。ドストエフスキーの最後の三作品のうち『おかしな人間の夢』だけが何故モノログ形式で書かれたのか？ その理由の解明も興味深い題材に成り得るであろう。

第4章の目的を三点としたい。第一に、『おかしな人間の夢』が書かれた理由、第二に、モノログ形式が採用された理由、第三に、『おかしな人間の夢』のドストエフスキー作品における位置づけ、この三点の解明を目的として進めてゆきたい。

第1節:靈魂の不滅と善行

1) 靈魂の不滅

1876年に自殺報道が新聞紙上を賑わす。『作家の日記』の10月号第1章3節「二つの自殺」は二人の女性の自殺について書かれた評論であり、その内容は第3章の『おとなしい女』の冒頭ですでに紹介している。ドストエフスキーは、「二つの自殺」の直後の第1章4節に「宣告」という題をつけて、唯物論者で憂愁により自殺した人物(самоубийца от скуки)の考察を掲載している。

おれは、むしろ存在している瞬間だけ幸福でありたいと思う。おれが減んだ後に全体とか全体の調和とやらがこの世に残ろうが、一緒に滅ぼうが知ったことではない。
[……]

どんな連中が生きることと同意しているかを考えよう。動物に似た連中たちだ、意識の発達が遅れ動物のタイプに近い連中なのだ。連中は進んで生きることを受け容れるが、要するに動物と同じ、つまり食って飲んで眠って巣をつくって子どもをつくることなのである。[……]

かくも礼儀知らずに、かつ無遠慮におれを苦難の真っ只中に生み出した自然に対しておれとともに破滅すべしと宣告するが、おれは自然を根絶やしにできないからおれ一個を抹殺する。¹²⁵

ドストエフスキーの説明が短かいので憂愁による自殺者の遺書公開の意図がよく分からない。案の定、2か月後の12月号第1章2節「遅まきの教訓」にエンペ氏という読者からの抗議文が掲載されている。

¹²⁵ Достоевский. Дневник писателя. Т. 23. Л., 1982. С. 146-8.

憂愁のあまり自殺した一人の男の『考察』が掲載されたのはどういう目的だったのか？ 全くもって理解に苦しむ。〔……〕

フォードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキーともあろう作家の日記にかような考察が掲載されるのは笑止千万かつ哀れな時代錯誤である。〔……〕

ドストエフスキー氏の『日記』に掲載されているような考察を残して死んでゆく自殺者は憐憫に値する存在ではない。粗野なエゴイストで功名心に燃えている人間社会で最も有害な一員にすぎない。¹²⁶

エンペ氏は自殺者の考察を真っ向から否定し、ドストエフスキーに抗議している。自殺者の思想とエンペ氏の思想が真正面から衝突している。

一読して、わたしはがっかりしてしまった。やれやれ、わたしの読者たちにはこんな人たちがたくさんいるのだろうか？ この自殺者は憐憫に値しないと断言しているエンペ氏は、わたしが「憐憫」を求めんがために、自殺者を氏の前へ引き出したのだと真面目に考えたのだろうか？ 〔……〕

十月号のわたしの小論説に、教訓を付け加え、解説し、小論説の目的を噛んで含めるように、速やかに説明する必要があるだろう。少なくともわたしの良心は平静に保たれるだろう、それが重要なのだ。¹²⁷

ドストエフスキーは速やかに説明をしないと、自身の良心が平静に保たれないと書いていて、かなりの動揺が窺える。直後の第1章3節に次の文章が書かれている。

『宣告』は人間存在の根本的かつ最高のイデオロギイである——人間靈魂の不滅の確信が必然かつ不可避、という点にふれている。「論理的自殺」(логическое самоубийство)で破滅する人間の告白の背景にあるもの、それは——魂や魂の不死を信じなければ人間の存在が不自然で、在りえないほど堪えがたいという結論しかないことにある。論理的自殺者の公式を明快に言い表せたようで私は気に入った、ついに見つけたのである。論理的自殺者にとっては不死の信仰は存在しない。彼はそれを冒頭で説明している。〔……〕

地上における最高思想はただ一つしかない——すなわち人間靈魂の不滅についての思想である。なぜなら、人が生きる上で依拠する他の全ての「崇高な」人生思想はただこの一つの思想に源を発するからである。このこと(即ち地上における全ての崇高なものは唯一の源しか持たないこと)について皆さんはわたしと争うことが可能だが、当面は議論に入らず、自分の思想を単に根拠のないものとして提出しておく。一度で説明することが難しいので少しずつ説明するのが良いだろうと考えている。この先でまだ時間はあるだろう。¹²⁸

ドストエフスキーは、「論理的自殺者」の告白の背景にあるものが、人間靈魂の不滅を信じていないことだと、ここで確信している。ところが確信した思想を論理的に説明することの難しさに気づく。そこでドストエフスキーは3節の題を「根拠のない確信」(Голословные утверждения)という屈折した表現のものにして、少しずつ説明していきたいと書いた上で、下記の内容を続けて書いている。

¹²⁶ Достоевский. Дневник писателя. Т. 24. Л., 1982. С. 45-6.

¹²⁷ Достоевский. Дневник писателя. Т. 24. Л., 1982. С. 46.

¹²⁸ Достоевский. Дневник писателя. Т. 24. Л., 1982. С. 48.

思想としての人類に対する愛は、一般的に言うところにとりて最も理解し難い思想の一つであることを断言するし敢えて言明したい。思想では理解が難しい。ただ感情のみが人類への愛を実現せしめるのである。とはいえ、その感情にしても人間靈魂の不滅に対する信念と共存する場合においてのみ可能なのである。(ここでも根拠のないものとしておく。) [……]

人間は自分の不死を信ずる場合にのみ地上生活における自分の合理的な目的を理解するからである。おのれの不死に対する信仰がなければ、人と地の絆は切れかかり、徐々に細り朽ちやすくなってしまふ。他方、人生の最高意義の喪失は(たとえ極めて無意識的な憂愁と感ぜられるにせよ)疑いもなく自殺へ導くのである。ここから逆にわたしの十月号の論説の教訓が出てくる。「もし不死に対する確信が人間存在にとりて不可欠であるとすれば、当然の帰結として不死に対する確信は人類の正常な状態ということになる。そうだとすれば人間靈魂の不滅そのものも疑いなく存在するわけである。」一言で言うなら、不死の思想、これこそ生命そのものであり、生きた人生であり、人生の最終的な公式であり、人類にとりて真理と正しい認識の主たる源である。これがあの文章を書いた目的であつてあれを読んだ人はだれでも自然に理解するはずと推察したわけである。¹²⁹

内容自体は説得力に乏しい。ドストエフスキー自身も根拠のないものとわざわざ書き入れている。ドストエフスキーには理解できても、エンペ氏にも理解不能だったように、一般の読者には理解が難しい。思想や信条は信じることに意味があり論証にはそぐわない。

ドストエフスキーは上記の引用の末尾に、「あれを読んだ人はだれでも自然に理解するはずと推察した」と、「宣告」の小論説を書いた10月の段階で既に「靈魂の不滅」を確信していたという文章を書いているが、その真偽のほどは疑わしい。もし、それが本当なら11月号で発表された『おとなしい女』は自殺問題が扱われている小説なので自殺する妻の心理状態についての描写に「靈魂の不滅」が使われていても不思議はないのだが、見当たらない。ちなみに、『おとなしい女』の後にドストエフスキーが書いた小説は二作しかなく、そのどちらにも「靈魂の不滅」にかんすることが書かれている。その二作とはこの章の第2節で考察する『おかしい人間の夢』と最後の長編『カラマーゾフの兄弟』¹³⁰である。これら二作には「靈魂の不滅」が言及されているので、「靈魂の不滅」をドストエフスキーが確信した時期は1876年12月であつて、エンペ氏への回答に腐心する中で固まったものと判断するのが穏当かと思われる。

とても不思議なことには、「少しずつ説明していきたい」と書かれていたにもかかわらず、1876年12月号の「根拠のない確信」以降の『作家の日記』に「靈魂の不滅」についての説明は見当たらない。ドストエフスキーは試行錯誤を続けた結果、「靈魂の不滅」が論証にそぐわない思想であることに気づいたように思われる。

2) 善行

1877年3月号第3章で「善行」が新しい問題として取り上げられ、一通の手紙が紹介されている。

医師ヒンデブルグが享年八十四歳で葬られました。プロテスタントだったのでま

¹²⁹ Достоевский. Дневник писателя. Т. 24. Л., 1982. С. 49-50.

¹³⁰ Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 14. Л., 1976. С. 65.

イワンとゾシマ長老との会話に「靈魂の不滅」が書かれている。「(「ええ、僕はそう断言しました。不死がなければ、善行はありません。）」というイワンの発言に対して、ゾシマ長老は「もし、そう信じておられるなら、あなたは幸せなお方か、それともたいそう不幸なお方ということになりますぞ!」と答えている。)

ずプロテスタントの教会に送られその後墓地へ運ばれたのでございます。あれほどの共感、心からほとばしり出たあれほどの言葉、あれほどの熱い涙はこれまでお葬式で見たことがないものでございました……彼は葬式の金もないほどの貧窮状態で死んだのでございます。M市で開業してもう58年になります……その間どれほどの善行を積んだことでしょうか。〔……〕

彼はユダヤ人の貧しい木こりを全快させました。次に女房が発病し、続いて子どもたちも病気に罹りました。すると彼は1日も休みも取らず毎日2回ずつ往診にやってきました、やがて家族全員を全快させると、彼はユダヤ人に向かって「お前はどんな形で、わたしに支払いをしてくれるのか？」と尋ねました。男は手持ちの物は何もありませんが最後に残った山羊がいますからすぐ売ることになりますと答えました。木こりは約束通りに4ルーブリで売り払って、お金を医者のところへ持ってきました。医者は自分の下男に、この4ルーブリに12ルーブリを添えて渡し、牝牛を買いに行かせました。そして木こりには帰宅するよう命じました。1時間後に下男が木こりのところへ牝牛を連れてきて、先生さまがお前さんがたには山羊の乳は毒だとおっしゃったよ、と言ったそうでございます。こんなふうには彼は一生を送りました。〔……〕

彼はまるで聖者のように葬られました。貧乏人たちは全員店を閉め、ひつぎの後につきました。ユダヤ人のお葬式では、男の子たちが聖歌を歌うことになっているのですが異教徒の葬儀で聖歌を歌うことは禁じられております。ところがその葬儀では、男の子たちは行列の間じゅうひつぎの前に立って声高らかに聖歌を歌いました。¹³¹

雑多な民族からなる西部の都市でユダヤ系の医師の葬儀があたかも聖者を葬るときのように、しかもさまざまな信仰の人々によって執り行われ、熱狂と感動のうちに終わったという報告の手紙だった。ドストエフスキーは南ロシアの医者についての手紙を思い出す。

ある暑い日の午前中、海水浴の脱衣場から出た医者はすっかり爽快な気分になり、元気づいて、家へ帰ってコーヒーを飲もうと急いでいたので、周りの人たちから懇請されたにもかかわらず、救助されたばかりの溺死者の診察をしなかった。多分この件で彼は、法の裁きを受けたように思う。彼は教養があり新思想に溢れた進歩主義者であって、個別案件(единичный случай)を軽視する一方で、万人に対する新しい普遍的な法律や権利(общие законы и права)を「理知的」に要求した人だったのかもしれない。おそらく彼は個別案件の解決が問題の普遍的な解決を遠ざけむしろ害を及ぼすとか、個別案件の取り扱いを「悪くすれば悪くするほど、解決が近づく」と考えていたのだろう。しかし、個別案件がなければ普遍的な権利は実現しない。この普遍的な人物(общий человек)は個別案件を積み重ねることで自分のひつぎの周囲に町じゅうの者を結集させたのだ。¹³²

ドストエフスキーは、個別の溺死者の救助より万人に対する新しい普遍的な法律と権利を要求することを重視しようとした南ロシアの医者と、個別案件に生涯を通じ尽力し続けたヒンデンプルグを対比させ、町じゅうの者を結集させたのは個別案件だったとし、ヒンデンプルグを普遍的な人物と呼ぶ。

ドストエフスキーには、南ロシアの医師が自分にそっくりな人間のように思えたのかもしれない。博愛の精神を持ち、他人を愛そうとするのだが、自我が邪魔をしてそれが果たせない。他方、ヒンデンプルグの自我は希薄であり、周りの人の幸福を優先し、「すぐ善行を実行する」行動律が骨の髄まで滲みこんでいる。「すぐ善行を実行する」ことが、良い結

¹³¹ Достоевский. Дневник писателя. Т. 25. Л., 1982. С. 89-90.

¹³² Достоевский. Дневник писателя. Т. 25. Л., 1982. С. 92.

果に繋がり、それが周りの人間を幸福にすると同時に、ヒンデンプルグの幸福度を高め、それがさらに次の善行に繋がるという良い循環が成立している。ドストエフスキーは、それまで自分になく、探し求めていたものをヒンデンプルグに見出したのではないだろうか。

とはいえ、客観的に見るなら、ヒンデンプルグは当時のロシアでは稀有な人たちの一人に属していて、その生きざまに感嘆する以上のことは普通の人間には難しそうである。しかし一筋の灯りも見えないところでもがき、「自分と同じようには他人を愛せない」ドストエフスキーにとっては、ヒンデンプルグの行動律が大きな救いとなり、自らの思想や行動律を一新する大きな転機となったのではないかと思われる。それまで夢想家の域を超えることがどうしてもできなかったドストエフスキーは、「自分と同じように他人を愛する」ために、必要なことが実践行動であり、徹底して実用的でないといけないことに、気づいたのである。

町じゅうの者がこぞって彼を見送り、あらゆる教会の鐘が鳴り響き、全ての言語で祈祷が捧げられた。プロテスタントの牧師は開かれた墓の前で涙ながらに追悼の辞を述べる。ユダヤの律法博士はそばに立って待ち、牧師の辞が終わると入れかわって自分の哀悼の辞を述べ同じ悲しみの涙を流す。そうだまさにこの瞬間、かの「ユダヤ人問題」は殆ど解決されたのではなかろうか！ プロテスタントの牧師とユダヤの律法博士は普遍的な愛で結集したのだ。彼らはキリスト教徒とユダヤ人が見ている墓の上で抱擁を交わしたのではなかろうか。別れた後で、また各々が昔からの偏見に戻ったとてそれが何だろう。涙は石をもうがつ、これら「普遍的な人物たち」は世界を結集させながら勝利を得るのである。偏見は個別の案件一つ一つを経ながら生気を失い始め、ついには全く消滅してしまうであろう。¹³³

貧しいユダヤ系医師の葬儀が聖者を葬るときのように、しかもさまざまな信仰の人々によって執り行われ、熱狂と感動のうちに終わったという情景がドストエフスキーにとって一つの理想郷であったことが読み取れる。

この葬儀に関する評論の直前の3月号第2章で、ドストエフスキーはユダヤ人問題についての読者からの批判に答える文章を書いている。その核心部分は次の通りである。

ロシアに住むスラヴ人以外の民族の中で、その恐るべき影響力という点においてユダヤ人に匹敵し得る民族が他にあらひとつ指摘してもらいたいものである。そういう民族は見当たらない。民族としての独自性を完全に保持し続けているという点において、ユダヤ人はロシアに住む他の外国人の中で際立っている。[……]

その精神はユダヤ人ではない全ての人たちに対する無慈悲酷薄と、全ての国民、民族、それにユダヤ人以外のすべての人間存在に対する軽侮に充ち溢れているのだ。¹³⁴

ドストエフスキーが持つ根深い反ユダヤ主義を、例え一瞬でも忘れさせるような感動を与えたヒンデンプルグ医師の善行がどれほど強力なものだったかが、直前に書かれているこの引用と対比することでよく分かる。

個別案件が全体を結合させると確信することである。個別案件こそが思想を与え信仰を与える、これこそ生ける実験となり論証にもなるのである。万人があるいは多数の人たちがこの医師のような立派な人になるのを待つ必要はない。世界を救うには立派な人たちがほんの少しいればそれで良い、それほどまでに立派な人たちは強力なので

¹³³ *Достоевский. Дневник писателя. Т. 25. Л., 1982. С. 92.*

¹³⁴ *Достоевский. Дневник писателя. Т. 25. Л., 1982. С. 84.*

ある。もしそうであるとしたらどうして望みを抱かずにはいられよう？¹³⁵

1877年2月13日に亡くなったヒンデブルグの善行に関する手紙をユダヤ系女性の知己であるソフィア・ルリエから受取ったドストエフスキーは、『作家の日記』3月号第3章にヒンデブルグの善行についての評論を書いた。その翌月にドストエフスキーは、再び電光石火の素早さで短編『おかしな人間の夢』を発表している。第2節では『作家の日記』4月号に掲載されているこの短編について考察したい。

第2節:『おかしな人間の夢』

この短編の唯一の語り手で、主人公でもある「おかしな人間」は周りの人間に嘲笑されているという被害妄想にとらわれ、ある夜小さな星を見たことをきっかけに、かねて決めていた自殺の決行をその夜にすることを決めるが、ちょうどその瞬間に年のころ8歳ぐらいの女の子にひじをつかまれる。

女の子の話は明瞭なものではなかったが、女の子の母親がどこかで死にかかっているか、或いは母子に何かが起こっているのか、母親を助けるために、誰かを呼ぶか、又は何かを見つけるために女の子が駆け出して来たのだとおれは理解した。しかしおれは女の子について行こうとはしなかった、それどころか、女の子を追い払おうとする考えがふいに浮かんだほどであった。おれはまず女の子に巡查を探せと言った。けれど、女の子は急に小さな両手を合わせ、啜り泣いたり息をつまらせたりしながら、たえずおれの横について走りつづけおれから離れようとしなかった。そこでおれは女の子に向かって地団駄を踏んで一喝した。¹³⁶

女の子を追い払った後で自分の部屋に戻った主人公は自殺の準備を始めるが、急に女の子がかわいそうでたまらなくなり不思議な痛みを感じ始める。

ほんの2時間の内に自殺するおれにとって女の子は何なのだ、恥辱にせよこの世のすべてにせよおれに何のかかわりがあるというのだ？ おれは零に変化するのだ、絶無の零になるのだ。そしておれが完全に存在なくなるという意識は、果たして女の子に対する憐憫や卑劣な行為をしてしまったという恥辱に、ほんの少しでも影響を与えないのだろうか？ [……]

おれは興奮していらいらしてきた。まえもって解決しておかないと今は死ぬことさえできないような気がした。¹³⁷

女の子に人間愛に溢れた行動を取れなかった理由を究明するまでは死ねないと主人公は引き金をおろす瞬間を延ばす。「靈魂の不滅」と「善行」という二つの問題が重なり合って主人公に解決を迫っている。主人公はふと眠りにおちて不思議な夢を見る。

突如おれの墓がぱっかり開いた。といっても墓が掘り出され蓋が開けられたかどうかはおれにはわからない、おれは得体の知れぬ確認出来ない存在物に運ばれて、気が付くと宇宙空間にいた。[……]

おれは完全な無を期待していた、そのために自分の心臓に弾丸を打ち込んだのだ。ところが、いまおれはある存在物の手に抱かれている、もちろん人間ではないが、と

¹³⁵ Достоевский. Дневник писателя. Т. 25. Л., 1982. С. 92.

¹³⁶ Достоевский. Дневник писателя. Т. 25. Л., 1982. С. 106.

¹³⁷ Достоевский. Дневник писателя. Т. 25. Л., 1982. С. 107-8.

にかく無ではなく存在しているのだ。「ははあ、してみると死後にも生活があるのだ！」夢に特有の不思議な軽率さでおれはこう考えた。¹³⁸

一度死んだはずの主人公は宇宙空間では生きていて、「死後にも生活があるのだ！」と驚く。完全な無を想像していた主人公の予想は外れたことになる。霊魂は死んでいない。

おれはどうやら、われわれの地球で言えば、ギリシャのエーゲ海にあたる群島のうちの一つか、あるいは、エーゲ海に隣接する大陸の海岸にいるらしかった。[……]

そこはいまだに墮罪に汚されていない土地であり、そこで暮らしていた人々は過ちをおかしたことがなく、全人類の伝説が伝えるわれわれの祖先の墮罪の前と全く同じような楽園で暮らしていたのだ。ただ違っているのは、ここでは何処へ行くのが同じような楽園であるということだ。¹³⁹

辿りついたのは、墮罪に全く汚されていない惑星であった。

墮罪の原因がおれだったということだけは分かっている。ちょうど豚に寄生するいまわしい絨毛虫や、無疵の国々を感染させるペストの黴菌のように、おれが来るまで罪というものを知らなかった幸福な土地全体をすっかり汚してしまったのだ。人々は嘘をつくことを憶え、嘘を愛するようになり、嘘の美しさを知ったのである。[……]

この嘘の黴菌が彼らの心に侵入して彼らの意に適ったのである。それから急速に情欲が生まれ、情欲は嫉妬を生み、嫉妬は——残忍を生み……おお、おれはよく知らないし、おぼえてもいないが、直ぐに、本当に直ぐに最初の血がしぶきを上げた。彼らは驚き慄いた。そして四散しバラバラになった。幾つかの同盟が出現したが、いまや互いに敵対するものばかりだった。

叱責や非難が始まった。彼らは恥という観念を知り恥を美德に祭り上げた。名誉についての観念が生まれ同盟毎に独自の旗印がかかげられた。彼らは動物を虐待し始め、動物も彼らを離れ森に去って彼らの敵となった。分裂、独立、人身攻撃、分け前を決めるための闘争が始まった。彼らはさまざまな言語で話し始めた。彼らは悲哀というものを知り、悲哀を好み始め、苦悩を渴望し、真理はただ苦悩によってのみ得られると言いだした。

そのとき科学が出現した。邪悪の心を持ち始めると友愛や人道などを口にし始め、それらの考えを理解した。罪人が現われ始めると正義というものを発明し、正義を維持する目的で法典集を整備し、法典集を担保する目的でギロチンを設置した。¹⁴⁰

無垢な人々を主人公が墮落させる。主人公はすべての人々を汚してしまうことによって罪を犯したことを自覚している。「いまわしい絨毛虫」(скверная трихина) で使われている「трихина」という単語は、『罪と罰』でラスコーリニコフが見た「新しい絨毛虫」(новые трихины)¹⁴¹ と同じものである。『罪と罰』では、流行性の疫病が原因となり、戦いや疫病飢饉などが起こって何もかもが滅びていくさまが幻想的に語られているが、『おかしな人間の夢』では罪の段階的な変遷と、その変遷に対応し作られた罰の歴史、いわば「罪と罰の西欧史」とでも呼ぶべきものが明快な形で述べられている。ドストエフスキーの持つ「罪と罰」の倫理観が10年の歳月を経てより深化され、大きなスケールで肉付けされたように思われる。

¹³⁸ Достоевский. Дневник писателя. Т. 25. Л., 1982. С.110.

¹³⁹ Достоевский. Дневник писателя. Т. 25. Л., 1982. С.112.

¹⁴⁰ Достоевский. Дневник писателя. Т. 25. Л., 1982. С.115-116.

¹⁴¹ Достоевский. Преступление и наказание. Т. 6. Л., 1973. С. 419.

各人が自分を誰よりも愛するようになった。そう、それ以外に何ができただろうか。各人が自分の人格を擁護し他人の人格をけなし貶めようと全力で努め、それを生涯の目的に決めたのである。奴隷制度が出現した。自由意思で奴隷になるものさえ出てきた。弱者は進んで強者に服従したが、自分より弱い者を押潰す際に単独でやるより強者と手を組んだほうが良いからだった。

やがて善き人が現れ人々のもとに赴いて、人々の傲慢さ、節度や調和、羞恥の念の喪失などについて涙ながらに説いた。人々は嘲り石をもって打擲した。神殿の闕で聖なる血が流れた。代わりにこう考え始める人々が出現した。各人が自分を誰よりも愛し続けながら他の誰をも妨げず、すべての人々が再び結集し調和的な社会を築いて仲良く暮らしていけないだろうか。

この考えから多くの戦争が始まった。交戦者たちは当時、科学、叡智、自衛の感覚が最終的に人々を調和的かつ理性的な社会に結集させると確信していた。当面の仕事を迅速に進めるために「叡智ある人々」は彼らの理想を理解しない「叡智なき人々」を一刻も早く殲滅しようとした。彼らの理想の勝利を妨げさせないためである。

けれども、自衛の感覚は急速に衰え、傲慢な連中や淫蕩漢が現れ、すべてか或いは零かを露骨に要求しだした。すべてを獲得するために悪行に訴え、成功しなかった場合は自殺に走った。つまらぬ世の中に永遠の安らぎを得んとて、虚無と自己破壊を崇める宗教が幾つか出現した。

ついには、こういった人々も無意味な労苦に疲れ果てその顔には苦痛の色が浮かんできた。人々は苦痛は美である、なんとなれば、ただ苦痛の中のみ思想があると宣言した。**彼らは苦痛を歌で称賛した。**おれは両手をもみ絞って彼らの間を歩き回り、彼らのことを泣いて悲しんだが、ことによると、彼らがまだ無垢でうるわしく、その顔に苦痛の色が浮かんでいなかった時よりも彼らを愛していたかもしれない。おれは彼らに穢された地球を樂園であった時よりもさらに愛するようになった。¹⁴²

「罪と罰の西欧史」はなおも続き、争いの袋小路に入りこんだ第2地球と苦悩し始めた住民に主人公が強い愛を感じ始めたことが引用の最後尾の下線の部分に書かれている。

最近のロシアでは『おかしな人間の夢』に注目している若い研究者が少なくない。カタソーノフは『『おかしな人間の夢』の謎』(2012)という論文で、『地下生活者の手記』の主人公との比較を行っている。カタソーノフは最重要な疑問として、次のような三点を問うている。すなわち、①主人公はなぜ幸せな時代の住民全員を墮落させたのか？ ②幸福と愛に満ちた世界の上に墮落した世界を築くことに価値があるのか？ ③苦悩することに何の意味があるのか？ カタソーノフはこれらの問いに対して本文に率直な答えが書かれていないことを興味深いとしている。¹⁴³

ゾローチコもカタソーノフに似て、こう指摘している。「読者は主人公が独白する内容に全幅の信頼を置かず、また主人公の神への帰依も議論の余地があり、研究者たちは主人公が夢の中で見た認識は十分でなく、キリスト教の世界観と完全には合致しないと疑問を投げかけている」。¹⁴⁴ ゾローチコはモスクワのロシア国立文学史博物館ドストエフスキー分室に勤務する研究者で、「ドストエフスキーの短編『おかしな人間の夢』の主人公が見た夢「ギ

¹⁴² Достоевский. Дневник писателя. Т. 25. Л., 1982. С.116-7. この引用の中にある3か所の**太字**部分は、1877年4月30日付けの植字原稿異文(Варианты наборной рукописи)と比較する目的で5月2日の最終稿の該当部分を筆者により**太字**強調したもの。作者による斜字強調ではない。

¹⁴³ Катасонов В.Н. Загадки “Сна смешного человека” Ф.М.Достоевского. С.2.

[http://katasonov-vn.narod.ru/statji/razdel4/4-2_v.n.katasonov_zagadki_sna_smeshnog...] 閲覧日 2020/12/09

¹⁴⁴ Золотко О.В. Психология сна о “золотом веке” героя рассказа Ф.М.Достоевского “Сон смешного человека” // Достоевский и миловая культура. Филологический журнал.2018. № 1. С. 118.

リシャ神話の幸せな時代」の心理学」(2018)という題で論文を書き、ユングの夢理論に基づき、『悪霊』のスタヴローギン、『未成年』のヴェルシーロフが見た夢との比較を行っている。

このように、少なからぬロシア人研究者が『おかしな人間の夢』のユートピア的叙述をキリスト教の視点から研究しているようであり、ドストエフスキーが書いた意図について、彼らが疑問を呈している部分も、上記引用の最後の段落で筆者が「下線を引いた部分」とちょうど同じ部分と思われる。カタソーノフの疑問の回答となり得るドストエフスキーの思想を『作家の日記』から抽出し、引用したい。

悪は、治癒が可能とする社会主義者たちの想定よりも遥かに深く人類の中に潜んでいること、いかなる社会組織にあっても悪を回避できないこと、人間の魂はどこまでも同じままであること、アブノーマルと罪悪は人間の魂から直接発生すること、結局人間精神の法則はいまだにかくも不明で、科学的にもかくも未解明で、かくも漠然とし不可思議である……¹⁴⁵

この引用からカタソーノフの三つの疑問のうち、①「主人公はなぜ幸せな時代の住民全員を墮落させたのか?」、②幸福と愛に満ちた世界の上に墮落した世界を築くことに価値があるのか?」、これら二つについての回答を見ることができる。すなわち、「いかなる社会組織にあっても悪は回避できず、墮落は不可避である」という人間性についてのドストエフスキーの確信が①への回答。そして「墮落した世界しか存在しないのが現実であり、価値観で議論する問題ではない」というのが②への回答となるであろう。さらに次の引用が三つ目の疑問に回答しているだろう。

もしこの苦悩が真実なもので強いものであるなら、苦悩は私たちが浄めより良い存在にするだろう。自分自身をより良くすれば、われわれは環境をも矯正し、より良きものにするだろう。ただこれによってのみ矯正し得るのである。¹⁴⁶

③「苦悩することに何の意味があるのか?」に対しては「苦悩をドストエフスキーはむしろ肯定的に評価している。」としか言いようがない。ここで特記しておきたいのは、ドストエフスキーが愛しているのは自らの低級な本能を自覚した上で、苦悩する人々だけということである。強い苦悩がない限り浄化は期待できない。ドストエフスキーは苦悩せずに悪行や自殺に走っている傲慢な連中や淫蕩漢を愛してはいない。「彼らがまだ無垢でうるわしく、その顔に苦痛の色が浮かんでいなかった時よりも彼らを愛していたかもしれない。おれは彼らに穢された地球を楽園であった時よりもさらに愛するようになった。」という下線を引いた部分は、罪を犯したことの無い人よりも、罪を犯したが、それを自覚し苦悩する人の方をドストエフスキーが愛していることを意味しており、かなり屈折した思想に見える。このことについては、カーの指摘が要を得たものだと思うので、引用したい。

彼は苦悩と罪との密接な関聯を心ゆくまで描き出した。彼は、罪を苦悩の原因と見なす、西欧ならびに東洋の神学者たちの通俗的誤謬に決しておちいらなかった。彼は、苦悩は罪を赦すために必要な心理的条件であるとかたく信じた。ドストエフスキーに取って重要と思われた寛恕は、他人によるものでなく、罪人自身が自らを赦すことなのであった。それは罪人自身の良心の過程であった。そしてこの寛恕は、自ら進んで苦悩に身をゆだね、自ら進んで苦悩を求めることによって、はじめて獲ち得られるで

¹⁴⁵ Достоевский. Дневник писателя. Т. 21. Л., 1980. С.18-19. .

¹⁴⁶ Достоевский. Дневник писателя. Т. 21. Л., 1980. С.18-19. .

¹⁴⁶ Достоевский. Дневник писателя. Т. 21. Л., 1980. С.15.

あろう。¹⁴⁷

ここで一つの資料を提示したい。ソ連邦アカデミー版 30 巻全集の注釈¹⁴⁸によれば、ドストエフスキーは 1877 年 4 月 30 日付けの製版工アレクサンドロフへの手紙に、「最後の 5 頁分の発送が遅れているが、明朝 8 時に受取って貰えるようにします。」との手紙を書き、最終的には、さらにもう一日遅れた 5 月 2 日のアレクサンドロフ宛ての手紙で、「……小説のおしまいの部分です。[……] 急いで校正刷りに入っただき、検閲官に提出して下さい。この部分が検閲に通らないのではないかと心配しています。」と、書いている。最後の 5 頁分の推敲にかなり苦労していることがうかがえる書簡である。太字で書かれている部分が推敲された 5 月 2 日の最終稿で新たに付け加えられた部分であり、植字原稿異文の頁に書かれている。¹⁴⁹

植字原稿異文を読むと、「**彼らは苦痛を歌で称賛した**」(Они воспели страдание в песнях своих. *вписано.*)と「**彼らがまだ無垢でうるわしく**」(и когда они были невинны и столь прекрасны. *вписано.*)という二つが、最終稿で新たに付け加えられている。初稿で「彼らの地球を」と書かれていたものが「**彼らに穢された地球を**」(их оскверненную ими землю / их землю)に変更されている。

カタソーノフは、「本文に率直な答えが書かれていないことが興味深い」と書いていたが、逆にドストエフスキーは、4 月 30 日以前には書かれていなかった太字の部分をわざわざ書きこんでいるのである。ここから分かることは、『おかしな人間の夢』は「無垢でうるわしい」単純なユートピア小説ではなく、「苦痛を賞賛」、「穢された地球」という、むしろ逆説的ユートピアについて書かれているということである。

『おかしな人間の夢』をユートピア小説と考えている研究者はソ連・ロシアのトゥニマーノフ (В. А. Туниманов) (1937-2006) とアメリカ人研究者モーソン (Gary S. Morson, 1948-) を代表として、洋の東西、現在、過去を問わず、かなり多い。¹⁵⁰

¹⁴⁷ カー『ドストエフスキー』401 頁。

¹⁴⁸ *Достоевский. Дневник писателя. Т. 25. Л., 1982. С.396-397.*

¹⁴⁹ *Достоевский. Дневник писателя. Т. 25. Л., 1983. С.297.*

¹⁵⁰ 1980 年代以降の代表的なドストエフスキー研究者の一人であるトゥニマーノフは、『ドストエフスキーソ連アカデミー版 30 巻全集』の編集委員会のメンバーとなり、全集の出版に参加し、『おかしな人間の夢』の注釈 (*Достоевский. Полное собрание сочинений в 30 томах. Дневник писателя. Т. 25. Л., 1983. С.396-408.*) を書いている。注釈の本文だけでも 10 頁にわたっており、様々な先行文学作品との比較対照がなされている。空想小説という視点から、プーシキン、ゴーゴリ、オドエフスキー、ホフマン、特にエドガー・アラン・ポーとの関連が詳しく書かれている。交霊術という視点からはスウェーデンボルグに触れ、フーリエなどフランスのユートピア社会主義者の名前も上がっている。ユートピアに関して、トゥニマーノフは『地下生活者の手記』の主人公とよく似たタイプの人間である「おかしな人間」が夢を見た後で、友愛主義に目覚めたと考え、その理念はドストエフスキーが愛読していたサン・シモンにあるとしている。

モーソンは『ジャンルの境界・ドストエフスキーの作家の日記と文学ユートピアの伝統』(*The Boundaries of Genre: Dostoevsky's Diary of a Writer and the Traditions of Literary Utopia*: University of Texas Press, Austin, 1981.)において、ジャンル理論を使って『作家の日記』の分析を行っている。『作家の日記』を読み、そこに書かれているものが、文学とジャーナリズムが混じり合った複雑な形式を示していることに気づいたモーソンは、雑誌『世紀』の刊行をいったん中止せざるを得なくなったドストエフスキーが、従来の世相の簡略なスケッチやフェリエトンの組み合わせを一步進めたより包括的で新しい文学ジャンルに位置づけられる雑誌刊行の考えを持ったとしている。『ジャンルの境界』は、続いて「関(しきい)の芸術」「文学ジャンルとしてのユートピア」、「パロディー理論」「パロディーのジャンルとしての反ユートピア」「メタユートピア」について書かれている。文学理論として書かれているので、『おかしな人間の夢』の主人公の「我らの生活は夢ではないのか」という発言を引用して、「ユートピアは社会の現実と社会の仮想現実の間に位置する、つまり関におけるリアリティについて書かれている」とし、『おかしな人間の夢』をユートピア小説であると分類し、様々な分析を行っている。キケロやセネカ、エラスムス、プラトン、セルバンテス、ウエルズからメンデルレーエフ等との比較を行っている手法はトゥニマーノフに似ている。ユートピア小説であるという根拠として、『作家の日記』の中心にあって、最も頻繁に取り上げられているのはこの世の終わりが差し迫っているという終末論であって、最終戦争が近づいており、ロシア正教に基づいてロシアに率いられたユートピアが出現するのが、ドストエフスキーの考えだったと、モーソンは書いている。

先行研究との比較はここまでにして、『おかしな人間の夢』の最後の部分に戻りたい。

そうだ、生きることだ、それに——啓発¹⁵¹だ！ 啓発について、おれは即座に決心した、**もちろん生涯の仕事としてだ！** おれは啓発に出かける、おれは啓発の活動をしたいのだ、——何をだって？ 真理だ、なぜなら、おれは真理をみたのだから、この目でちゃんと見たのだから、真理の栄光を残らず見たのだから！ こうしてそれ以来、おれは啓発の活動をしている！ のみならず——おれのことを冷笑している全ての連中を愛している、他の誰よりも愛している。なぜそうなのかは——分らないし説明もできない、がそれでいいのだ。[……]

おれは元気だ。生き生きしている。おれは啓発に行くのだ、行くのだ、**よしんば千年だって行くのだ**。実のところ、おれは初め、彼ら全員を墮落させたことを隠そうとさえしていたが、それはおれの間違いだっただ、——そもそもの一番目の間違いだっただ！ しかし真理がお前は嘘をついているぜと囁きかけてくれて、おれを守り正しい方向へと戻してくれた。しかしどうして樂園をつくったものか、——おれは知らない、なぜなら言葉で伝えることができないからだ。[……]

大切なことは——おのれみずからの如く他の人たちを愛せということ、これが一番大切なのだ、これがすべてで、それ以外は全く何も要らない。[……]

ところで、あの小さな女の子を探し出せたぞ……**啓発に出かけるのだ！ 出かけるのだとも！**¹⁵²

夢のおかげで主人公は生きることの重要性をはっきりと認識し、自殺を断念する。さらに主人公が、「あの小さな女の子を探し出せたぞ」と言っているところまではとても分かりやすい。主人公が自殺をためらった原因が、小さな女の子に出会ったからなので、自殺をやめた今、小さな女の子を探し出して助けるのは万人が納得することであろう。

問題となるのは「啓発について、おれは即座に決心した、もちろん生涯の仕事としてだ！」という部分である。急に啓発を生涯の仕事にするのは、かなり唐突であり、不自然さが感じられる。自殺を決めた者が、周囲の人間を墮落させた罪を自覚し、自殺をやめ、周囲の人間を愛し始め、善行を積むことを決めた物語には、何かが吹っ切れた、新しい希望のようなものが感じられるが、「善行を積む」具体的な方法として「啓発を生涯の仕事にする」と書かれている理由は何だったのか？ それには、第5章第1節で考察するコルニーロヴァ事件（ドストエフスキーが『作家の日記』で弁護したコルニーロヴァの再審の判決が1877年4月22日に出て、逆転無罪が確定している。）¹⁵³が大きく影響していると思われ、それは『おかしな人間の夢』の植字原稿異文と最終稿とを読み比べることによって確かめることができる。

¹⁵¹ ロシア語の「проповедь」を啓発と訳している。岩波ロシア語辞典（1970年）に書かれている①説教（教会での）②お説教（道義・操行などに関する訓戒）③（教義・理論の）宣伝のいずれにもびったり当て嵌まらないからである。英語の「advocacy」が、一番びったりすると思うが、日本語としては馴染まないので「人が気づいていないであることを教え示して、より高い認識や理解に導くこと」という意味での「啓発」を使いたい。似た言葉に「人々に新しい知識を与え教え導くこと、その人が持つ正しい知識を他の人に与え、合理的な考えをするように指導すること」を意味する「啓蒙」があるが、厳密に区別して使いたい。尚、5月2日のアレクサンドロフ宛ての手紙に、「急いで校正刷りに入っただき、検閲官に提出して下さい。この部分が検閲に通らないのではないかと心配しています。」と書かれているので、ドストエフスキーが検閲への対策を意識して「проповедь」という単語をあえて使用した可能性も否定できない。

¹⁵² Достоевский. Дневник писателя. Т. 25. Л., 1982. С.118-9. この引用の中にある3か所の太字部分は、1877年4月30日付けの植字原稿異文(Варианты наборной рукописи)と比較する目的で5月2日の最終稿の該当部分を筆者により太字強調したもの。

¹⁵³ コルニーロヴァ事件の詳細については、第5章第1節を参照されたい。

ここでは上に引用した『おかしな人間の夢』の最後の部分で強調されている箇所注目してみたい。これらの箇所は5月2日の最終稿で新たに付け加えられたり、変更されたりしている。

まず「もちろん生涯の仕事としてだ！」(и, уж конечно, на всю жизнь! *вписано*.)だが、これは最終稿で新たに書き加えられたものである。また、当初の植字原稿異文に書かれていた「人々に倦むことなく話すのだ、楽園を見た」とは「よしんば千年だって行くのだ」に変更されている。(После: на тысячу лет. - Я буду говорить людям неустанно, что видел рай.)最後の「啓発に出かけるのだ！ 出かけるのだとも！」(И пойду! И пойду! *вписано*.)¹⁵⁴も、新たに書き加えられたものである。全ての変更・加筆の箇所において目立っているのは力強い意志を感じさせる言葉であって、ここからは作者の強い決意が感じられる。

この決意はコルニーロヴァ事件と深く結びついている。この事件の再審の判決結果を黙殺した新聞への不信からドストエフスキーは啓発を生涯の仕事にすることに決めたと、筆者は考えている。コルニーロヴァ事件は新聞に取り上げられなかったので、多くの人はこの事件の意義には気づいていなかった。ドストエフスキーは「おのれみずからの如く他の人々を愛す」具体的な実行策を「文筆活動を通じての啓発」にすることは決めていたのだが、「啓発活動をどこまで行うべきか」までは考えていなかった。5月2日の最終稿で初めて、生涯の仕事として断固として続けていくことを決意したと思われる。『おかしな人間の夢』の最後の部分において書き加えられた力強い決意は、まさに作者のそのような宣言なのである。

小括：

①『おかしな人間の夢』が書かれた理由。

二つの根拠から次の結論が導き出される。すなわち、1876年12月号の『作家の日記』で約束した説明責任を果たす目的で『おかしな人間の夢』が創作された、という結論である。

第一の根拠は、1年後の1877年12月号限りで『作家の日記』が一時休刊になるまで、ドストエフスキーが読者に約束した説明がただの一度も掲載されておらず、遅れていることについての釈明も見当たらないことである。1876年12月号で、「小論説の目的を噛んで含めるまで、速やかに説明する必要があるだろう。少なくともわたしの良心は平静に保たれるだろう、それが重要なのだ」。¹⁵⁵とまで書いていたドストエフスキーが、放置したままでいたとは考えにくいからである。

第二の根拠は、『作家の日記』の評論内容と『おかしな人間の夢』本文が、時間軸的な流れの面で無理なく一致している¹⁵⁶ ことに加え、内容的にも一致していることにある。前年12月号の段階での「ただ感情のみが人類への愛を実現せしめるのである。とはいえ、その感情にしても人間霊魂の不滅に対する信念と共存する場合においてのみ可能なのである」という「根拠のない確信」が、4月号の『おかしな人間の夢』になると「人間霊魂の不滅を実際に体験した主人公が、人類への愛の実現へと向かう」という形で具体化している。夢という形での具体化であり論理的証明ではないという欠点つきではあるものの、約束した説明責任をドストエフスキーは果たそうとしている。

ドストエフスキーの思想が大きく転換し始めるのは1877年2月13日に亡くなったヒンデンブルグ医師の善行に関する手紙を受取った日であり、それから「おのれのごとく他人を愛す」具体策の形成が進んだ。第5章で扱っているコルニーロヴァ事件の再審の判決が4月22日で、5月2日に『おかしな人間の夢』の最終稿が印刷所に出されている。「おのれのごとく他人を愛す」具

¹⁵⁴ Достоевский. Дневник писателя. Т. 25. Л., 1982. С.297.

¹⁵⁵ Достоевский. Дневник писателя. Т. 24. Л., 1982. С. 46.

¹⁵⁶ 本論文の末尾に添付している略年表を参照されたい。時間軸的な流れとしては、1876年10月号第1章3節「憂悶による自殺者の考察」→同12月号第1章2節「エンペ氏の反論」、第1章3節「根拠のない確信」→1877年3月号第2章「ユダヤ人問題」、第3章「ヒンデンブルグ医師の葬儀」→同4月号第2章短編小説『おかしな人間の夢—空想的な物語—』という順序になる。

体策として、「啓発を生涯の仕事にする」ことに思い至り、その文章化に腐心していたのが5月2日までの期間であったと思われる。

②モノログを採用した理由。

短編小説という形式を選択した時点で、自らの思想を読者に説明する目的に適したモノログの採用を決定していたと思われる。それにより、ドストエフスキーの筆は水を得た魚のように生き生きと動き出す。エルモーションは「ドストエフスキーが「おかしな」(смешной)という単語を使うのは、特に真剣に心から表現したいことを言う時である」¹⁵⁷と、書いている。ドストエフスキーは短編の題に「смешной」を採用し、真剣に心から表現したいことを書いたと思われる。

③「ドストエフスキー作品全体の中でこの作品はどのような価値を持つのか？」

『おかしな人間の夢』は、ドストエフスキー自身の思想が、直接吐露されている貴重な作品として再評価されるべきと思われる。ドストエフスキーは自身の思想を論理的に証明することは無理と判断したからこそ、短編小説の形を取って自身の思想を自由に書くことを選択したと仮定するならば、『おかしな人間の夢』にはドストエフスキー思想が凝縮しているはずである。ドストエフスキー自身の思想が直接書かれているなら、「靈魂の不滅と善行」にとどまらず、「罪と罰の西欧史」など、その他の問題についてのドストエフスキーの思想が確定するので、ドストエフスキー研究者、なかんずく思想研究者にとって、この作品が新たな道標となるであろう。『おかしな人間の夢』の価値は思想解釈の道標だけにはとどまらない。『おかしな人間の夢』の主人公の「啓発に出かけるのだ！」という決意表明は、ドストエフスキー本人にとっての決意表明を意味している。ドストエフスキーは、ヒンデンブルグが医療活動で行った善行のように、社会問題の解決の為に、作家として自分に何ができるかを考えてみた。「文筆を使って多くの人々が気づいていない問題を啓発していく」ことがその結論になったと思われる。

¹⁵⁷ Ермошин Ф.А. “Пусть не смеются над мной заранее...”: Автор как “Смешной человек” в “Дневнике Писателя” Ф.М. Достоевского // Вестник Московского Университета. Сер. 9. Филология. 2009. №5. С. 137.

第5章:『作家の日記』

第3章と第4章では『作家の日記』の「自殺」についての評論を取り上げて考察してきたが、第5章第1節では「犯罪と訴訟」についての評論であるコルニーロヴァ事件¹⁵⁸を取り上げる。コルニーロヴァ事件とは、殺人未遂の罪で懲役刑を宣せられたコルニーロヴァの有罪判決に異議ありとしたドストエフスキーの『作家の日記』の評論が反響を呼び、再審の結果、無罪の宣告が下された事件である。ドストエフスキーは大衆に文筆を通じて自らの意見を広く訴えかけ、社会を動かすことが、現実に可能であることに気づき、社会啓発の成功体験を得た。

ところが、不思議なことには、ドストエフスキーは最後の小説『カラマーゾフの兄弟』において、父親殺しの真犯人ではないミーチャに下された懲役二十年の誤審判決を再審によって覆そうとはしていない。ドストエフスキーはコルニーロヴァ事件の成功体験を再現させようとはしなかったのである。彼の意図は何だったのだろうか。その面からもコルニーロヴァ事件は重要である。5つの月に分けて、評論がなされている。

第1節:コルニーロヴァ事件

ドストエフスキーは刑事事件の裁判に社会の現実が反映されているとして大きな関心を寄せ、新聞記事で読んだり、自ら傍聴したりした裁判の概要を『作家の日記』で報告した上で、判決についての賛否をはっきり書き、その理由を明らかにすることを習慣としていた。

1876年5月号1章「弁護人とヴェリカノヴァ」(Г-Н Защитник и Великанова)では5つの小節を使ってカイーロヴァ事件について述べている。この事件は舞台女優見習いであったカイーロヴァが三角関係のもつれから正妻であるヴェリカノヴァの咽喉に剃刀で切りつけた傷害事件であった。陪審員裁判はカイーロヴァを罪には問わず釈放する。全ロシアが注目したこの事件について、ドストエフスキーはカイーロヴァを赦すという判決自体には賛成した上で、悪はどこまでも悪と呼ぶべきということにこだわり、陪審員たちや、検事、弁護人などの法廷出席者、なかんずく法定弁護人であるウーチン氏を攻撃している。コルニーロヴァ事件についての最初の言及は、そのカイーロヴァ事件の第5節に書かれている。

先ごろ、ある継母が、四階から六つになる継娘を投げ捨てたが、子どもは少しも怪我をしないで起ち上がった。怪我のないことがいくらでも、犯罪の残忍さを変えるか、果たしてこの娘はなんの苦痛も感じなかったか？ ついでだが、この継母を弁護人がどう弁護するか、わたしはひとりで想像したくなる。弁護人は必ず、事態が土壇場までいっていたとか、年若い妻が男やもめに無理やりに結婚させられた、或いは間違っただけで結婚したとかを、言うに違いない。そこには貧しい人々の生活描写や、際限のない労働が出てくるであろう。純朴で無邪気な彼女は結婚し、経験の足らぬ娘の常として(わが国の教育下では特に!)結婚すれば喜びばかりだと思っていたが、喜びどころか——汚れた肌着の洗濯、料理、幼児の入浴、——に追われ通しである。「陪審員の皆さん、彼女がこの子を憎まざるを得なかったのは、当然であります——(子どもを悪者にし、六つの娘の中に忌まわしく、憎むべき欠点を発見しようとする「弁護人」が存在するかもしれない!)、——先が見えず、理性喪失の発作的精神異常狂乱の瞬間、ほとんど我を忘れ、彼女はこの娘を捉え、そして……陪審員の皆さん、誰もが同じことをする、子どもを窓から投げ捨てるのではないのでしょうか？」

上述した言葉は、もちろん諷刺画である、しかし、もし言葉の創作に着手するとなったら、実際には、これにかなり似たこと、つまりこの諷刺画に似たものになると思う。この人非人の継母の振舞いはあまりに異様であり、犯罪者の罪を軽減するのに役立つような、繊細で深刻な詮議も、本当に必要となってくるが、その際に、この諷刺画に似ているということ自体が不快至極なのである。¹⁵⁹

¹⁵⁸ コルニーロヴァ事件の内容と詳細な推移については本節の引用を参照されたい。

¹⁵⁹ Достоевский. Дневник писателя. Т. 23. Л., 1981. С. 19.

この段階ではコルニーロヴァという固有名詞すら書かれていない。「人非人の継母の振舞いはあまりに異様」(поступок этого изверга-мачехи слишком уж странен)というドストエフスキーの表現が少し気になる程度であり、彼の主な関心は予想される弁護人の弁論手法にあったようである。

10月15日にコルニーロヴァ事件についての裁判所判決が出る。判決に対する意見を書き込む習慣を続けていたドストエフスキーは1876年10月号で、「単純な、しかし不可解な事件」(Простое, но мудреное дело)という題で、判決内容と共に事件の詳細を紹介している。

10月15日、裁判所で例の継母事件の判決があった。ご記憶であろうが、半年前の5月、6歳になる幼い継娘を4階の窓から投げ捨てたが、何かの奇蹟からか、子どもは無疵で丈夫なままだったという、あの事件である。[……]

要するに、事件は、——子供が奇跡的に助かった点を除くと、——外見では、かなり単純明瞭である。裁判所でもこの点、すなわち「単純」という点からこの事件を見て、同時に単純至極な形式で、「犯行当時17歳以上20歳未満の犯罪要件に該当するエカチエリーナ・コルニーロヴァを、2年8か月の懲役に処し、その満期後、終身シベリア流刑」という刑に処した。

しかし、単純明瞭このうえないにもかかわらず、何か完全には説明しきれていないものが残っている。[……]

それでは事実に従って、追跡してみよう。第一に、被告は自分で有罪と認めた。犯罪遂行後、即刻みずから自首したのである。その際、警察分署で話したところによると、彼女は、夫に対する恨みからよく思っていなかった継娘をなきものにしようと、すでに前の日から考えていたのだが、その晩は夫の在宅が邪魔をした。翌日になり、夫が仕事に出かけたので、彼女は窓を開け、草花の鉢を窓じきいの片側に並べて置き、継娘を呼んで、窓じきいに這い上がって窓から下を見てごらん、と命じた。娘はすぐに這い上がり始めた。窓の下にどんなものがみえるかわからないと、好奇心から這い上がったかもしれない。しかし、這い上がって膝をつき、両手を窓にもたせかけて、覗き見始めたとき、継母はそのちっちゃな両足を背後からつかんで持ちあげたので、娘は宙に舞った。犯人は飛び落ちてゆく女の子を眺めると(こんなふうに自白している)、窓を閉じて、服を着換え、部屋の戸締りをして、起こったことを自白するために、警察分署へ出頭したのである——これが事実の全てで、おそらくこれ以上単純なことはないと思われる、だが実際には、そこにどれほどの奇怪さがふくまれているのだろう、そうではないか？¹⁶⁰

事件の詳細を済ませた上で、ドストエフスキーは自らの意見とその理由を述べている。

被告の犯行にピッタリあてはまる原因があると、わたしには単純に思われた、——すなわち、——「彼女の妊娠」である。

周知のごとく、妊娠時の女は(初産の場合は特に)、しばしば一種奇妙な影響と印象に囚われ、妊婦の精神はそれに、不思議なほどに、幻想的なほどに、服従してしまうことがみられる。こうした影響は時には、——稀にはあるが、——常軌を逸し、異常で、合理的ではない形をとるものである。[……]

犯人を(犯行後に)鑑定したニキーチン医師は、自らの意見として、コルニーロヴァの犯罪は、いら立ちと激情は認められるにせよ、意識的に行ったものだと言明した。しかし、第一に、この場合この言葉、意識的とは何を意味するのか？ 人が、無意識的に、何かをなすのは稀なことで、夢遊病、熱に浮かされている時、飲みすぎのためや狂気に襲われた時くらいである。完全なる故意の下に、だが実際には、責任能力がないままに、なにかの行為を行うことがある

¹⁶⁰ Достоевский. Дневник писателя. Т. 23. Л., 1981. С. 136-137.

のを、せめて医学ぐらいは、承知していないのだろうか。〔……〕

まだ、子どもだった時に、聞かされたモスクワのある婦人の話が記憶に残っている。その婦人は妊娠するたびに、ある時期に達すると、物を盗みたいという抑えきれない驚くべき欲望を起すのであった。彼女は訪問客として訪れた先の知人や、自分のところへ来た訪問客から、ついには何か買物に出かけた店からさえも、物品や金銭を盗み取った。後に、これらの盗品は、婦人の家人によりそれぞれ持ち主に返された。しかも、この婦人は決して貧しくない、教養のある、上流の階層に属する婦人であった。こういった奇妙な欲望の数日が経過すると、もはや彼女の頭には、盗もうなどという気は起こらないのであった。当時、すべての人が、医学界も含め、これを妊娠時の一時的アフェクトと決めていた。しかも、もちろん、彼女は意識的に、明瞭に理解したうえで盗んだのである。意識は完全に保たれていたのだが、ただ、誘惑に持ちこたえられなかったのである。思うに、医学は今日においてさえも、類似の諸現象について、つまり、こういった諸現象の精神面について、正確な説明は出来ないであろう。いかなる法則により、人間の心に、こういった急変、屈服と影響、精神錯乱が起こるのか、またこの場合、意識的とはそもそも何を意味し、いかなる役割を果たしているのか？〔……〕

この事件は明瞭ではあるが、やはり単純ではない。事件が論理的だとしても、——もし彼女が妊娠していなかったら、そういった論理自体が生じてこないことには、同意していただきたい。

彼女が妊娠していなかった時の論理は、例えばこんなふうであっただろう。夫からの仕打ちを受け、亭主憎しの思いで、継娘とわが家に取り残された時、煮えくりかえる興奮から、こんなことを考える。「夫への面当てに、この娘を窓の外へ放り出してやろうか」、——そう考えるには考えても、しかし実行はしなかつただろう。道を破ったのは想念の上だけであって、行為の上ではない。ところが、この場合は妊娠していたので、そのまま実行してしまったのである。二つの場合とも、論理は同じなのだが、しかし差はとても大きなものとなる。¹⁶¹

子ども時代に聞かされたモスクワの上流階層の夫人が妊娠時に見せた盗癖が、10月15日の裁判所判決についてのドストエフスキーの意見表明にかなりの影響を与えたようである。モスクワの夫人の場合とは違い、コルニーロヴァの場合は妊娠だけが犯行の原因と特定することは難しい。ドストエフスキーは文学的な想像力を駆使して、妊娠が犯行の原因という結論に達したようである。

コルニーロヴァ事件は、法廷での判決に真っ向から反対する初めてのケースとなったので、逡巡していることを示す文章も書かれている。

「こういった病的なアフェクト(боллезненные аффекты)は稀にしかないが、あることはあるのである。だから、今回の場合も、妊娠からくるアフェクトがあつたかもしれぬ？」これがその考えである。少なくとも、今回の場合には、慈悲の精神はだれにでも理解され、見識の動揺を引き起こすことはないだろう。しかし、間違いであつた場合にはどうなるのか。それでも刑罰の過ちよりは慈悲の過ちのほうがましである。検証がとうてい不可能なこういったケースでは猶更である。犯人は当初から自ら有罪と認めている。彼女は犯行直後のみならず、半年後の公判でも有罪と認めている。こうして、心の底からおのれを罪深いものと考えながら、シベリアへも行くだろうし、おそらく最後の時も、殺人者として懺悔しながら死んでゆくだろう。かくして、妊娠時に時々起こる或る種の病的激情ということは、彼女はおろか、世のだれ一人として夢にも思い浮かべないであろう。ところが、その実、病的激情こそがすべての原因なのであって、もし彼女が妊娠していなかったら、何事も起こらなかつたかもしれないのだ……ダメだ、二つの過ちから一つを選ぶなら、むしろ慈悲の過ちを取る方がましだ。そのほうが後でよく眠れる……¹⁶²

ドストエフスキーは自分の主張が間違いであつた場合も考慮した上で、刑罰の過ちと慈悲の過ち

¹⁶¹ Достоевский. Дневник писателя. Т. 23. Л., 1981. С. 138-139.

¹⁶² Достоевский. Дневник писателя. Т. 23. Л., 1981. С. 139-140.

を天秤にかけて、慈悲の過ちの方がましだと書くと同時に、「だれ一人として夢にも思い浮かべない」ことに気づいたからには、世間に対する啓発を行う責務があるという自負も感じられる。

10月号にはコルニーロヴァ事件が小説の材料になるのではないかという小説家ならではの意見も書かれている。

この事件を進展にあわせて、小説に書いてみたらどうか。男やもめと結婚した若妻から始めて、窓から子どもをほうり出し、子どもが確かに死んだかと窓の外をのぞいてみる瞬間まで、——それからすぐ警察分署へ出頭し、助産婦に付き添われて出廷した場面、さらに最後のお別れからお辞儀まで、それに……さて、そこでわたしは「もちろん、小説にはならなかった」と書くつもりだったが、実際には、「分裂した生活と最高の洞察」をもった主人公の出てくるわが国の詩や小説などよりは、この事件から、はるかに優れた作品ができるかもしれないのだ。それどころか、まったくのところ、わたしはわが国の小説家連がこの事件をどう見ているのか、まったく理解できない。これをこそ主題にし、進展にあわせて書いて、正真正銘の真実を描けばいいじゃないか！¹⁶³

すなわち、ドストエフスキーは「事実は小説よりも奇なり」ということを言っているわけであり、「分裂した生活と最高の洞察」よりは、「コルニーロヴァ事件」の方が小説の題材になるべきだと言っている。2ヶ月後の1876年12月号では「ふたたび単純な、しかし不可解な事件について」（Опять о простом, но мудренном деле）という題で、コルニーロヴァに面会に行ったことが書かれている。

わたしは自分が空想したことに感化を受けて、コルニーロヴァが獄内にいるうちに、全力を尽くして彼女に面会しようと決心した。白状するが、わたしは自分でコルニーロヴァについて書いたこと、その後空想にふけたことの中で、真実を言い当てたものがあつたかどうかを確かめることに、とても好奇心をそそられたのであつた。そんな時に、ある幸運な事情があつて、速やかにコルニーロヴァを訪れ、彼女と知合う機会をわたしに与えてくれた。訪問の場でわたし自身も驚かされた。想像してみたい、わたしの空想のうち、少なくとも四分之三が真実であつた。わたしはまるで自分が現場にいたかのように、真相を言い当てていたのであつた。¹⁶⁴

空想したことの真実度と正確度を確認したいという作家の意志がコルニーロヴァとの面会に繋がつたことが書かれている。「空想のうち、少なくとも四分之三が真実であつた」という箇所には作家はかなり満足しているように思われる。妊娠からくる奇怪な行動に関する具体的事実を聞き出したという記述が続く。

彼女は率直にことの成り行きを物語つた。「何か、怨みをはらすことがしたかったのですが、自分の意志ではなくて、だれか他の人のものだったような気がしています。」

わたしの質問に答えて、彼女が、事件を届ける為に、すぐ警察分署へ行ったことを付け加えたことをよく憶えている。「警察分署へ行くつもりなど少しもなかつたのです、なぜか行ってしまいました、なんの為だったかわかりません。そして、なにもかも自供しました。」〔……〕

何度か訪問するうちに、二、三の女看守たちに加えてA. П. Б. 女史——副刑務所長と、彼女の話を話す機会があつた。コルニーロヴァが、彼女たち全員の心に、明白な同情心を引き起こさせていることに、わたしは驚いた。A. П. Б. 女史は、様々な話をする中で、一つの興味ある観察を私に知らせてくれた。入獄当初（犯行直後）のコルニーロヴァは、不作法で、粗野で、敵意に満ち、憎々しげな口答えをぞんざいにする、まるっきり別の人間のようにあつた。ところが二、三週間たたないうちに、どういふわけか急にがらりと人が変わつてしまつて、善良で、

¹⁶³ Достоевский. Дневник писателя. Т. 23. Л., 1981. С. 141.

¹⁶⁴ Достоевский. Дневник писателя. Т. 24. Л., 1982. С. 38.

正直な、おとなしい女になり、「それが今日まで同じままなのです。」とのことであった。この報告は、この事件に何よりぴったりで、わたしはとても気に入った。¹⁶⁵

「二、三週間たたないうちに、どういうわけか急にがらりと人が変わった」という箇所は「妊娠時の一時的アフェクト」があったことを示す傍証となり得るので、ドストエフスキーは気に入ったようである。同じ12月号で、ドストエフスキーは「刑罰の過ちよりは慈悲の過ちのほうが優っている」を再び強調し、「被告を無罪に」という提言を繰り返している。

わたしは二か月前と同じことを、ここで再び繰り返したい、「刑罰の過ちよりは慈悲の過ちのほうがまし」なことを。不幸な女を無罪と認めていただきたい。そうすれば、前途に大いなる人生、多くのよき萌芽を、持っていると思われる若き魂は、おそらく滅びないですむであろう。流刑になると、心が墮落するゆえに、すべてが滅びてしまうのはおそらく間違いない。この段階なら、それとは逆に、彼女が身につけた恐ろしい教訓が、おそらく生涯にわたり、彼女を悪から守るだろう。¹⁶⁶

四か月後の『作家の日記』1877年4月号の「被告コルニーロヴァの釈放」(Освобождение подсудимой Корниловой)という節で、再審での判決についての報告がなされている。

本年4月22日、当地の地方裁判所で、被告コルニーロヴァの事件の再審が、新しい顔ぶれの裁判官と陪審員によって裁決された。昨年の上級裁判所の判決は、医学上の鑑定不十分につき破棄されたのである。[……]

わたしは法廷の傍聴席にあって、多くの感銘を受けた。ただそれらをお伝えするのが難しいので、ほんの少しだけの言葉にとどめておかねばならぬことを遺憾とする次第である。なにぶん、わたしがこの事件についてお知らせするのは、以前にいろいろとたくさん書いたからであって、読者にその結末をお知らせすることも、余計なことではないと考えたのである。[……]

鑑定人の人選も注目すべきものだった。招かれたのは六名で——全員、医学界の著名かつ卓越した大家だった。五人が証言を行った。三人はためらうことなく、妊婦に特有な病的な状態が、この事件の犯罪遂行に影響を与えることは、大いにあり得ると断言した。ただ一人、フロリンスキイ博士は、この意見に不賛成だったが、幸いにも、彼は精神科医ではなく、彼の意見に、殆ど重要性は認められなかった。

最後の証言者になったのは、わが高名なる精神科医ジューコフだった。彼は検事や裁判長の問いに答えながら、かれこれ一時間ほど証言した。あれ以上の精緻な人間の心とその病的状態の説明は、想像することが難しいだろう。多年にわたる興味あふれる観察の豊富さと多種多様さも、深い感動を与えた。私はどうかと言うと、鑑定人の証言の中のいくつかは、決定的に魅了された。鑑定人の証言は、十分に、被告に有利なものであった。被告が恐るべき犯罪を行った時に、病的な心の状態に陥っていたことを疑う余地がないことを、自らの意見として、肯定的かつ論理的に結論づけたのである。

最終的には、検事自身が、峻厳な調子ではあったものの、この犯罪が計画的な犯罪であるという点、すなわち求刑の中での最重要な罪状を放棄した。被告の弁護人であるリュスチグも、きわめて巧妙にいくつかの論告内容に反論したが、その中で最重要なもの、——すなわち、継母が継子に対してずっと抱いていた憎悪、——は、単なる野次馬のかげ口にすぎなかったことを、明瞭に示して、論点から外してしまった。続いて、裁判長が結構長い演説を行った後で、陪審員たちは、いったん退出したが、十五分も経たぬうちに、無罪の判決をくだし、多数の傍聴人に殆ど狂喜の念を呼び起こした。多くの人々は十字を切り、互いに祝賀し合い、手

¹⁶⁵ Достоевский. Дневник писателя. Т. 24. Л., 1982. С. 39-40.

¹⁶⁶ Достоевский. Дневник писателя. Т. 24. Л., 1982. С. 43.

を握り合った人たちもいた。

無罪になった被告の夫は、もう十時を過ぎていたにもかかわらず、その夜すぐさま彼女をわが家へ連れ帰った。そして幸福な彼女は、生涯にわたるであろう偉大な教訓を得て、この事件全体が、明らかに、神の御手にあることを、——**奇跡的な子どもの命拾い**から始まるのだが、——身にしみて感じながら、ほとんど一年ぶりに我が家に戻ったのである。¹⁶⁷

4月22日にコルニーロヴァは無罪判決を勝ち取る。ドストエフスキーにとっても嬉しい判決であったはずである。妊娠のアフェクトが犯行の原因と指摘して、判決に反対を表明した初めてのケースであり、その反対が功を奏して、再審を実現させ、しかも勝訴したのであるから、ドストエフスキーの達成感が興奮に満ちたものであったことは想像に難くない。

とはいえ、再審での逆転無罪判決に対する彼の反応は、法廷に集まって、狂喜し、互いに抱き合った人たちばかりではなく、むしろ逆のものであったことを5月2日の最終稿が示している。最終稿になると、興奮に満ちた表現は姿を消して、客観的な法廷報告にとどめようという作者の意図を感じさせるものになっている。

例えば、「なにぶん、わたしがこの事件についてお知らせするのは、以前にいろいろとたくさん書いたからであって、読者にその結末をお知らせすることも、余計なことではないと考えたのである。」(Да и сообщая о деле единственно потому, что прежде много писал о нем, а стало быть, считаю не лишним сообщить читателям и об исходе его. *вписано.*) という部分が新たに付け加えられている。次に、「被告の行為の遂行に」とだけ書かれていた植字原稿の表現が「この事件の**犯罪遂行に**」と、被告の行為が犯罪行為であったという表現に変更されている。(на совершение преступления и в данном случае / на [совершение] поступок подсудимой) さらに、決定的な変更が報告を締めくくる部分で行われている。5月2日の最終稿では「**奇跡的な子どもの命拾い**」と書かれているだけだが、その前の4月30日の植字原稿にはこう書かれていた。次の太字部分がそれであって、『作家の日記』には印刷されず、ボツになった幻の原稿である。「**コルニーロヴァについて**お知らせいたします、以前にいろいろとたくさん書いてきましたので、わたしを驚かせたこの事件について読者にその結末をお知らせすることは余計なことではないと思います。まして、4月22日の裁判所の判決について誰も一言も言わない(報道しない)様子なのでなおさらかと思えます。報道がないのはとても不思議なことです。この事件ほど興味深い事件はまたとないのに。まして、我が国の新聞はこの判決について何も報道していません。」(После: чудесного спасения ребенка. - Я [известил] написал теперь о Корниловой, потому что прежде много говорил об этом деле, поразившем меня, [а по] и почел не лишним известить читателей об исходе [дела] его. Тем более, что [ни одно издание] никто, кажется, не сказал ни слова [передал] о заседании суда 22 апреля. И это очень странно, ибо редко встречается дело более интересное. Тем более, что ни одна из газет наших не передала об этом исходе ничего.)¹⁶⁸

最初の太字部分は、最後の太字部分の代わりに予定されていた植字原稿をボツにしたために新たに付け加える必要が出てきたものであり、このことはドストエフスキーがメディアの反応に言及することをきっぱりと断念したことを示している。二つ目の引用も同じで、「被告の行為」を「犯罪」に変えることで、無罪判決に批判的なメディアに対する配慮を行っている。メディアの無言の抵抗を受けていることを実感したドストエフスキーは、コルニーロヴァ事件の報告を目立たないものにするのを決定したのである。コルニーロヴァ事件の報告が客観的なものに変更されていること、そして『おかしな人間の夢』の結論がかなり唐突で不自然なものになっていること、この二つは微妙なバランスの

¹⁶⁷ Достоевский. Дневник писателя. Т. 25. Л., 1982. С. 119-121. この引用の中にある3か所の太字部分は、1877年4月30日付けの植字原稿異文(Варианты наборной рукописи)と比較する目的で5月2日の最終稿の該当部分を筆者により太字強調したもの。

¹⁶⁸ Достоевский. Дневник писателя. Т. 25. Л., 1982. С. 298. 「ボツになった幻の原稿」であるこの引用の最後の太字部分は、1877年4月30日付けの植字原稿異文(Варианты наборной рукописи)にはあったのだが、5月2日の最終稿では削除されたものを筆者によって太字強調したもの。

上に立っているように思われる。勝利の成功感に冷や水をかけられた気分のドストエフスキーは、コルニーロヴァ事件では慎重に進まないといけなことを肝に銘じる一方で、圧力をかけ続ける勢力に対する対処法を早急に決定する必要に迫られていた。その決定が実際に行われたのが5月2日の最終稿である。

元々の植字原稿異文自体も古いものではない。コルニーロヴァ事件の再審判決の後でメディアがどう反応するかを確認してから書かれたものなので、最短で書かれていたとしても、4月22日の判決の3日後ぐらいだったのではないかと思われる。それを5月2日の最終稿に至る短い期間に全面的に変更している。このことが示しているのは、この期間内にドストエフスキーが重要な決定を行ったということである。その決定とは、「おのれみずからの如く他の人たちを愛す」ことの具体的な方法を「啓発に出かけることを生涯の仕事にする」と、ドストエフスキーが決めたことである。『おかしな人間の夢』の結論部分における唐突さ、不自然さ、力強い意志を感じさせる言葉は、この決定がなされたとせぬ限り説明が難しい。

1877年5月2日は記念すべき日となった。『おかしな人間の夢』と「コルニーロヴァ事件」、それぞれ別々に進行し、考察されてきた二つの問題は、この日のドストエフスキーの決定によって初めて接点を持ち、溶け合い、一つの新しい思想となって誕生したのである。

ドストエフスキーが最終校正時に見抜いていたように、再審の結果にメディアや『作家の日記』の読者層全員が納得していたわけではない。1877年12月号では、「前述した一つの事実の最終説明」(Заключительное разъяснение одного прежнего факта)という題でコルニーロヴァ事件についての最後の記述がなされている。

この事件には私もある程度関与するようになった。裁判長も、その後で又検事も、法廷で公衆に向かって、わたしの『作家の日記』での考え「犯人の行為には犯人の妊娠状態が影響しはしなかったか？」が刊行されたので、コルニーロヴァを有罪とする第一審の判決が、破棄されたと言明したからである。〔……〕

そのころ誕生したばかりの『北方報知』(Северный вестник)という新聞で、釈放に対するこの上なき憤懣と、わたしがこの事件に関与したことに対する憎悪に満ちた論文を読んだのである。〔……〕

わたしは個人としては、この筆者に答えようとは思わなかったのだが、この論文の中に、わが国の社会のある部分に潜んでいるのではないかとわたしが危ぶんでいたもの、すなわち、納得し難いという印象、疑惑、判決に対する憤激を見つけたのである。そこでわたしは、丸八か月間待つことにした。この期間中に、以下に記す全ての項目を、なるべく多く完全に確信しようと思ったからであった。

- ・この判決は被告に悪い影響を与えなかったこと
- ・逆に、裁判所の慈悲は、良き土の上に落ちた良き種子の如きものであったこと
- ・被告は憐憫と慈悲に確かに値する女であったこと
- ・あの犯罪を実行した際の、ほとんど幻想的な凶暴さともいふべき、説明しがたい発作は、——二度とくり返されず、またくり返されるはずがないこと
- ・この善良でおとなしい心の持ち主は、決して破壊者でもなければ、殺人者でもないこと(この点は審理の進行中にわたしが確信した)
- ・実際にこの不幸な婦人の犯罪は、何か特別な偶発性の事情、病的なもの、「アフェクト」で説明するしかないこと——アフェクトは妊娠中のある期間に、妊婦にはしばしば見受けられるものである(その他の不都合な事情や条件等が重なりあった場合であることは勿論である)——
- ・最終的には、陪審員も、社会も、法廷に居合わせ熱い同情をもって判決を聞いた聴衆も、——この判決と判決の合理性を疑ったり、自らの慈愛を悔んだりする必要がないこと¹⁶⁹

¹⁶⁹ Достоевский. Дневник писателя. Т. 26. Л., 1984. С.92-93.

ここで言及されている「論文」は、抵抗できない子どもに対する虐待を問題視して、ドストエフスキーを鋭く攻撃している。これに対してドストエフスキーは、幼い子どもへの憎悪から虐待を行うような継母は存在せず、且つ犯罪性の強いケースでもなかったと反論している。同じ12月号の「わたしの意見では、かなり多くのものを明らかにする一つの出来事」(Один случай, по-моему, довольно много разъясняющий)という節においても、彼は自らの主張の妥当性を補強するために、コルニーロヴァの現況を報告している。

ひと月ばかり前、ちょうどクリスマス前に、六か月もコルニーロヴァ夫妻に会っていなかったの
で、わたしは彼らの住居を訪ねた。すると、コルニーロヴァは開ロ一番、「あの子はわたしが孤
児院¹⁷⁰へ訪ねて行くたびに、喜んでわたしの頸に飛びついてきて、わたしを抱きしめるん
です」と、知らせてくれた。わたしが立ち去ろうとした時、彼女はだしぬけに、「あの子は忘れま
すわ……」と、言った。¹⁷¹

ドストエフスキーはさらに、「わたしは幼き者の敵であるか? 「幸福な」という言葉は時として何を意味するかについて」(Враг ли Я детей? О том, что значит иногда “счастливая”)という節で、最終的に、次のように結論づけている。

コルニーロヴァ事件に関しての全ての問題は、いかなる土地の上に種子が落ちたか、という点のみに存する。今回、この小論を書く必要があると思われた理由である。7か月前、きみの攻撃文を読み終わって、観察者氏¹⁷²よ、わたしは、自分の持つ情報を補充するため、きみへの答弁を待とうと決めた。今では、自分の集めた幾つかの材料により、次に述べる全ての項目を、今や間違いなく言い切れると、思っている。

- ・種子は良き土地の上に落ちたこと
 - ・一人の人間が復活したこと
 - ・この事件は誰にも害を及ぼさなかったこと
 - ・犯人の魂は、後悔と、人々の無限の慈悲がもたらした有益な永遠の感動にしっかりと圧倒されていること
 - ・あれほどの善と愛とを体験した以上、彼女の心が今となっては邪悪なものにはなり得ないこと
 - ・観察者氏よ、きみがあれほど憤慨している、「妊娠のアフェクト」は疑いのないものであるのだが、彼女は「妊娠のアフェクト」を言い訳にして自己弁護をする考えを持っていないこと
- 要するに、観察者氏よ、わたしは、きみ以外にも私の読者たちと、あのととき彼女を無罪とした慈悲深いすべての人々に報告するのが、決して無駄なことではないと感じたわけである。¹⁷³

コルニーロヴァ事件へのドストエフスキーの関与をこころよく思わなかった「観察者氏」の質問に対して、ドストエフスキーはすぐに反論していない。妊娠のアフェクトから犯罪を行った加害者コルニーロヴァと被害者である子どもの両者とも、保護が必要な弱者に属するという点では差はない。弱者のどちらを優先して救済するかは、極めてデリケートな問題で、どちらを選択しても説明責任が求められる。現実には観察者氏は子どもたちを擁護する立場からドストエフスキーを強く非難している。説明責任を果たす際にコルニーロヴァや女の子の近況を報告した方が良いと、ドストエフスキーは判断した。『おかしな人間の夢』の最後で、「啓発に出かけるのだ」と書いた決意表明は、8か月後のコルニーロヴァ事件の最終報告において、実際に実践に移されていたのである。

¹⁷⁰ コルニーロヴァが監獄で生まれた乳飲み子をかかえていて、朝から晩まで仕事に追われているので、夫妻は、上の子を孤児院に一時預けにしている、コルニーロヴァがおみやげ等を届けている。

¹⁷¹ Достоевский. Дневник писателя. Т. 26. Л., 1984. С.103.

¹⁷² 『北方報知』(Северный вестник)という誕生したばかりの新聞に、釈放に対するこの上なき憤懣と、ドストエフスキーがこの事件に関与したことに対する憎悪に満ちた論文を8か月前に投稿した人物のことを指している。

¹⁷³ Достоевский. Дневник писателя. Т. 26. Л., 1984. С.110.

第2節：『作家の日記』とは何か

本論文は『『作家の日記』からの考察』という副題を冠している。すなわち、『作家の日記』に書かれているドストエフスキーの思想を補助線に使って、彼が5つの小説で言わんとしたことの解明を目指している。ついては『作家の日記』とは何かということを、ここで考えてみる必要があるだろう。

モーソンはジャンル論の観点から『作家の日記』の分析を行っている。モーソンは『作家の日記』が文学とジャーナリズムとの複合体であることを指摘したうえで、ドストエフスキーが雑誌『世紀』を一時休刊せざるを得なくなった際に、従来のフェリエトンなどよりも一歩進んだ、包括的で新しい文学ジャンルに位置づけられる雑誌刊行のアイデアを得たと述べている。

ヴィクトル・シクロフスキーが、ディケンズは包括的で多種多様なコンテクストを小説にはめ込むことによって小説の枠を超えようとする大胆不敵な実験をしたと述べたことがあったが、もしドストエフスキーも小説に満足していなかったとするなら、ディケンズの包括的で多種多様な改革案に注目していたと考えることが可能である。¹⁷⁴

次に、モーソンはシベリア時代の友人ヴランゲリ宛ての1865年のドストエフスキーの手紙¹⁷⁵を紹介したあと、ドストエフスキー本人は段階を踏みながら試行錯誤すればよいと考えていたと述べる。そして、その最初の機会が1873年の週刊新聞『市民』(Гражданин)で訪れたとして、アンナ夫人の回想を紹介している。

フォードル・ミハイロヴィチは、『悪霊』を書き上げてしばらくは、次に何を取り上げるかを何も決めていませんでした。『悪霊』で、あまりに疲労困憊していたので、新しい小説にすぐに取りかかるのは不可能と思っていたようです。しかも、まだ外国にいた時に思いついたアイデア——具体的には月刊雑誌『作家の日記』の出版のことですが——には問題がありました。借金の返済は言うに及ばず、家族の生計を維持しながら雑誌を出版するには、かなりの資金が必要でした。同時にロシアの文学界で形態的にも、また内容的にも全く新しいそんな雑誌が大きく成功するかどうかとも問題でした。
[……]

逡巡していた時期にメンチェルスキー公爵からの申し出がありました。『市民』誌の編集者としての仕事とコラムへの原稿料をそれぞれ支払ってもらえるという良い条件のものでした。特に気にしていたお金の問題を解決するものであり、後になって考案するスタイルとまではいかないにせよ、『作家の日記』のアイデアは『市民』誌の頁で実現できるとドストエフスキーは考えていたようでした。¹⁷⁶

このようにアンナの回想が続けられている。彼女の回想は『作家の日記』を成立させるために不可欠な二つの条件にふれており、とても重要と思われるものだが、モーソンがお金の問題について触れているのはここだけであり、彼は著作のそれ以外の部分をすべて形態と内容の考察にふり向けている。すなわち、彼が多くの頁を割いて論証しようとしているのは、ノン・フィクションである『作家の日記』がドストエフスキーによって創造され

¹⁷⁴ Gary S. Morson, *The Boundaries of Genre: Dostoevsky's Diary of a Writer and the Traditions of Literary Utopia*: University of Texas Press, Austin, 1981. P. 27.

¹⁷⁵ Morson, *The Boundaries of Genre*, p.27.

「ぼくは、ある定期刊行物を出そうと思っています、ジャーナルとは言えないものですが有益で、利益もあるものになります。一年内に出せるでしょう。」

¹⁷⁶ Anna G. Dostoevsky, *Dostoevsky: Reminiscences*, tr. and ed. Beatrice Stillman: Liveright, New York, 1977. pp. 212-213.

た新しい文学ジャンルであるということ、この一点にあるようだ。

これに対して、当のドストエフスキーが『作家の日記』をどう考えていたかについて考えてみたい。ドストエフスキーは、1876年4月9日付けの手紙で、アルチャーフスカヤという一読者からの忠告に対して、評論集『作家の日記』の価値は芸術作品の創作に不可欠な現実を知ることにあると回答している。

お手紙には、わたしが『日記』で才能をつまらぬことに浪費しているというお考えが述べられていますが、同じことを当地でも耳にしています。ついでに申し上げますと、わたしは反駁の余地のない結論に達しました、すなわち、作家——芸術的作家は、美しい芸術以外に、自分の描く現実を微細な点に到るまで正確に（歴史的に、また流れ動いている現在をも）知っていなければならないのです。[……]

わたしは、或る大きな長編を書こうとしておりますので、ただの現実ではなく現在流れ動いているものの詳細な調査に没頭しようと思ったのです——実際のところ、ただの現実なら、そこまでしなくとも知っております。現在流れ動いているものの中で最も重大な課題の一つは、わたしにとっては、例えば若き世代であり、それと同時に——現代ロシアの家庭であります。¹⁷⁷

この書簡から二つのことが分かる。一つ目は『作家の日記』に不満を持っている読者の存在、それも一人ではないことに作家が気づいていることである。二つ目は不満を持っている読者に対して、芸術作品の創作には現在流れ動いているものの詳細な調査に没頭しなければならないと訴えていることで、芸術作品の創作が『作家の日記』執筆よりも優位にあることを認めていることである。「芸術作品を書くためには『作家の日記』を書くことが必要ですので、どうぞあまり批判しないで下さい」と頼んでいるのがこの手紙の正確なニュアンスであろう。

とはいえ、この返事が論理的であるかといえば、そうとは言えない。『作家の日記』を刊行していなかった時期に書かれた作品、例えば『罪と罰』は、「自分の描く現実を微細な点に到るまで正確に（歴史的に、また流れ動いている現在をも）知らず」に書かれていたのか？ そんなことはなく、『罪と罰』執筆当時も、作家は流れ動いているものの詳細な調査に没頭していたはずである。ただ、当時は『作家の日記』が存在していなかったため、調査の結果を創作ノートやメモに書き留めていたのであろう。

アルチャーフスカヤ宛てのこの手紙は、個人雑誌としての『作家の日記』の自費出版を開始して僅か3か月経過したところで書かれているので、『カラマーゾフの兄弟』の構想もはっきりとは固まっておらず、また新たに開始した『作家の日記』中心の文筆活動をそう簡単に中止できないことの二つがドストエフスキーの胸中をよぎったのではないと思われる。これら二つのバランスを取りながら書いたのが、アルチャーフスカヤへの返事であったと思われる。

それからちょうど1年が経過して、ヒンデンブルグの善行とコルニーロヴァ事件の成功を組み合わせ、「啓発を生涯の仕事にする」という使命感を確立していた作家には、その時点で三つの選択肢があった。『作家の日記』を発行し続け、必要に応じて『おとなしい女』や『おかしな人間の夢』のような短編を書く従来のやり方を踏襲すること、長編小説執筆に専念するやり方をとること、どちらかに決めずに両方を併用するやり方の三つである。ドストエフスキーは最終的に長編小説と『作家の日記』を併用する策を採用している。『作家の日記』発行を一時休止はしたものの、1881年1月に復刊しているため、長編小説だけに専念することにしたわけではない。家族に対する責任から考えて、これがぎりぎりの選択だったように思われる。

¹⁷⁷ Достоевский. Письма 1875-1877. Т. 29 Книга Вторая. Л., 1986. С. 77-78.

以上見たように、アルチェーフスカヤへの手紙におけるドストエフスキーの姿勢は、モーソンの主張とは異なっている。この手紙から「新しい雑誌を、包括的で新しい文学ジャンルに作り変えていく」というドストエフスキーの意志を読み取ることはできない。彼の姿勢は、「芸術作品の創作に不可欠な現実を知るための実践として『作家の日記』は機能している」というものである。それゆえ、彼はジャーナリスティックな文章よりも小説に最大の価値を与えている。それも当然だろう。ドストエフスキーは作家なのだから。

作家本人が最大の価値を認めている芸術作品すなわち小説という形式においてこそ社会啓発は行われなければならない。それゆえ、「おのれみずからの如く他の人たちを愛す」具体的方法を「啓発に出かけることを生涯の仕事にする」ことに決めた時、『作家の日記』を一時休刊して小説の創作に専念したことは、ドストエフスキーにとっては自然なことであった。『カラマーゾフの兄弟』という表題が付されたこの小説の完成のために多くの歳月が費やされることになるのだが、「序章」において引用した1879年8月13日付けのアンナ宛ての手紙が示すように、彼はいささかも迷うことなく、その完成に向かって突き進んだ。

第6章『カラマーゾフの兄弟』

『罪と罰』と『カラマーゾフの兄弟』は、どちらも刑事事件について書かれた長編で、それぞれ裁判についての記述が見られるが、内容も記述量も対照的である。内容の差で目立つのは量刑の差である。前者では二人を斧で斬殺したラスコーリニコフに8年という比較的寛大な判決が言い渡されているのに対し、後者では父親殺しの真犯人ではない長男ミーチャに20年の厳刑が科されている。記述量の差で際立つのは、裁判についてのそれが比較にならないことである。前者では裁判の経過や結果がエピローグで少し述べられているだけで2頁弱にすぎないのに対して、後者では一編全体が90頁に及ぶ裁判の場面に費やされている。『カラマーゾフの兄弟』では裁判に関する関心が遥かに大きくなってきている。

第6章の目的は、ドストエフスキーが『カラマーゾフの兄弟』の裁判の場面で90頁を費やして言おうとしたことの解明にある。解明するための具体的な方法として、第一に『作家の日記』に書かれているロシアの公開陪審員制度に対するドストエフスキーの見解をまとめたい。第二に『カラマーゾフの兄弟』の裁判の場面に焦点を当て、被告人であるミーチャと真犯人であるスメルジャコフをドストエフスキーがどのように書いているかについての考察を行いたい。以上を組み合わせればドストエフスキーが言おうとしたことが浮かび上がって来るであろう。

『罪と罰』と『カラマーゾフの兄弟』の裁判を比較している先行研究は多いとは言えない。筆者の調べた範囲では、ソ連期の法学研究者カルロヴァによる研究書『ドストエフスキーとロシアの裁判』(1975)¹⁷⁸、現代ロシアの文学研究者ビリュコフとドボリャーニコヴァ、そしてロシアの陪審制に詳しい社会学研究者のグリゴレンコらによる研究書『ロシア古典文学作品における陪審員裁判の社会文化的起源が映し出すもの』(2019)¹⁷⁹、ロシア文学研究者の番場俊による論考『『罪と罰』の捜査担当官ポルフィーリー・ペトローヴィッチ、あるいは文学と法の交錯に関する反人物論的考察』(2010)¹⁸⁰の三論考に限られる。これら三つに共通して欠けているのは、『カラマーゾフの兄弟』で無実のミーチャをドストエフスキーが懲役20年の実刑にしたのはなぜか』についての検討や評価が行われていないことにある。『罪と罰』では、二人を斧で斬殺したラスコーリニコフに8年という寛大な判決が言い渡されているのに対し、『カラマーゾフの兄弟』では、父親殺しの真犯人ではない長男ミーチャに20年の厳刑が科されている。この量刑の差が持つ意味についてよく考えてみたい。

第1節:ロシア公開陪審員制度に対するドストエフスキーの態度

ドストエフスキーは、『作家の日記』1877年10月号で、「嘘は真実のために必要である。嘘で嘘を塗り固めると真実になるとするのは本当か?」(Ложь необходима для истины. Ложь на ложь дает правду. Правда ли это?)という題で、公開陪審員制度の問題点を指摘している。

それこそが必要なんです、双方からの誇張というやつが！陪審員の中には、あまり教養がない上に忙しい人間がいて、店のことや仕事に追われて集中を欠き、事件に没頭出来ない場合が多い。だから、事件のあらゆる側面、まずあり得ないような場合までも示して、なるほど人間の頭に浮かび得ることは全て論告で示されていると陪審員の理解を深めてやらねばならない、同様に弁護人側からも、被告を高嶺の雪よりも潔白に見せる為に、考え得ることが正否を問わず全て示されていると、陪審員を納得させねばならない。[……]

¹⁷⁸ 第1章『死の家の記録』小括の箇所にて引用済みである。

¹⁷⁹ Бирюков Н.Г., Григоренко О.Н., Дворянинова Е.И., Отражение социокультурных истоков суда присяжных в произведениях русской классической литературы. коллективная монография, Фонд науки и образования, Ростов-на-Дону. 2019.

¹⁸⁰ 番場俊『『罪と罰』の捜査担当官ポルフィーリー・ペトローヴィッチ、あるいは文学と法の交錯に関する反人物論的考察』『現代思想』38巻4号、2010年、286-297頁。

一言で言えば、現代の裁判は、単に知性の勝利あるいは最高の結実であるばかりでなく、最高に巧妙なものである。これには同意しないわけにはゆかない。おまけに裁判は公開である。数百人の聴衆が集まることがあるが、果たして聴衆は見世物見物のお祭り気分のみで集まると想像すべきだろうか？ 勿論、否である。聴衆がどんな動機で集まろうと、高潔で、力強い、教化的かつ治効性ある印象を抱いて裁判の席を立つべきである。だが実際には、全ての人々は傍聴席に座り、そこに何か根本的な虚偽が在るのを見てとるのである。[……]

私は帰宅し、一人で考えてみる。検事のイワン・フリストフォルイチは、個人的な知人で、最高に賢く、善良な人物だが、嘘をついた。そして嘘をついたことを自分でも承知していたのだ。ちょっとした譴責、或いはせいぜい禁固2ヶ月ぐらいの事件を、僻遠の地への20年間の流刑へとこじつけた。事件を明瞭にするために必要だったとしても、やはり検事は嘘をついたのだ。意識的に嘘をついたのだ。¹⁸¹

陪審員たちに納得して貰う為に、検事と弁護人は細心の準備をして論告と弁護を行うが、双方とも誇張の必要性を感じている。知性の勝利や結実が、謳い文句としてもはやされているが、現代の裁判の実態は誇張を重視する巧妙なものになっているとドストエフスキーは指摘している。知己であり、善良なフリストフォルイチ検事の論告を聞いた裁判から帰宅したドストエフスキーは、そんな人物でさえ、意識的に嘘をつき、誇張を行わざるを得ない公開陪審員制度の実態に愕然としている。

才能ある弁護人が良心をまげながら、卓越した嘘をつくのを見て、「まあ、なんて嘘が上手な人でしょう！」と、聴衆は自席から拍手を送らんばかりである。これでは多くの聴衆に、冷笑的態度と偽善が生まれ、知らぬ間に根を張るだろう。渴望されるのは今や真実ではなく才能となり、面白がらせ、気晴らしさせてくれればそれで良いのだ。気絶するほどとんぼ返りをうっても取り戻せないほど、人道的感情が鈍くなる。さらに想像して見ていただきたい。もしその嘘つきが驚くべき才能の持ち主だったらどうだろう？ 全てが私のくだらぬ愚痴にすぎないことはよく承知している。しかし、耳を傾けていただきたい。公開陪審員制度は、ロシア固有のものでなく、外国を模倣したものである。やがていつか、ロシアの国民性とロシア精神とが、好ましからぬ習慣の噛み合わせの悪さを滑らかにし、偽善を撲滅し、万事が真実と真理によって進行することを期待してはいけないだろうか？

なるほど今は不可能である。弁護人側も検事側も、好ましからぬ習慣を利用して脚光を浴びている。一方は金を、他方は栄達を求めている。[……]

弁護人、検事の双方から、技巧的誇張が姿を消し、真実の探究ごっこではなく、全てが誠意にあふれた本当のものとなる。舞台で行なわれるのは見世物や演技ではなく、教訓や模範になるのだ。間違いなく弁護人のお礼がはるかに少なくなるだろう。このユートピアが実現されるのは、我々の背中に翼が生えて、みんなが天使に変化した時かもしれない。そうなったら裁判もなくなるのだ……¹⁸²

ドストエフスキーは、検事の嘘に加えて、弁護人の嘘についても指摘している。弁護人は金を、論告者は栄達を求めて現行制度を悪用している現状を見たドストエフスキーは制度改革を訴えており、外国からの借り物でない、ロシアの国民性とロシア精神に基づいたものにしたいとの希望を表明している。ユートピア的な理想であると書きつつも、向かう方向が明快である。これから2か月後にドストエフスキーは『作家の日記』を一時休刊し

¹⁸¹ *Достоевский*.. Дневник писателя. Т. 26. Л., 1981. С. 53.

¹⁸² *Достоевский*.. Дневник писателя. Т. 26. Л., 1981. С. 54.

て『カラマーゾフの兄弟』を書き始めているので、この引用が『カラマーゾフの兄弟』執筆開始直前の作家の公開陪審員制度に対する最新の見方と考えられる。

これより以前にも、1873年の『作家の日記』の「環境」(Среда)¹⁸³において公開陪審員制度の主要な構成員である陪審員と弁護人についての言及がなされている。最初に書かれているのは評決権を持つ陪審員についてである。

そこ(英国一筆者注)では、これほどの権力が「突如として天から」落ちて来たのではない。陪審員制度そのものが自身で考案したもので、借り物ではなく、何世紀もかけて固め上げ、生活に即して確立したものであり、贈物として受け取ったものではない。英国の陪審員は、法廷に席を占めるやいなや、自分が優しい心を持った感じやすい人間であるだけでなく、まず何よりも公民であることを理解している。彼らは公民としての義務遂行のほうが、個人による心情的善行よりも重要と、おそらく考えるのである。[……]英国の陪審員はかなりの頻度で、心を鬼にして有罪の判決を下している。その理由はほかでもない。国のためなら全国民が自らの血を捧げることを惜しまなかった古き英国の価値観通りに、悪徳(порок)は悪徳と呼ばれ、非道(злодейство)は非道と呼ばれ続けていることと、国家の道徳的基盤が堅固かつ不変で今も厳存していることの二つを、自らの判決によって全国民に証明することが、何よりも優先すべき自らの責務であると理解しているからである。¹⁸⁴

ドストエフスキーは英国の陪審員裁判の中に、公民と個人の在るべき関係が何世紀もかけて確立されてきた独自のものを見ている。その英国とは異なり、ロシアの陪審員裁判では、被告を無罪にしまいがちに懲罰忌避の傾向が見られるとし、その理由を陪審員制はロシアで考案されたものではないとして、彼は以下のように論じている。

悪を悪と言わねばならぬ。その代わりに、判決の重荷の半分は自ら背負わなければならぬ。我々にも罪があるという考えを抱いて法廷に入ろうではないか。すべての人が恐れ、法廷を出るときに我々が抱く、この心からの苦痛こそ、我々にとっても罰となるであろう。もしこの苦痛が真実のもので、強いものであれば、苦痛は私たちを浄め、より良い存在にするだろう。自らをより良くすれば、我々は環境をも矯正し、より良いものとするだろう。ただこれによってのみ矯正し得るのである。自らの憐憫を回避し、自ら苦しまぬために、次から次へと被告を無罪にしてやる、何と安易な道だろう。こんなことでは、犯罪など全く存在せず、すべて「環境が悪い」と、徐々に結論づけられていくだろう。¹⁸⁵

ドストエフスキーは「悪を悪と呼ぼう」と主張している。懲罰忌避は安易な道であると批判しており、英国式の良いところは守らなければならないという主張である。「その代わりに判決の重荷の半分は自ら背負おう。苦痛は私たちを浄め、より良い存在にするだろう。自分自身がより良くなれば、環境をも矯正し得るはずだ」という部分は、ドストエフスキーが求めている望ましい陪審員像を示している。

次にドストエフスキーは弁護人について言及している。児童虐待(熱湯で手にひどい火傷をおった赤ん坊)と、ドメスティック・バイオレンス(亭主の殴打に耐えかねて縊死した百姓の女房)で弱い立場の人たちが虐められている実例をあげて、技巧的誇張によって

¹⁸³ 初年度の1873年に限っては、『作家の日記』は独立した刊行物としてではなく、週刊新聞『市民』(Гражданин)の誌面に連載という形で発表されている。

¹⁸⁴ Достоевский. Дневник писателя. Т. 21. Л., 1980. С. 14.

¹⁸⁵ Достоевский. Дневник писателя. Т. 21. Л., 1980. С. 15-16.

情状酌量に誘導する弁護人を批判している。

陪審員の皆さん、この出来事は全くもって人間らしいものとは呼べないものです、しかし、この事件を全体として考えていただきたい。環境、事情というものを考慮願います。この婦人は貧乏なのです。家でたった一人の働き手なのです。不快なことを我慢している。乳母を雇う金さえもない。この悩ましい環境から生じてきた癩癩が、ついには彼女の内部へ入り込んでくるのは自然なことでもあります。そんな時に彼女が赤ん坊の手を湯口の下へ持ってゆくのは、無理からんことではありませんか……〔…〕

おのれの良心に反し、おのれの信念に反し、あらゆる道徳性に反し、あらゆる人間性に反して、弁護人は言い抜けをし、身をかわしたり、嘘をついたりしているではないか！〔……〕

「教育がないせいだ、鈍感なせいだ、憐れんでやりたまえ、環境なんだ」と、百姓側の弁護人は主張した。しかし、百姓は何百万人も存在しているけれど、全員が自分の女房を逆さ吊りにしているわけではない！〔……〕

弁護人諸君よ、諸君の「環境」論での言い抜けは、もう沢山だ。¹⁸⁶

批判の対象は、二つの事例とも、環境論を振りかざして陪審員たちを安易な情状酌量へと導き、弱者の逃げ場を奪っている弁護人に向かっている。カルロヴァはこの時期の『作家の日記』の評論について言及し、「ドストエフスキーはこの週刊新聞『市民』を倫理と権利の普及活動を行う闘争的な機構(боевой орган)に変えることができた」¹⁸⁷と書いて、法学者の立場からドストエフスキーの姿勢に注目している。

『作家の日記』を個人雑誌として出版し始めた1876年には、2月号第2章で「クロネベルグの事件に関して」(По поводу дела Кроненберга)の題で、当時著名であった弁護人スパソーヴィチを手段を選ばぬ狡猾な男として手厳しく批判している。この「クロネベルグの事件」とは、父親が七つになる娘を手ひどく、残酷に折檻、打擲し、児童虐待の疑いで起訴されたが、結局は無罪になった事件である。

「スパソーヴィチ氏」が注目すべき才能のある弁護人である事は、誰もが知っている。この事件における彼の弁論は、わたしの意見では、最高芸術であると思う。にもかかわらず、彼の弁論はわたしの心に殆ど嫌悪を催させる印象を残した。〔……〕

彼は聴衆の心から子どもに対する憐憫の心さえも、根こそぎ引き抜いてしまった。ムチの下で15分も続いた(5分でも恐ろしいのに)叫び声「お父ちゃん！お父ちゃん！」、そうした一切のものが消え失せ、舞台の最前列に、「薔薇色の顔つきで、にたにた笑い、狡猾で、心が腐り、悪徳を秘めた、すばしこい小娘」が現れた。「スパソーヴィチ氏」は、自分にとって最も危険なものである年齢を、巧妙に封印したので、聴衆は彼女が七つの少女であることをほとんど忘れてしまった。全てを破壊しつくした彼は、当然ながら無罪放免の判決を得た。しかし、「もし陪審員が彼の依頼人を有罪としたら」どうすれば良いのか？だからこそ、手段を選んだり、お上品ぶってはいたらなかったのである。「結果さえ素晴らしければ、手段は選ばない」。¹⁸⁸

スパソーヴィチの嫌悪を催させる手練手管について、ドストエフスキーは24頁の長きにわたって執拗に糾弾し続けている。どうやら彼は『作家の日記』の読者たちにこのことを

¹⁸⁶ Достоевский. Дневник писателя. Т. 21. Л., 1980. С. 22-23.

¹⁸⁷ Карлова. Достоевский и Русский суд. С. 133.

¹⁸⁸ Достоевский. Дневник писателя. Т. 22. Л., 1981. С. 56-57.

どうしても訴えたくて仕方がなかったようである。

以上、第1節では、ロシア公開陪審員制度全体と、裁判の主要な構成員である陪審員と弁護人の双方が持つ問題点について、ドストエフスキーの裁判に関する思想と思われるものを紹介した。

第2節: 誤審を選んだドストエフスキーの意図

第2節では『カラマーゾフの兄弟』第12編「誤審」(Судевная ошибка)の裁判の場面で、被告人であるミーチャと真犯人であるスメルジャコフがドストエフスキーによってどう描かれているかの検討に入りたい。

ここでたちまち問題となるのは、評論集である『作家の日記』の場合とは違って、文学作品である『カラマーゾフの兄弟』からドストエフスキーの思想を取り出すのが比較にならない程難しいということである。ドストエフスキーの長編はいわゆる「ポリフォニー」と呼ばれる手法で書かれており、ドストエフスキー自身の思想や主張が仮に作中にあったとしても、幾重にも相対化が図られていて、見えにくくなっている。

例を一つ紹介する。『作家の日記』においてドストエフスキーは人間靈魂の不滅に関する思想をこう述べている。「地上における最高思想はただ一つしかない、すなわち人間靈魂の不滅についての思想である。なぜなら、人が生きる上で依拠する他の全ての「崇高な」人生思想はただこの一つの思想に源を發するからである」¹⁸⁹ と。同じ思想が『カラマーゾフの兄弟』におけるイワンとゾシマ長老との会話にも見出すことができる。

「ええ、ぼくはそう断言しました。不死がなければ、善行はありません。」「もし、そう信じておられるなら、あなたは幸せなお方か、それともたいそう不幸なお方ということになりますぞ!」「なぜ不幸なのでしょう?」イワンは微笑みかけた。「なぜかと申せば、ご自身の魂の不死も、あなたが教会や教会の問題について書かれたことさえも、ご自分では信じておられないようにお見受けするからです」。¹⁹⁰

人間靈魂の不滅の思想は、イワンの思想が確信に基づいていないことをゾシマ長老が看破する会話の中にさりげなく散りばめられている。イワンの信ずる人間靈魂の不滅が実はドストエフスキー自身の思想であることに気づく人は『作家の日記』を読んだことのある一部の人に限られると思われるし、この文脈で読む限り、イワンの発言をゾシマ長老の発言より優位と見る読者は多くないであろう。ドストエフスキーはそれほどまでに厳格な相対性の下でテキストを書き、自らの思想を、複数の思想が対等にぶつかりあうポリフォニーの小宇宙の中に散りばめている。この例のように、一見すると劣位に見える形で提示されていることも多いので、隠されているという表現の方が正しいのかもしれない。

第2節では、見つけることが難しいドストエフスキー自身の思想を探る作業を、第1節で考察したドストエフスキーの裁判に関する思想を補助線にしながら進めていきたい。

1) 被告人ミーチャ

『カラマーゾフの兄弟』第12編「誤審」の裁判の場面は「運命の日」(Роковой день)という小節から始まっている。

『作家の日記』の中に「数百人の聴衆が集まることがあるが、果たして聴衆は見世物見物のお祭り気分のみで集まると想像すべきだろうか」¹⁹¹ という記述があったが、小説でも「傍聴券は全て出払い、婦人側は被告ミーチャの味方で、男性側は被告に反感を持ってい

¹⁸⁹ Достоевский. Дневник писателя. Т. 24. Л., 1982. С. 48.

¹⁹⁰ Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 14. Л., 1976. С. 65.

¹⁹¹ Достоевский. Дневник писателя. Т. 26. Л., 1981. С. 53.

た」¹⁹² と、裁判の場はさながらスタジアム的な喧噪と応援合戦の様相で書かれていて、お祭り気分が感じられる。

続いて高名な弁護士フェチュコーヴィチが紹介されている。しかし、『作家の日記』でドストエフスキーが辛辣に批判した弁護人像を連想させる記述は見られない。他方、検事イッポリート・キリーロヴィチの紹介があり、病的に感受性が強く、一生を通じてついにめざましい地位を確立できなかったという記述は「栄達を求める」検事像を示唆している。

被告ミーチャの人定尋問に移り、スメルジャコフが自殺したことを聞いたミーチャが思わず放った「畜生には畜生らしい死に方があるのさ！」¹⁹³ という捨て台詞が、陪審員や傍聴人の心に不利な印象を与える。「単に知性の勝利あるいは最高の結実であるばかりでなく、最高に巧妙なもの」¹⁹⁴ であるべきとされる「現代の公開陪審員制度」において、知性や巧妙さに欠ける被告の野人のような言動は、不利を被りそうな予感を感じさせる記述となっている。

証人たちの証言の後、医学鑑定の結果についての証言が「医学鑑定と1フントのクルミ」(Медицинская экспертиза и один фунт орехов)という小節で行われている。3人の医師が被告の精神状態について異なる証言をしている。医学鑑定は何やら喜劇めいていて、かなり茶化して書かれている。人間の心の動きの機微について医師、医学界は十分に把握していないとドストエフスキーが考えていたのではないかと思われる。続いて地元の医師ヘルツェンシュトゥーヴェがミーチャの性質について次の証言を行う。

「1フントのクルミのお礼にうかがいました。あの頃誰もクルミを買ってくれなかったのに、あなただけが買ってくれました。」と、被告が言うのです。そこで、私は幸せだった自分の若い時代と、靴も履かずに庭を駆け回っていた可哀相な子どものことを思い出し、胸がひっくり返って言いました。「君は感謝を知っている青年だよ。君が子どもの時にわたしがあげた1フントのクルミのことをおぼえているのだから。こう言って、わたしはこの人を抱いて祝福しました」。¹⁹⁵

地元の医師のこの証言は、ミーチャが捨て台詞を放つだけの人間ではなく、「感謝を知っている」青年であることを示していて、傍聴人に好意的に受取られる。

この後、被告の親族や婚約者の証言、検事の論告が行われる。「弁護人の弁論。両刃の剣」(Речь защитника. Палка о двух концах)という小節で弁護人が最終弁論を行う。

高名な弁護人の最初の発言が響くと、全員が静まり返って、法廷中がじっと見つめた。彼は率直に確信に満ちて語り始めたが傲慢さは少しもなかった。美辞麗句、悲壮な口調、感情に訴える言葉などに頼ろうという意図は少しもなかった。思いを同じくする親密な仲間に向かって話し始めたかのようであった。声は美しく大きくて親しみがああり、声そのものに誠実さや純朴さが聞こえるようであった。¹⁹⁶

弁護人発言は親しみやすかったとしている。弁護人フェチュコーヴィッチは、検事自身が創作した小説に基づいて論告が行われていると指摘する。「もしこの事件があなたの創作した小説とまるで違っていたらどうなるのか、別の人間がこの事件に介入していたらどう

¹⁹² Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 90-91.

¹⁹³ Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 94.

¹⁹⁴ Достоевский. Дневник писателя. Т. 22. Л., 1981. С. 53.

¹⁹⁵ Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 107.

¹⁹⁶ Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 152-153.

なるのか。問題は、あなたが別の人間を創作した点にあるのです」。¹⁹⁷ 検事と弁護人、双方による誇張がロシアの裁判制度の問題点であると『作家の日記』に書かれていたが、ここでは弁護人が検事による誇張を指摘している。

弁護人の最終弁論が続き、「金は無かった。強奪も行われなかった」(Денег не было. Грабежа не было)という小節において被告の心理分析が行われている。

カラマゾフは二つの極端な深淵を同時に覗けると叫んだのはどなただったでしょうか。確かにカラマゾフは天性二つの面、二つの深淵を同時に備えており、だからこそ、遊蕩の抑えがたい要求に駆られても、もしもう一方から何か彼の心を打つならば踏みとどまれるのです。もう一方とは愛です。[……]

その時、守り袋に入れて身に着け続けていたあの1,500ルーブリをヴェルホーフツェワ嬢(カチェリーナ・イワーノヴナのこ—筆者注)の前に差し出して、「おれは卑劣な男だが泥棒ではない」と言おうという考えが被告に浮かんで来たのです。あの1,500ルーブリを家宝のように大事にして、決して守り袋を開けたり100ルーブリずつ引き出したりしなかったのには二重の理由があったのです。あなたは何故被告に名誉を重んずる感情があることを否定なさるのです? いや、彼には名誉を重んずる感情があります。正しくなくとも、多くの場合誤っているとしても、名誉の感情があります。恐ろしいほどあります。¹⁹⁸

愛の重要性や名誉の感情等の指摘が続いており、弁論は被告の心理分析に終始している。弁護人の弁論に必須の要素であると思われる法律の条文解釈はここでは姿を見せない。『作家の日記』において嫌悪の対象とされた辣腕弁護人スパゾーヴィチとは似ても似つかぬ個性の持ち主(「声そのものに誠実さや純朴さが聞こえる」¹⁹⁹)であるフェチュコーヴィチを『カラマゾフの兄弟』に登場させたドストエフスキーの意図は何だったのだろうか? 弁護人による心理分析は続き、「それに殺人もなかった」(Да и убийства не было)という小節においてミーチャは犯人ではないという弁論が行われる。

スヴェートロワ(グルーシェンカのこ—筆者注)が父のところにはいないのを確かめると、彼女が来ていないことと、父親を殺さずに逃げ出せることに喜びながら、逃げ出したのです。だからこそ、1分後に塀の上から飛び下りて、興奮にかられて殴り倒したグリゴリーに駆け寄ったのです。なぜなら清らかな感情を、同情と憐憫の感情を感じることができたからです。父親を殺したいという誘惑から逃れ、父を殺さずにすんだという清らかな心と喜びをわが身に感じたからです。[……]

わたしは被告の人物を知っています。告発者が論告で述べた野蛮で無感覚な非情さは、被告の性格に反しています。彼は自殺したかもしれない、それは間違いないでしょう。彼が自殺しなかったのは、まさに「母が彼のために祈ってくれた」からであり、また彼の心が父の血に対して潔白だったからなのです。²⁰⁰

グリゴリーを殴り倒した凶行の場面で、被告が同情と憐憫の感情を感じたことや、「母が彼のために祈ってくれた」という心理分析が弁護人によって行われている。凶行の場面におけるドストエフスキーの曖昧な記述をどう解釈すべきか迷っていた読者の中で、それが一気に腑に落ちた感覚を持つ人は少なくないのではないだろうか。わざと曖昧にしておいたミーチャの行動と心理の謎解きをドストエフスキーがフェチュコーヴィチに託してい

¹⁹⁷ Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 158-159.

¹⁹⁸ Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 159-160.

¹⁹⁹ Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 153.

²⁰⁰ Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 163.

るのではないかという可能性を感じさせる場面である。

父親殺しの真犯人が非嫡出子スメルジャコフであり、ミーチャではないことをドストエフスキーは読者に前もって知らせている。その上でミーチャを有罪にするという決定を行ったドストエフスキーは、同時に陪審員たちや弁護人の個性をどのように設定するかについての決定を迫られたはずである。

陪審員たちの個性については問題にならなかった。陪審員たちは判決を評決する役割を持っているだけであって、質疑に参加したり、発言したりすることはない。有罪という評決結果を発表する役割は必要だが、語り手に託すという方式を取れば問題は生じない。

陪審員たちに比べると、弁護人の個性設定は難問であっただろう。作者によって決定済みである懲役 20 年の厳刑に影響を与えない範囲の役割以外は、選択肢として残らないからである。無罪判決はおろか寛大な判決にすることも選択肢とはなり得ない。自らが忌み嫌い、『作家の日記』において 24 頁にわたって執拗に非難したスパソヴィチに似た個性を持つ弁護人の設定は不可能なのである。これらを総合して考えると、ドストエフスキーが自らの思想、特に倫理観を弁護人に代弁させている可能性が高くなってきた。ミーチャの行動と心理の謎解きを行う役割も、同時に弁護人に与えていたのかもしれない。

裁判の場面の検討に戻りたい。「聴衆の意識を弄ぶ扇動家」(Прелюбодей мысли)という小節において、弁護人は被告の運命に責任を持つべき者は誰かという点に言及する。

彼の運命に責任を負うべき者は誰でしょうか？ 彼が優れた資質を持ち感受性に富む立派な心を持ちながら、あれほど拙劣な育て方をされた責任は誰にあるのでしょうか？ 誰かが彼に常識や分別を教えたのでしょうか、学問の啓蒙がなされたのでしょうか、幼年時代に少しであっても誰かに愛されたのでしょうか？ わたしの依頼人は神の思召しの下に野獣のように成長したのです。[……]

この演壇を通じロシア全土が我々の声を聞いています。わたしは、当地の父親だけではなく全ての父親に向かって、「父たる者よ、汝の子どもを悲しませるな」と叫んでいるのです。そうです。我々は自分がキリストの遺訓をまず実行した後に、我々の子どもたちの責任を問うことが許されるのです。さもないと、我々は父親ではなく、子どもたちの敵であり、また彼らも我々の子どもではなく、我々の敵となるのです。そして彼らを我々の敵にしたのは我々自身なのです。²⁰¹

「父たる者よ、汝の子どもを悲しませるな」というロシア全土に向かっての発言は道徳律としか呼びようのないものである。裁判の流れを左右させるほどの意味を持つわけでもなく、情状酌量の面で量刑に多少の影響を与える可能性があるという程度の発言にすぎない。しかしながら、『カラマーゾフの兄弟』の主題の一つである父と子の関係という点から見ると、これこそがドストエフスキーが第 12 編「誤審」の裁判の場面で何よりも言いたかったことかもしれない。

弁護人像について、全く逆の見方をする先行研究が存在する。ビリュコフ、グリゴレンコ、ドボリャニーノヴァの 3 人の研究者による『ロシア古典文学作品における陪審員裁判の社会文化的起源が映し出すもの』では、次のような主張がなされている。

弁護人は、百姓出身の陪審員たちに強い印象を与え、混乱させ、煙に巻く事が可能だと考えていた。他方、ドストエフスキーは百姓出身の陪審員たちを混乱させるのは無理なことを示そうとしていた。ドストエフスキーは、フェチュコーヴィチ (そのモデルは実在の弁護人ヴラジーミル・スパソヴィチで、作家は極端に悪意ありと痛烈に批判している) が、「聴衆の意識を弄ぶ扇動家」(現実にフェチュコーヴィチ登壇に

²⁰¹ Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 168. С. 170.

伴ってある小節に「聴衆の意識を弄ぶ扇動家」という題を付けている)であると批判し、裁判に於ける修辭的雄弁は、考え得る全ての倫理原則に反することが多く、勝利を目指すあまり、弁護人たちが証言や証拠の重要性の否定に留まらず、犯罪自体を否定すると考えていた。²⁰²

ビリュコーフ、グリゴレンコ、ドボリャニーノヴァらは、スパゾーヴィチに関するものを含む同じ文献を使いながら、『作家の日記』におけるドストエフスキーの主張を文字通りに受取っているようである。しかしながら、「美辞麗句、悲壮な口調、感情に訴える言葉などに頼ろうという意図は少しもなかった。思いを同じくする親密な仲間に向かって話し始めたかのようにであった。声は美しく大きくて親しみがあり、声そのものに誠実さや純朴さが聞こえるようであった」²⁰³ という箇所を読むなら、「彼の弁論は私の心に殆ど嫌悪を催させる印象を残した」²⁰⁴ と忌み嫌ったスパゾーヴィチとは異なるタイプの弁護人として、フェチュコーヴィチが設定されていることに気がつくだろう。フェチュコーヴィチとスパゾーヴィチは同じ穴の貉ではないのだ。

三人の先行研究に欠落していると思われる視点を一つ紹介しておこう。短編『おかしな人間の夢』についての論文において、現代ロシアのドストエフスキー研究者であるエルモーションは「ドストエフスキーが「おかしな」(смешной) という単語を使うのは、特に真剣に心から表現したいことを言う時である」²⁰⁵ と述べている。つまりドストエフスキーは心から表現したいことを書くために短編の題にわざと「смешной」の語を採用しているというわけである。エルモーションの指摘通り、往々にして屈折した意見をわざと表明することの多いドストエフスキーが、この小節でも「聴衆の意識を弄ぶ扇動家」を題として使っていると、筆者は見ている。

最後に弁護人は慈悲と懲罰について述べ、弁論を終える。

世の中には、視野の狭さから世間全体を責める人がいます。その人を慈悲で圧倒して下さい、愛を示して下さい。その人は自分の行為を呪うようになります。なぜなら、その人にも良い萌芽が沢山あるからです。その人は成長し、如何に神が憐れみ深く、如何に人々が美しく正しいかに気づくでしょう。彼は恐れ入り、後悔とすぐ前にある無数の義務に圧倒されるでしょう。その時こそ彼は、「おれはもう償いをした」と言わず、「自分はすべての人に対して罪がある、自分は誰よりも不道德な人間だ」と言うでしょう。後悔と燃えるような苦悩の感動の内に彼は叫ぶでしょう。「立派な人たちばかりだ。自分を破滅させず救おうとしたではないか！」と。ああ、慈悲の実行は容易です。なぜなら、多少とも真実に近い証拠物件が何もない以上、皆さんとしても「はい、有罪です。」と読み上げるのはあまりに嫌なことだからです。一人の罪なき者を罰するより十人の罪ある者を赦せ——前世紀の栄えある我が国の歴史が叫ぶこの重々しい声が皆さんには聞こえますか、聞こえるでしょうか？ わたしのようなつまらぬ人間がわざわざ言うまでもありませんが、ロシアの裁判は単なる懲罰のためでなく破滅した人間を救うためにあるのです。他の諸国民は法規と懲罰でやればいいのです、われわれには精神と意義が、破滅した者の救済と復活があります。²⁰⁶

²⁰² Бирюков Н.Г., Григоренко О.Н., Дворянинова Е.И., Отражение социокультурных истоков суда присяжных в произведениях русской классической литературы. С.95.

²⁰³ Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С.152-3.

²⁰⁴ Достоевский. Дневник писателя. Т. 22. Л., 1981. С.56.

²⁰⁵ Ермошин Ф.А. “Пусть не смеются над мной заранее...”: Автор как “Смешной человек” в “Дневнике Писателя” Ф.М. Достоевского // Вестник Московского Университета. Сер. 9. Филология. 2009. №5. С. 137.

²⁰⁶ Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 173.

「慈悲で圧倒」を始めとする四箇所の下線部を引いた部分——ドストエフスキー思想の中核をなすものが、弁護人の口からロシア全土に向けて発信されている。弁護人が上記の引用で述べているすべての発言は、ドストエフスキー自身の思想と同一のものと考えられる。²⁰⁷ 江川卓も、上記引用の末尾（「私のようなつまらぬ人間が」から始まる箇所）を引用し、「ゾシマ長老の説いた「罰」論とフェチュコーヴィチ弁護士の思想はびたりと対応している」。²⁰⁸ と書いている。この点に筆者も同意しているが、アプローチにかんしては江川と異なっている。江川は『カラマーゾフの兄弟』におけるゾシマ長老とフェチュコーヴィチ弁護人の発言を比較して、「私のようなつまらぬ人間が」から始まる箇所に焦点を当てて、破滅した者の救済と復活について述べている。これに対して、筆者はフェチュコーヴィチの慈悲と懲罰についての弁論全体を対象を拡げ、『死の家の記録』、『悪霊』、『作家の日記』、『カラマーゾフの兄弟』の四作に書かれているドストエフスキー思想と『カラマーゾフの兄弟』におけるフェチュコーヴィチ発言とを比較している。

ドストエフスキーが自身の思想を代弁させる役割として弁護人を選んだと、筆者が考える理由の一つにフェチュコーヴィチが姓だけで呼ばれていることがある（他方、弁護人と対決する検事イッポリート・キリーロヴィッチは名と父称で呼ばれている）。これには作者のどんな意図があるのであろうか。そもそもフェチュコーヴィチという姓自体が奇妙な語感を持つネーミングである。フェチュコーヴィッチ(Фетюкович)という姓の元になったと思われるフェチュク(фетюк)という男性名詞は『岩波ロシア語辞典』には「〔俗〕〔罵って〕阿呆、間抜け」²⁰⁹ とある。往々にして屈折した意見をわざと表明することの多いドストエフスキーが、敢えて小節の題に「聴衆の意識を弄ぶ扇動家」を選んだのではないかと前述したが、弁護人の名前についてもドストエフスキーがあえてふざけたものを選んでいて筆者は考えている。

ドストエフスキーは単一の方に読者を誘導する手法を取らない。何らかの形で暗示を与えながらも、屈折した記述を織り交ぜ、幾重にも相対化を行っているのである。結果として、ドストエフスキーの言おうとしていることに迫る難易度は高いものにならざるを得ない。「これはゾシマ長老の説いた「罰」論にほとんど文字どおりびたり対応する思想である。ところがそれを論ずるのが「阿保田」さんであるという理由から、この高尚な論議はおのずとカリカチュアに転化せざるをえない」²¹⁰ と江川卓は書いている。筆者とは正反対の結論を出しているのだが、「ドンキホーテは時代の本質をつかんだ人物なのか、或いは時代錯誤の道化者なのか」という評価の差に似ていて、紙一重の差しかないものと思われる。

判決は有罪で、懲役 20 年という重いものだったことが、「百姓たちが我を張った」(Мужики за себя постояли)という小節で述べられている。量刑の検討を棚上げにして先に進むわけにはいかない。1865 年夏に起稿された『罪と罰』の量刑との対比は重要であろう。ラスコーリニコフは自首と二、三の情状を酌量されて、8 年の第二級懲役刑を宣告されている。

²⁰⁷ 「おれはもう償いをした」は『死の家の記録』(Достоевский. Записки из Мертвого дома. Т. 4. Л., 1972. С. 15.) において、「慈悲で圧倒」と「一人の罪なき者を罰するより十人の罪ある者を赦せ」は『作家の日記』(Достоевский. Дневник писателя. Т. 26. Л., 1984. С.110.; Т. 23. Л., 1976. С.139.) において、それぞれ書かれている。「すべての人に対して罪がある」は 1872 年の『悪霊』におけるステパン氏の「だれもがみなおたがいに罪を犯している」(Достоевский. Бесы. Т. 10. Л., 1974. С. 491.) という思想が、『カラマーゾフの兄弟』ではゾシマ長老の早逝した兄マルケルが形成している「すべての人に対して罪がある」(Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 14. Л., 1976. С. 262.) という思想へと変化して書かれている。興味深いことにはマルケルに加え、ゾシマ長老、ミーチャヤアリョーシャという四人の主要な登場人物が揃って作中で同一の思想を形成するというそれまでの長編小説では考えられなかった試みが行われている。詳細については、本論文終章の本文を参照されたい。

²⁰⁸ 江川卓『謎解き『カラマーゾフの兄弟』』新潮社、1991 年、23 頁。

²⁰⁹ 八杉貞利『岩波ロシア語辞典』岩波書店、1970 年、1435 頁。

²¹⁰ 江川卓『謎解き『カラマーゾフの兄弟』』23 頁。

しかし判決は、行われた犯罪からみて、人々が予期したよりも寛大だった。犯人が自己弁護しなかつただけではなく、むしろなるべく自分の罪を重くしようという要望を表明したからであろう。この事件のあらゆる奇怪な、特殊な事情が顧慮された。²¹¹

二人を斧で斬殺した凶悪犯とは言え、ラスコーリニコフは犯行を自ら認めていたので、裁判が紛糾する要素はなかった。

ロシア陪審員裁判制の導入はアレクサンドル二世によって1864年に行われている。1865年夏とされる『罪と罰』起稿の時点までに公開陪審員制度の問題点が蓄積されていたとは思えない。『罪と罰』で裁判の経過や結果が2頁しか述べられていない理由の一つかと思われる。制度が本格的に施行されて暫く経つと、本章の第1節「ロシアの公開陪審員制度に対するドストエフスキーの見解」で述べた問題点が明らかになり始め、1878年夏に『カラマーゾフの兄弟』が起稿される頃には、90頁に及ぶ裁判場面の記述が必要となる程、課題が蓄積されていたのではないだろうか。

先行研究に欠けている問題点は、「ドストエフスキーが無実であるミーチャを懲役20年の実刑にしたのは何故か」についての検討や評価が行われていないことにある。例として、ビリュコフ、グリゴレンコ、ドボリャニーノヴァの三人が結論としたものを引用する。

ラスコーリニコフは、徒刑での労働によってではなく、魂を良心の裁定に委ね運命を神の御手に手渡すことで、自身の罪を償うことを自ら決定したと言えるだろう。物語はここに至り、地上の裁判で知覚可能なもの、つまり杓子定規の足枷や形式主義の枠外へと出て行き、神の贖罪と罪深き人の懺悔へと高められるのである。[……]

ロシアの陪審員裁判は、長きにわたり、二つの正義の思想を保ってきた、最高の正義（神による正義）[справедливости высшей (Божественной)]と法的な正義（人による正義）[справедливости юридической (человеческой)]の二つである。[……]

ラスコーリニコフの魂は、ソーニャ・マルメラードヴァ自身の愛によって救済され、ミーチャの魂はグルーシェンカとアリョーシャによって救われる。[……]

悔悟する罪人にとって、地上のどの裁判も恐ろしいものではないし、体刑とて、行き場のない魂の深淵から広がっていった贖罪行為のほんの小さな部分にすぎないのである。²¹²

筆者が見るに、三人の結論は誤審をやむを得ないものとしているようである。すなわち、「人による裁判は時として誤審を生み得るものだが、悔悟して神の御手に委ねさえすれば神がお見捨てになることはない」という風に。なるほど、「悔悟する罪人にとって、地上のどの裁判も恐ろしいものではない」という結論は、『罪と罰』が執筆された時点に限定すれば、ドストエフスキー思想の一端を示すものかもしれない。けれども、本稿が解明すべきことは『カラマーゾフの兄弟』執筆時においてもドストエフスキーが依然としてそのように考えていたかの、この一点にある。これについては、小括でもう一度取り上げたい。

量刑を20年に決めた理由については二つの可能性が考えられる。オムスク監獄の囚人仲間の一人で父親を殺害したとされる貴族についての、「彼は自白しなかったが、爵位と官位を剥奪されて、20年の流刑に処せられた」²¹³ という記述が『死の家の記録』にあり、これをそのまま採用したというのが第一の可能性である。ただし、これは1840年代という古い判例なので、尊属殺人の量刑として20年が一つの基準であった時代が存在したという事実

²¹¹ Достоевский. Преступление и наказание. Т. 6. Л., 1973. С. 411.

²¹² Бирюков Н.Г., Григоренко О.Н., Дворянинова Е.И., Отражение социокультурных истоков суда присяжных в произведениях русской классической литературы. С.106.

²¹³ Достоевский. Записки из Мертвого дома. Т. 4. Л., 1972. С. 16.

を証明する史料の一つになるとしても、30年後の陪審員制度の量刑としてこれが適当であるかどうかは分からない。第二の可能性は、ほんのちょっとした譴責、或いはせいぜい禁固2ヶ月ぐらいの事件を、僻遠の地への20年間の流刑へとこじつけた。事件を明瞭にするために必要だとしても、やはり検事は嘘をついたのだ²¹⁴ という第1節で引用した『作家の日記』における記述を、ドストエフスキーが刑期も含めそのまま採用しているというものである。同じ時代であるということと、「誤審」で終わっているという二つの共通点をふまえるなら、第二の可能性が量刑を20年に決めた理由であるように思われる。

2)真犯人スメルジャコフ

「スメルジャコフ論」(Трактат о Смердякове)という小節において、検事はスメルジャコフの人物像を、「よく分からなかった教えを幾つか消化不良のまま残している愚鈍な男で、自らの知力に合わない哲学的な思想に頭が混乱し責務や義務についての最新の学説に驚いている人間」²¹⁵として提示している。

この男は持病である癲癇と、突発的な異変の為に憂鬱症の発作を起こして昨日縊死いたしました。首を吊るに際して、『誰にも罪を及ぼさない為に、自らの意志と望みによって、自らを根絶する。』と独特なスタイルで書かれた遺書を残しています。殺人者は自分であってカラマーゾフではない、こう付け加えることは何でもないことです。ところがスメルジャコフはそうしなかった。一方で良心の呵責を感じ、他方では感じなかったのでしょうか？²¹⁶

これに対し、弁護人は検事とは異なるスメルジャコフ論を展開している。

わたしはスメルジャコフを訪ね、彼に会って話をしましたが、彼がわたしに与えた印象は全く違ったものでした。[……]

とりわけわたしは彼に小心さを、検事があればほど特徴的に描写された、あの小心さを見ることが出来ませんでした。正直さなどは全く見られず、反対にわたしが見たのは、ナイーブさの下に潜む、怖ろしい猜疑心と、殆どのことを見抜ける知力でした。ああ、検事が彼を愚鈍な男とみたのは、あまりにも単純な見解なのです。わたしは彼から極めて決定的な印象を受けました。わたしはこの人物が決定的に意地が悪く、過度な野心家で、復讐心に満ち、火のような嫉妬心を持った男だという確信を抱いて、彼のところを去りました。

わたしが集めた幾つかの情報に拠りますと、彼は自分の出生に嫌悪を感じ、出生を恥じて、歯ぎしりをしながら、『おれは「悪臭を放つ女」(Смердящая Смердьячяシチャヤ)から生まれたんだ』と言っていたそうです。子ども時代の恩人である召使のグリゴーリーと彼の妻に対しても敬意を払っていなかった。ロシアを呪い、ロシアを嘲笑い、フランスへ行って、帰化するのだと夢想していました。彼はそのためには資力が足りないと、何度となく話していたようです。彼は自分以外はだれ一人愛さず、代わりに奇妙に思えるほどまでに自分を高く買っていたように、わたしには思われます。彼が考える文明とは、上等な服、清潔なシャツと、綺麗に磨かれた靴でした。自分で、自分をカラマーゾフの非嫡出子と考えていましたので(これには証拠があります)、雇い主の嫡出子たちと較べた際の自分の境遇を憎悪していたに違いありません。彼らには、そう嫡出子らにはすべてがあるのに、彼には何もない。嫡出子らにはすべての権

²¹⁴ Достоевский. Дневник писателя. Т. 22. Л., 1981. С.52-4.

²¹⁵ Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 136.

²¹⁶ Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 141.

利があり遺産の相続権があるのに、自分は一介の料理人に過ぎないということです。²¹⁷

ここでは弁護人によるスメルジャコフ観が述べられている。子ども時代の育ての親である召使のグリゴリー夫妻に敬意を払っていなかったという箇所は、1フントのクルミの恩を長じても忘れていなかったミーチャと対照的である。

次に告発者はこうも叫ばれました。それならばなぜ、なぜスメルジャコフは遺書のなかでそう告白しなかったのか、『一方で良心の呵責を感じながら、他方では感じなかったのか』と。しかし失礼ながら、良心の呵責とは即ち後悔であり、この自殺者には後悔などあり得なかったのです。あったのはただ絶望だけです。絶望と後悔は全く異なったものなのです。絶望は悪意に満ち、折り合いのつけようがなかったかもしれませぬ。そしてこの自殺者は自殺する瞬間に、一生の間羨んできた人々を以前の二倍憎悪していたかもしれませぬ。²¹⁸

ドストエフスキーが弁護人に自らの思想を代弁する役割を任せていたとするなら、この「スメルジャコフ論」はドストエフスキー自身の意見ということになる。

真犯人スメルジャコフについては、裁判の場面からの引用だけでは不十分と思われるので、本文中から二点引用する。まず、小節「ギターを爪弾くスメルジャコフ」(Смердяков с гитарой)において、スメルジャコフが若い女性マリヤと語らっている場面である。

生まれ落ちた時からこんな運命でなけりゃ、ぼくはもっと色々できたでしょうし、もっと物知りになっていましたね。ぼくのことを「悪臭を放つ女」(Смердящая Смердзячя)から生まれた父なし子だから卑しい男だなんて言う奴がいたら、決闘してピストルで撃ち殺してしまいますよ。モスクワで、面と向かってそう言われたことがあるんです。グリゴリー・ワシーリエヴィチ(育ての親のこと―筆者注)がこの町から噂を流したんでね。²¹⁹

ギターを奏でながらのデートの場面にふさわしくない発言をスメルジャコフがしている。それだけ生みの親と育ての親への怨みが大きかったことを示している。

次に引用する場面は、小節「コニャックを飲みながら」(За коньячком)において、父親フョードルがイワンに語るスメルジャコフ評である。

「わたしにはちゃんと分かっているが、あいつはわたしという人間が我慢ならんのだ。他の者たちも同じで我慢ならんのだ。いやお前だってそうさ。お前の方では、スメルジャコフがお前を『尊敬する気になった』と感じているかもしれんが。アリョーシャなんかは、もちろんそうだ。あいつはアリョーシャを軽蔑してるよ」。²²⁰

フョードルのこの発言は、スメルジャコフが「自殺する瞬間に、一生の間うらやんで来た人々を以前の二倍憎悪していた」というフェチュコーヴィッチ弁護士の意見と一致している。

スメルジャコフと少年イリューシャは針入りのパンを犬のジューチカに食べさせる。実行犯の二人以外に針入りパンの件を知る人はおらず、他の誰かから非難を受けたわけはなかったが、イリューシャは衰弱するほどまでに苦悩し、「自律的な罰」に苦しみ続ける。

²¹⁷ Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 164-5.

²¹⁸ Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 166.

²¹⁹ Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 14. Л., 1976. С. 204.

²²⁰ Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 14. Л., 1976. С. 122.

イリューシャとは異なり、スメルジャコフにはそもそも「自律的な罰」に苦しむという感覚がわからない。愛することも愛されることも知らず、自分の出生を呪うスメルジャコフには自殺する以外の選択肢は残らない。

この演壇を通じロシア全土がわれわれの声を聞いています。私は、当地の父親だけではなく全ての父親に向かって、「父たる者よ、なんじの子どもを悲しませるな」と叫んでいるのです。²²¹

父子の望ましい関係についての弁護人の上記の発言を被告人ミーチャの所で引用したが、ミーチャの将来に問題があるとドストエフスキーが考えていたようには思えない。たとえ野獣のように成長していたとしても、1 フントのクルミの恩を忘れないミーチャは苦悩することのできる男であり、「自律的な罰」のメカニズムが働いている。ミーチャと違って、「自律的な罰」のメカニズムが働かないスメルジャコフを救済するのは比較にならないほど難しい。生みの父にも育ての父にも怨念しか感じない、荒み切ったスメルジャコフに苦悩は生じない。ドストエフスキーは、ロシアの家庭が大きくぐらついた時代の落とし子たるスメルジャコフの救済策がどうしても見つからないので、第二、第三のスメルジャコフを出現させない為に、すべての父親に向かって子どもたちの敵になるなど弁護人に叫ばせたと思われる。

小括：

『作家の日記』1877年7-8月合併号第1章1節「モスクワの知人との会話 ある新刊書についての感想」(Разговор мой с одним Московским знакомым. Заметка по поводу новой книжки)で、ドストエフスキーは同時代のロシアの家庭についてこう書いている。

「現代ほどロシアの家庭がぐらつき、安定を欠き、定義づけもされず、外形すら整っていないような時代はない。」[……]

「現代のロシアの家庭はますます偶然の家庭となってゆきつつある」。²²²

ロシアの家庭に深い懸念を表明した上で、2節「再び偶然の家族について」(Опять о случайном семействе)でその具体的な例を書いている。

突然、汽車の中に一人の紳士が入って来た。全くりゆうとした紳士で、外国を歩き回るロシア紳士のタイプに良く似ていた。彼は小さな息子の手を引きながら入って来たが、その子は年のころ八つばかり、それより上にはどうしても見えない、ひょっとしたら、下かもしれなかった。男の子は最新流行の、ヨーロッパ式の子ども服をこの上なく可愛らしく着こなしていた。可愛らしいジャケットをつけ、優美に靴を履き、透き通るようなシャツをつけている。父親がこの子に気を配っているのは明らかだった。ふいに、男の子は席につくが早いのか、「パパ、煙草をちょうだい」と父親に言った。[……]

現代の父親には何一つ普遍的なものがない。偉大なる思想が存在しない(喪失したのだ)、偉大なる信念が、彼らの心に存在しないのだ。ただこうした偉大なる信念のみが子どもたちの追憶に美しきものを生み出すことができるのだ。幼年時代のひどい環境、貧困や彼らの揺籃を取り囲む道徳的汚辱があっても美しきものを生み出すことができるのだ！ おお、墮落した父親であっても、遠い昔の偉大なる思想、それに対する偉大な信念を心の中で保持していたが為に、惨めな子どもたちの飢え渴いた感受性

²²¹ Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 14. Л., 1976. С. 168. С. 170.

²²² Достоевский. Дневник писателя. Т. 25. Л., 1982. С.173.

の強い心に偉大な思想と偉大な感情の種子を移し植え、他のことがどうあろうと、その善行だけの理由で後になって子どもたちに許して貰える場合がよくある。肯定的かつ美しきものの萌芽なしに人を幼年期から人生へと巣立たせてはならない。肯定的かつ美しきものの萌芽なしに次の世代を旅立たせてはならない。²²³

「肯定的かつ美しきものの萌芽なしに次の世代を旅立たせてはならない」という『作家の日記』に書かれたドストエフスキーの思想と「父たる者よ、なんじの子どもを悲しませるな」というフェチュコーヴィチの演説はよく似ている。どちらも、ぐらつきつつある父子の関係を望ましいものに変えていく社会啓発を行っている。違いがあるとしたら、評論として書かれたか、又は芸術作品として発表されたか、というジャンル上の差だけである。

ここでビリュコフ、グリゴレンコ、ドボリャニーノヴァの三人による研究書に戻って、その結論の是非について述べてみたい。もう一度結論の部分を引用してみる。

ミーチャの魂はグルーシェンカとアリョーシャによって救われる。[……]

悔悟する罪人にとって、地上のどの裁判も恐ろしいものではないし、体刑とて、行き場のない魂の深淵から広がっていった贖罪行為のほんの小さな部分にすぎないのである。²²⁴

「行き場のない魂の深淵から広がっていった贖罪行為」についてであるが、ドストエフスキーがシベリア流刑を経験する中で、他律的な罰の底の浅さに気づき、「行き場のない魂の深淵から広がっていった贖罪行為」の一つである「自律的な罰」への沈潜を深めてきたことは事実である。『カラマーゾフの兄弟』でも「自律的な罰」に苦しむ登場人物である「謎の客」やイリューシャの二人についての記述があることは第1章の『死の家の記録』の小括で既に紹介した。「謎の客」やイリューシャの二人が体験する「自律的な罰」は、自らが犯した具体的な犯罪行為に対するものであって、『罪と罰』でラスコーリニコフを苦しめているものと同じであるのに対して、『カラマーゾフの兄弟』においては、それまでには見られなかった「自律的な罰」に関する思想が形成されている。新たに形成された思想とは、「自分はずべての人間に対して罪がある」ということを実感した上で、例外なく「愛し始める、或いは善行という贖罪行為を始める」というものであり、ゾシマ長老の兄、ゾシマ長老、ミーチャそれにアリョーシャという四人の登場人物が揃って作中で形成している思想である。²²⁵ 新たに形成された思想の形成者たちが自覚する罪は、ラスコーリニコフ、謎の客、イリューシャが自覚し、苦しんでいる自ら犯した具体的な犯罪行為というレベルではなく、人間が存在する限り避けられない原罪という抽象性の高いもので、刑事上の訴追を受けるようなレベルの罪ではない。贖罪行為の方も精神性に強く影響された抽象性の高いものということで共通している。新たに形成された思想の四人の形成者たちの一人であるミーチャについて、第4部第11編第4章の「聖歌と秘密」(Гимн и секрет)を、例として引用してみたい。

²²³ Достоевский. Дневник писателя. Т. 25. Л., 1982. С.177-178. С.180-181.

²²⁴ Бирюков., Григоренко., Дворянинова. Отражение социокультурных истоков суда присяжных в произведениях русской классической литературы. С.106.

²²⁵ Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 14. Л., 1976. С. 262. 第2部第6編第2章の「ゾシマ長老の早逝した兄」(О юноше брате старца Зосимы)で、早逝したゾシマ長老の兄マルケルは「すべての人間や物にたいして自分が一番罪が深い」と言い始め、周りの召使や小鳥や木々に謝罪、感謝し、愛し始める。

Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 14. Л., 1976. С. 270-271. 第2部第6編第2章の「ゾシマ長老の青年時代の思い出」(О священном писании в жизни отца Зосимы)において、ゾシマ長老は従卒アフナーシーを理もなく殴ったことに罪深さを感じ、彼の足下に身を投げて謝罪し、僧院に入る。ゾシマ長老はさらに、「人は同胞の審判者たり得るか。最後まで信ぜよ」(Можно ли быть судиею себе подобных? О вере до конца)において、「眼前に立つ罪人の罪に対しては、むしろ自分が誰よりも罪があると自覚せぬ限り、この地上には罪人の審判者はあり得ぬ」と、発言している。(この部分は、Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 14. Л., 1976. С. 291.)

ミーチャについては、この注の直後の本文を、アリョーシャについては、終章の本文をそれぞれ参照されたい。

おれがあゝの瞬間に《餓鬼》の夢を見たのはなぜだろう？『どうして餓鬼がみじめな目に会うのか』——この疑問はあゝの時におれにとっては予言だったのだ！ おれが行くのは《餓鬼》のためだ。なぜなら、すべての人はすべての人に対して罪があるからだ。すべての《餓鬼》に対して。小さい餓鬼もいれば、大きい餓鬼もいる。すべての人が餓鬼なんだ。おれはすべての人に代わって行くんだ。なぜなら誰かがすべての人に代わって行く必要があるからだ。親父を殺したのはおれじゃない、しかしおれは行かなければならない。喜んで引き受けようじゃないか！²²⁶

ミーチャは、「貧乏人が焼け出され、赤ん坊に飲ませる乳も出ずに、焼け跡に立ちすくんでいる」《餓鬼》の夢²²⁷を見て、すべての人間に罪があることに気づいたので、すべての人に代わって懲役に行き、懲役囚達と心を通わせ、彼らの為尽くそうと思う。」と、懲役二十年の判決を受ける裁判の前日に、アリョーシャに胸の内を告白している。

前日に告白しているという事実からは、ミーチャが翌日の裁判で予想される体刑を問題にしていることがわかる。つまり、翌日の裁判はミーチャの魂の救済とは関係のないところで開かれるものにすぎない。ミーチャを動かしているのは、「すべての人に対して罪がある」という倫理観と、その贖罪としての善行の開始だけである。裁判でミーチャが悔悟している理由は、「すべての人に対して罪がある」からであって、「親父を殺した」からではない。ミーチャは、父親殺しについては無罪であるという主張を何度も繰り返しているが、自分が無罪であるとの主張はしていない。なぜなら、ミーチャ自身が自分は有罪であるという結論を既に出しているからである。ミーチャの魂はミーチャ自身の決定によって救済されており、ビリュコフ、グリゴレンコ、ドボリャニーノヴァの三人が結論としているように、「グルーシェンカとアリョーシャによって救われた」わけではない。

ミーチャ、ゾシマ長老兄弟とアリョーシャの四人が形成した「すべての人に対して罪があり」、その贖罪としての「善行」という組合せからなる思想については終章のところで、本論文全体の問題として考察することにして、第6章の小括では、ミーチャの「誤審」に絞って考えていきたい。

第6章で解明すべき最大の問題点は、無実のミーチャが懲役20年の実刑に処されている理由である。筆者が着目したのは、『カラマーゾフの兄弟』において、陪審員と弁護人の双方に、実態とは「あべこべ」の役割が与えられていることである。より具体的には、『作家の日記』では懲罰忌避の傾向が見られると批判されていた陪審員たちは、『カラマーゾフの兄弟』では被告人を有罪にしている、懲罰忌避を行っていない。また『作家の日記』では無罪を勝ち取る為手段を選ばず、不道徳極まりなかった弁護人が『カラマーゾフの兄弟』では全ロシアに対して高邁とも言える道徳律を呼びかけている。

これらの「あべこべ」はすべて、「無実のミーチャを懲役20年の実刑に処すという誤審」に終わらせることを選択したドストエフスキーの決定から逆算されたものである。敢えて「あべこべ」を選択している理由は、ドストエフスキーが「懲罰忌避」や「嫌悪すべき弁護人の詭弁」といった問題よりも重要度が高い喫緊の課題を感じており、それを訴えかけるために第12編「誤審」をロシア社会とロシア国民に対する社会啓発のために書いたものと筆者は考えている。それでは、「誤審」と社会啓発はどのようにして繋がっているのか？

ドストエフスキーの立場に立って考えてみよう。ミーチャが真犯人でないことは読者周

²²⁶ Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 31.

²²⁷ Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 14. Л., 1976. С. 456-457. 「彼は、自分の心の中に、今まで一度も感じたことのないある感動が湧き上がって来るのを感じている。彼は泣きたかった。赤ん坊がこれ以上泣かないように、乳が干からび赤黒い顔の赤ん坊の母親が泣かないように、たった今この瞬間から誰の目にも涙一滴浮かばなくなるように、何かをしてやりたい、それもたった今、たった今なのだ、一刻の猶予もなしに、どんな障害があろうとも、ありったけのカラマーゾフ流の奔放さでもって。」夢の内容は、ドストエフスキーの全作品中でどの登場人物が見た夢より光明に満ち、はっきりと善行への方向性が示されている。

知の事実である。しかも、フェチュコーヴィチという高名な弁護人が聴衆をうならせる弁論を行ったにもかかわらず、懲役20年の厳刑がミーチャに科されることになった。読者は現行の陪審員制度に重大な欠陥があると憤慨するに違いない。重い量刑を科すことによって、憤激で社会を揺り動かせば、結果として「誤審」が是正される方向へ導くことができると、ドストエフスキー自身が判断したのではないか。「誤審のこわさ」を是正させる目的の為には量刑は重ければ重いほど良い。ハッピーエンドで終わらせて読者に束の間の満足感を与えることが何の解決策にもならないことをドストエフスキーは百も承知だったと思われる。第1節で引用した、検事のイワン・フリストフォールィチの「ちょっとした譴責、或いはせいぜい禁固2ヶ月ぐらいの事件を、僻遠の地への20年間の流刑へとこじつけた」という「誤審」問題を是正することがロシアの公開陪審員制度の最大の問題であり、そうしないとロシア社会、ロシア国民にとって大きな脅威となるとドストエフスキーが判断していたと、筆者は考えている。このことは、「公開陪審員制度は、ロシア固有のものでなく、外国を模倣したものである。偽善を撲滅し、万事を真実と真理によって進行させたい」²²⁸ということにも繋がっており、根本的にはドストエフスキーはより公正なロシア固有の制度の実現を提言しているように思われる。

ロシア社会とロシア国民の大多数が気づいていないことで、『カラマーゾフの兄弟』で啓発活動を行う必要があるとドストエフスキーが考えたと思われることがもう一つある。それが「偶然の家族」という社会問題についての提言である。「父たる者よ、汝の子どもを悲しませるな」²²⁹ 或いは「肯定的かつ美しきものの萌芽なしに次の世代を旅立たせてはならない」。²³⁰ というドストエフスキー自身の思想についての提言で、カラマーゾフ四兄弟、特に第二第三のスメルジャコフを生み出さないために言わずにはおられなかったことだと筆者は考えている。

この二つが『カラマーゾフの兄弟』の第12編「誤審」でドストエフスキーがどうしても言わずにはおれなかったことであり、ロシア社会とロシア国民に対する社会啓発のために書かれたものであったと筆者は考えている。

²²⁸ Достоевский. Дневник писателя. Т. 26. Л., 1981. С. 54.

²²⁹ Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 170.

²³⁰ Достоевский. Дневник писателя. Т. 25. Л., 1982. С.177-178. С.180-181.

終章

『カラマーゾフの兄弟』脱稿の6か月前に、ドストエフスキーがユンゲ(E. Ф. Юнге)という女性読者の悩みに答えた1880年4月11日付けの手紙が残っている。

あなたはわたしと瓜二つということになります、あなたがお持ちである二分されたもの、それはわたしが持っているものと全く同じであり、一生を通じてわたしの中にある続けたものなのです。それは大いなる苦しみですが、同時に大いなる満足でもあるのです。それは——強い自覚です、自分自身に解決を迫る要求であり、それはまたあなたご自身および人類への倫理的義務ということになります。これが二重性というものです。もしあなたの精神がこれほど発達していなければ良心の痛みは少なかったでしょうし、二重性など感じたりしないで、逆に自己満足が生ずることでしょう。しかし、やはり、この二重性は——大きな苦痛であります。²³¹

この手紙から読み取れるのは、ドストエフスキーが「二重性という大きな苦痛」をかかえ、良心の痛みを感じながらも、一生を通じて「自身および人類への倫理的義務」と、それへの「強い自覚」を考え続けてきたことを示していて、ドストエフスキー思想の変容をその始まりから追ってきた本論文の問題意識とも整合するものである。

本論文を第1章『死の家の記録』から始めているのは、ドストエフスキーの運命的な後半生のスタートがシベリア流刑であり、彼の「思想」の原型が形作られたのがシベリアであったと思われることが主な理由である。『死の家の記録』は形式的には「妻殺しの罪で徒刑囚となったゴリャンチコフという貴族地主による手記」という形を取っているが、実質的には作者によるモノログ形式で書かれていて、ドストエフスキーの率直な主張を読み取ることが可能である。

ドストエフスキーは流刑囚だったころから、観察に基づく実体験を重視する人間であった。第1章で紹介した「独房制度は人間から生命の汁を吸い取り、人間の魂を苦しめ衰弱させ脅かした上で、精神的にカラカラに干からびているミイラである半狂人を、矯正と悔悟の模範としている」という指摘は、独房制度を実体験から批判したものである。ドストエフスキーは、当時もてはやされ全盛であった啓蒙主義と最新であるとされた西欧の新制度を無批判に受け入れることに一貫して懐疑的であり、その姿勢は生涯を通じて続いた。

シベリアの監獄においてドストエフスキーが目にしたのは独房制度を始めとする流刑制度、すなわち「他律的な罰」が機能していない実態であった。他方で、囚人たちが内なる精神上の苦悩を免れなかったことを目撃した彼は、苦悩が最高の浄化力を持ち、魂を強固にするのではないかという「自律的な罰」という思想を徐々に形成していく。

当時の人たちが気づいていなかったと思われる「自律的な罰」を考え付き、『死の家の記録』に書いていること自体が啓発活動と言えなくもない。ドストエフスキーが「啓発を生涯の仕事とする」ことを決めたのは、それから16年後の『おかしな人間の夢』においてであるが、「啓蒙ではなく啓発」という彼の姿勢は『死の家の記録』において既に示されていたのである。ともあれ、「自律的な罰」は生涯を通じて彼の思想の支柱であり続ける。

第2章の『罪と罰』は二つの点において重要な作品である。一つ目は「自律的な罰」のさらなる究明である。『死の家の記録』において犯罪者が自ら精神的にその刑罰を求めたと同じことが、『罪と罰』のラスコーリニコフに起こるかどうかという試みが行われている。知的成熟が劣っているはずの囚人たちが、誰に命ぜられたわけでもないのに自分から精神的にその刑罰を求めているのに、知的成熟度が優れているはずのドストエフスキーには起こらなかった。この不思議な実体験が、「知的成熟度が高い新しい世代の人物が精神的に刑罰を求めることを表現してみたかった」というカトコフへの手紙を書かせたのであろう。二つ目は自殺の問題である。当初の構想では自殺させることが予定されていた主人公ラス

²³¹ Достоевский. Письма 1878-1881. Т.30 Книга Первая. Л., 1988. С. 149.

コーリニコフを自殺させず、代りにスヴィドリガイロフを登場させ、自殺させている。

『罪と罰』におけるドストエフスキーの主張を探る作業は、5つの小説の中で最も難しかった。『作家の日記』発行以前の作品であるので、『作家の日記』に書かれている思想を補助線として使えないことに加え、『罪と罰』が『死の家の記録』のようにモノログとして書かれていないことの二つがその理由である。カトコフへの手紙をただ一つの手がかりとしながら、『罪と罰』の本文からドストエフスキーの主張を探っていくしか方法はなかった。

『罪と罰』も反啓蒙・反理性主義の観点から解釈することが可能である。第1節では、「証拠に基づく罪刑法定主義」という問題が俎上に上がっている。主人公ラスコーリニコフが何度となく窮地に陥りながら、脱出し続けるストーリーに読者がつい引き込まれてしまうのは、「明確な証拠がない限り何人も訴追されることはない」という罪刑法定主義が正しく、優れたものであるという価値観を疑っていないからである。同じ価値観を信奉するラスコーリニコフを襲うのが「自律的な罰」であり、それが「周章狼狽」という形で現われることをドストエフスキーは執拗に書いている。魂の安らぎは、罪刑法定主義に代表される西欧式の「罪と罰」の考えでは得られず、罪人自身の良心の過程である自ら進んで苦悩を求める「自律的な罰」によってでしか得られないとドストエフスキーは主張している。

第2節の自殺の問題も「弁証法より日々の暮し」を重視することによって解決されるので、反啓蒙・反理性主義的と言えるだろう。「夢を見ること」が「自己の内部で弁証法と日々のくらしが闘い、苦悩している」、すなわち「自律的な罰」であるなら、これに「日々の暮しにおいて愛される」ことと「猫みたいな不死身さ」を組み合わせれば自殺を回避できるのである。「絶望、極度にシニカルな」スヴィドリガイロフ的要素を切り捨てる決定をしたドストエフスキーの自殺観は、ここでいったん完成したと思われる。

第3章の『おとなしい女』は、ドストエフスキーの思想が大きく転換する直前の作品として重要である。『罪と罰』で「弁証法より日々の暮し」を重視する生き方を決めたドストエフスキーだが、すべての問題が解決していたわけではない。1864年に最初の妻マリヤが死んだ時から未解決のままである「自分を愛するように他人を愛せない」課題がそっくりそのまま残っていた。そこにいったん完成したはずの彼の自殺観を震撼させる自殺事件が相次いで起こった。貧しいお針子の飛び降り自殺を「自分自身の責任」のように考えるドストエフスキーにとっては、他人の自殺が続く限り魂が休まることはない。自分が自殺しないだけでは問題の解決にはならないのである。「他人を愛せない」という長年の課題と自殺問題が絡み合っただけでドストエフスキーに答えを迫っている。最も身近な他人である配偶者との問題に焦点を絞って、ドストエフスキーがその解決策に挑んでいるのはなぜかをドストエフスキーが二番目の妻アンナに送った11通の手紙から考察した。

この作品で12年来の課題が解決し、ドストエフスキーの思想に大きな転換が起こったわけではない。とはいえ、「自分を愛するように他人を愛せない」課題を解決すべく、一筋の灯りも見えない中でもがき苦しみ、夫婦間に潜む問題に挑んでいるドストエフスキーの姿勢があったからこそ、彼の思想がさらに深化していったと思われる。

第4章の『おかしな人間の夢』では、『おとなしい女』から『おかしな人間の夢』執筆に至るまでの5か月間の『作家の日記』における自殺に関する評論に加え、「自分を愛するようには他人を愛せない」問題の解決に決定的な影響を与えたと思われるユダヤ系医師ヒンデブルグの善行を取り上げた。自我に執着しないヒンデブルグは周りの人の幸福を優先しており、「すぐ善行を実行する」行動律が骨の髄まで滲みこんでいる。「即時の実行」が良い結果に繋がり、周りの人を幸福にすると同時に、ヒンデブルグの幸福度を高め、それがさらに次の善行に繋がるという良い循環が成立している。ドストエフスキーは「自分を愛するように他人を愛する」ために必要なことが実践行動であり、徹底して実用的でないといけなことを身に染みて感じたのである。

最初の妻マリヤが死んだのは1864年4月であった。そのひと月前に『地下生活者の手記』が刊行されていることを考え合わせると、その後の13年間にわたるドストエフスキーの行動律は、夢想家である「地下生活者」のそれと同じものに留まっていたように思われる。

最愛の妻に自殺された『おとなしい女』の主人公が最後まで気づかなかったのは、自らの行動律が現実に基づくものではなく、夢に基づいていたことではなかったか。そしてそれはそのままドストエフスキーにも当て嵌まっていたはずである。

ヒンデンブルグに触発されたドストエフスキーは現実に密着し、善行を不断に実行しない限り、「自分を愛するように他人を愛す」ことができないことに気づいた。そんなドストエフスキーに実行可能な善行は何だろう？ 作家は、自らの強みである文筆を使って「啓発活動を行う」ことを『おかしな人間の夢』の結論として発表することを決定する。その決定は1877年4月30日の植字原稿異文の内容から分かる。1877年5月2日の最終校正稿において、それが「生涯の仕事として断固として続けていく」という不退転の決意にまで強められているので、ドストエフスキー思想の転換が完了した時期が最後の3日間であったと、確定することが可能である。

第5章第1節のコルニーロヴァ事件は、小説ではなく、実際に起こった殺人未遂事件についての『作家の日記』における評論であり、裁判での有罪判決を誤審ではないかと問うている例外的なケースである。「妊娠時の病的アフェクト」がこの事件を起こさせた、というドストエフスキーの評論は輿論を動かさず、裁判所は事件の再審を行った結果、無罪の宣告を下す。この事件をめぐる実体験からドストエフスキーは社会啓発の可能性をじかに確かめると共に、啓発の意義を本当に理解する人はまだまだ少数派にすぎないことをメディアの黙殺から確認する。

第4章の『おかしな人間の夢』から形成されつつあった「自分を愛するように他人を愛す」ための善行の試みと、第5章第1節のコルニーロヴァ事件の経過を通しての社会啓発の試み、それぞれ同時に、かつ別々に進行してきたこれら二つの試みは1877年5月2日の最終校正稿で一つに統合され「生涯の仕事として断固として続けていく」という不退転の行動律が成立する。この行動律が、ドストエフスキーに『カラマーゾフの兄弟』を書かせる力を与えることになる。

第6章では第12篇「誤審」の裁判の場面を中心に、ドストエフスキーをこの長編小説の執筆へと駆り立てたものを考察してきた。筆者はその結論を、「裁判の場面は、誤審の怖さを読者に訴えることと、望ましい親子関係についての社会啓発の二つを目的として書かれた」として提示した。この二つはロシアの喫緊の社会問題であるにもかかわらず、多くの人たちはそれに気づいていなかった。それを啓発するためにドストエフスキーは裁判の場面に多くの頁を割き、あえて被告人ミーチャを有罪にする選択を行っている。

終章では、裁判以外の場面での「自律的な罰」についてもふれておきたい。『カラマーゾフの兄弟』においても「自律的な罰」のテーマは継続し、兄弟たちにどう作用しているかが書かれている。荒み切った非嫡出子スメルジャコフには「自律的な罰」のメカニズムは働かず、フォードル殺害からも、また犬に針入りのパンを食べさせたことから苦悩は生じていない。この点で、命をすり減らすほどの苦しみを味わう「謎の客」やイリュージョンとは好対照を示している。次男イワンに「自律的な罰」は作用しかけているのだが、『罪と罰』のラスコーリニコフよりも強いと思われるプライドと自我の強さが邪魔をして、譎妄状態に陥ってしまい悪魔しか見えなくなっている。

『カラマーゾフの兄弟』の執筆へとドストエフスキーを駆り立てたものは「すべての人間に対する罪の自覚」と「贖罪としての善行」とを組み合わせた実践への志向に他ならない。それでは、この思想はいつ形成されたのであろうか？ 「すべての人間に対する罪の自覚」という思想自体は『カラマーゾフの兄弟』において初めて出てくる思想ではない。『悪霊』(Бесы, 1871-1872)の第三部で、逗留地で死ぬ直前のステパン・トロフィーモヴィチは、看護してくれたソフィアに対して、次のような発言をしている。

「おお、赦しましょう、赦しましょう、まずすべての人を、いつも赦しましょう……そして、ぼくも赦してもらえると希望をもちましょう。そうですよ。だれもが

みなおたがいに罪を犯しているのですものね。万人が罪びとなんですから！ ……」²³²

『悪霊』執筆時の「万人が罪びとなんですから！」、『おかしな人間の夢』執筆時の「おのれみずからの如く他の人たちを愛する」と「善行の即時実行」との不可分性、『カラマーゾフの兄弟』執筆までに形成された「自我の強さという原罪を贖うための善行」、ドストエフスキーの思想はこれら三つを組み合わせることで、『カラマーゾフの兄弟』において「すべての人間に対する罪の自覚」と「贖罪としての善行」が不可分である新しい思想へと深化した。

この新しい思想の実行者として創造されたのが長男ミーチャである。ミーチャを動かしているのは、「すべての人間に対する罪の自覚」と「贖罪としての善行」だけである。ミーチャが悔悟しているのは、「すべての人間に対する罪の自覚」からであって、「親父を殺した」からではない。ミーチャは『カラマーゾフの兄弟』で公開陪審員制度の約束事や秩序に反する行動をとって、顰蹙をかっているが、それはミーチャに制度に対する挑戦かつ諷刺の役割が与えられているためであり、無知だからではない。

カーは、「このおそるべき悲劇の圧倒的な感銘に最も寄与するところの多いのは、ドストエフスキーが創造した、最も人間的にして、かつ最も純粋にロシア人的な人物のドミートリー（ミーチャのこと：筆者注）であろう」。²³³と書き、次のように結論づけている。

救済に至りつく罪悪感とは、ドストエフスキーにとっては、プロテスタント神学においてとても大きな役割を演じてきた、個人的罪悪意識ではない。それは罪の共産主義とでもいえばばんふさわしい説であって、[……]ある種の西欧人にとっては虚偽の口実とも考えられそうな、万人の罪に各個人が関与しているというこの考えは、たしかに、深くロシア国民性に浸透していて、おそらくはロシア人の根ざし（誤植であり、「ロシア人に根ざしている」が正しいと思われる：筆者注）深い共産主義的本能につながりを持っているのかも知れない。最も顕著なロシア人の特性と従来見なされてきた限りない寛容も、こうしたところから説明がつくのであろう。²³⁴

ミーチャは「父親の殺害では無罪だが、すべての人に対して罪がある」と言って、「有罪かそれとも無罪か」の認否からスタートする西欧型の裁判制度の常識に挑戦している。ミーチャにとっては、「すべての人間に対する罪の自覚」だけが問題なのである。

『カラマーゾフの兄弟』で西欧型の裁判制度の常識に挑んでいるのはミーチャー一人ではない。フェチュコーヴィチ弁護士もそうである。「ロシアの裁判は単なる懲罰のためでなく破滅した人間を救うためにあるのです。他の諸国民は法規と懲罰でやればいいのです、われわれには精神と意義が、破滅した者の救済と復活があります」というフェチュコーヴィチの発言はドストエフスキー自身の思想でもあっただろう。

第6章では裁判の場面を中心に考察してきたので、ミーチャについての記述が大半を占めたが、三男アリョーシャにもミーチャとよく似た役割が与えられている。ミーチャが見た夢は彼を善行の道へといざなうが、アリョーシャにも同じことが起こる。小節「ガリラヤのカナ」（Кана Галилейская）で、ゾシマ長老の遺体が安置されている庵室に戻ったアリョーシャは、パイシー神父が「ガリラヤのカナ」を誦する声を聞きながら、まどろみの中でゾシマ長老の声を聞く。

「わたらの仕事はどうじゃな？ お前は、わしの静かなおとなしい少年であるお前は、今日、一本のねぎを、渴望していた女に与えることが出来たのう。はじめるがよい、

²³² Достоевский. Бесы. Т. 10. Л., 1974. С. 491.

²³³ カー『ドストエフスキー』393頁。

²³⁴ カー『ドストエフスキー』405-406頁。

可愛い、おとなしい少年よ、おまえの仕事を！」〔……〕彼はすべてについてすべての人々を赦し、自分の方からも赦しを乞いたいと思った。おお、決して自分のための赦しではなく、万人のため、悉く一切のための赦しを乞うのだ。〔……〕弱い一人の若者として大地に倒れた彼は、立ち上がった時は、生涯を貫く不屈の闘士となっていた。²³⁵

ゾシマ長老の声は、「本日開始した啓発がアリオージャの仕事であり、それを続けよ」というものである。アリオージャが一本のねぎを与えたとゾシマ長老が呼んでいる女とはグルーシェンカのことである。そのグルーシェンカが小節「ねぎ」(Луковка)で、子どもの時に聞いた話として紹介しているのは、意地の悪い老婆が生涯に一度だけ野菜畑からねぎを一本抜いて乞食に与えた話である。「あたしは生涯たった一度だけ小さなねぎを恵んだことがあるの。あたしの善行はそれ一つなの。だからね、アリオージャ、もうあたしを褒めないで頂戴。あたしを善良な女だなんて思わないで頂戴。あたしはいけない女なの、それはそれは意地の悪い女なの、ほめてもらおうと、恥ずかしくなるわ」。²³⁶ こう言うグルーシェンカに対して、アリオージャはこう答える。「ぼく自身、裁かれる者のうちでいちばん罪深い人間なんだから。このひとに比べれば、ぼくは何という人間だろう。ぼくがここへ来たのは、自分を破滅させて、《どうとでもなれ！》と言うためだったのだ」。²³⁷ 「一本のねぎ」に象徴される善行がアリオージャ、グルーシェンカ、ゾシマ長老の三人を繋いでいる。「罪深い人間」であることの自覚が「生涯を貫く不屈の闘士」に変えていく点で、アリオージャとミーチャ、それにゾシマ長老は啓発活動を行う同志と言えるだろう。三人の覚悟は『おかしな人間の夢』の主人公のそれを想起させる。

本論文で時系列に沿って考察してきた内容から、ドストエフスキーが『カラマーゾフの兄弟』を書いた理由を箇条書きにすると次のような結論となる。

(一) 晩年のドストエフスキーが抱えていた課題は、おのれの自我によって「おのれみずからの如く他の人たちを愛することができない」ことであり、彼はそれを人間の原罪であると考えた。

(二) ドストエフスキーはその原罪を贖うためには「すべての人間に対する罪の自覚」を持つと同時に「贖罪としての善行」に励むことが必要であると思立ち、その具体的な実践として「文筆を通じての啓発活動」に着手した。

(三) その際、よりよく書くことのできる形式として、ジャーナリスティックな評論ではなく長編小説が採用された。こうして彼は1877年12月号を最後に『作家の日記』を休刊し、『カラマーゾフの兄弟』執筆に専念することになった。

ドストエフスキーは同時代の出来事を注視することをやめない作家であった。もし彼の創作活動が続いていれば、ロシアが直面する新しい問題で、人々が気づいていないことについての啓発活動をきつと続けていたことだろう。最後にドストエフスキーの「同時代の出来事を注視し続ける」姿勢についてふれて本論文を終えたい。

読者のアルチーフスカヤに宛てた1876年4月9日付けの手紙が残っており、時代の現実に対するドストエフスキーと、彼の友人ゴンチャロフの取り組み方の差が示されている。

わたしはもう53歳ですから、少し怠けると直ぐに時代から取り残されます。数日前ゴンチャロフに会いました。わたしは彼に、流れ動く現代の現実を全て理解しているか、それとも理解することを止めたのか、と真面目に尋ねました。彼は率直に、多くのものを理解することをやめたと答えました。〔……〕「わたしにとって大切なのは自分の理想と、自分が人生で熱愛したものです。わたしは自分に残された僅かの年月を

²³⁵ Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 14. Л., 1976. С. 327-328.

²³⁶ Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 14. Л., 1976. С. 319.

²³⁷ Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 14. Л., 1976. С. 321.

愛したものと共に送りたいと思います。あの人たちを研究するのは（彼はネフスキー大通りに行く群衆を指さして、こう言い足しました）、わたしには荷がかりすぎます。彼らの為にわたしの貴重な時間が費やされてしまいますから」。²³⁸

自分の愛したものを大切にするゴンチャロフとは違って、ドストエフスキーの関心は常にネフスキー大通りに行く群衆の方にあり、群衆のために貴重な時間を費やすことを厭わない。ドストエフスキーは群衆に密着しながら、自分自身を変容させ続けている。その変容はカメレオンが色を変えるような防御的なものではなく、蟬の形態変化に似ている。「作家としてのドストエフスキイの目だった特徴をあげてみれば、まず成長する作家ということに気づきます」。²³⁹ と、埴谷雄高は書いている。蟬の幼虫が羽化するとその抜け殻が残る。抜け殻は姿を持っているが、過去のものであって、ドストエフスキーの現在進行中の姿を示しているわけではない。『カラマーゾフの兄弟』においてドストエフスキーが行おうとした啓発活動には、『地下生活者の手記』でかつて見られた暗さは完全に姿を消している。ここで次のような挿話を引用しておこう。

校正係がドストエフスキイに彼の作品について話しかける気になったことがあった。

「きのうひと晩かけてあなたの『地下生活者の手記』を読みましたわ……。今でもまだあの感動から脱しきれません……。なんて恐ろしいんでしょう、人間の魂って！ それにしても全く恐ろしい真実ですわ！ ……」

フョードル・ミハイロヴィチは明るくあげすけに笑った。「アポロン・グリゴリーエフが昔私にこう言っていましたよ。あれは私の本物の傑作だ、いつもああいうものを書くべきだとね。でも、彼には賛成できませんね。あれはあまりにも暗すぎますよ。今ならもっと明るい調和の取れたものが書けますね」。²⁴⁰

この会話はドストエフスキーが『市民』誌の編集者であった1873年に交わされたものであり、彼の思想が大きく転換する1876年以降の時期のものではない。しかしながら、この会話からすでにドストエフスキーが『地下生活者の手記』から次の段階へと踏み出そうとしていることがうかがえる。脱皮を続けることをやめない彼は、『おかしな人間の夢』執筆時に、『地下生活者の手記』以来続けてきた夢想家の行動律を脱ぎ捨てて、啓発者へと脱皮したのである。ネフスキー大通りをゆく群衆に絶えず注意を払いながら羽化を繰り返して止まらない人間——それがドストエフスキーであったと筆者は考えている。

²³⁸ Достоевский. Письма 1875-1877. Т. 29 Книга Вторая. Л., 1986. С. 78.

²³⁹ 埴谷雄高『ドストエフスキイ その生涯と作品』日本放送出版協会、1965年、10頁。

²⁴⁰ グロスマン『ドストエフスキイ』344-345頁。

【参考文献】

●一次文献

Достоевский Ф.М. Полное собрание сочинений в 30 томах. Л., 1972-1988.

●二次文献

[ロシア語文献]

Бахтин М.М. Собрание сочинений в 7 томах. М., 2000-2002.

Бирюков Н.Г., Григоренко О.Н., Дворянинова Е.И., Отражение социокультурных истоков суда присяжных в произведениях русской классической литературы. коллективная монография, Фонд науки и образования, Ростов-на-Дону. 2019.

Достоевская А. Г. Воспоминания. М., 1925.

Достоевская А. Г. Дневник А. Г. Достоевской. М., 1923.

Ермошин Ф.А. “Пусть не смеются над мной заранее...”:Автор как “Смешной человек” в “Дневнике Писателя” Ф.М. Достоевского // Вестник Московского Университета. Сер. 9. Филология. 2009. №5.

Ефремов В.С. Самоубийство в художественном мире Достоевского. СПб., Диалект, 2008.

Золотко О.В. Психология сна о “золотом веке” героя рассказа Ф.М.Достоевского “Сон смешного человека” // Достоевский и миловая культура. Филологический журнал.2018. № 1.

Карлова Т.С. Достоевский и Русский суд. Казань. Издательство Казанского Университета.1975.

Катасонов В.Н. Загадки “Сна смешного человека” Ф.М.Достоевского. С.2.

[http://katasonov-vn.narod.ru/statji/razdel4/4-2_v.n.katasonov_zagadki_sna_smeshnog...] 閲覧日 2020/12/09

Наседкин Н. Н. Самоубийство Достоевского. М., Алгоритм, 2002.

Наседкин Н. Н. Достоевский Энциклопедия. М., Алгоритм, 2003.

Сафронова Е.Ю. Сибирский текст Ф.М.Достоевского. Барнаул. Издательство Алтайского Государственного Университета. 2020.

Щербина В. Р. (Глав. Ред.) и др. Расшифрованный Дневник А. Г. Достоевской // Литературное Наследство ; Т. 86. М., 1973.

[英語文献]

Anna G. Dostoevsky, *Dostoevsky: Reminiscences*, tr, and ed. Beatrice Stillman: Liveright, New York,1977.

Gary S. Morson, *The Boundaries of Genre: Dostoevsky's Diary of a Writer and the Traditions of Literary Utopia*:University of Texas Press, Austin, 1981.

William J. Leatherbarrow (Ed.) , *The Cambridge Companion to Dostoevskii*: Cambridge University Press, Cambridge, 2002

[日本語文献]

江川卓『謎解き『カラマーゾフの兄弟』』新潮社、1991年

E・H・カー/中橋一夫/松村達雄譯『ドストエフスキー』社会思想研究会出版部、1952年

レオニード・グロスман/北垣信行訳『ドストエフスキイ』筑摩書房、1966年

小林秀雄『ドストエフスキイの生活』新潮社、1964年

作田啓一『ドストエフスキーの世界』筑摩書房、1988年
清水正『ドストエフスキー『罪と罰』の世界』鳥影社、1991年
中村健之介『知られざるドストエフスキー』岩波書店、1993年
中村健之介『ドストエフスキーの手紙』北海道大学図書刊行会、1986年
埴谷雄高『ドストエフスキイ その生涯と作品』日本放送出版協会、1965年
ミハイル・バフチン/望月哲男・鈴木淳一訳『ドストエフスキーの詩学』筑摩書房、1995年
ミハイル・バフチン/桑野隆訳『ドストエフスキーの創作の問題』平凡社、2013年
ドストエフスキー/工藤精一郎訳『死の家の記録』新潮社、1973年
ドストエフスキー/小沼文彦訳『作家の日記』(1-6) ちくま学芸文庫、1997-1998年
ドストエフスキイ/米川正夫訳「作家の日記」河出書房新社、1974年
番場俊『『罪と罰』の捜査担当官ポルフィーリー・ペトローヴィッチ、あるいは文学と法の交錯に関する反人物論的考察』『現代思想』38巻4号、2010年
ペレヴェルゼフ/長瀬隆訳『ドストエフスキーの創造』みすず書房、1989年
八杉貞利『岩波ロシヤ語辞典』岩波書店、1970年
山城むつみ『ドストエフスキー』講談社、2010年
ヤンコ・ラヴリン/平田次三郎訳『ドストエフスキー』理想社、1972年

略年表 『ドストエフスキーはなぜ『カラマーゾフの兄弟』を書いたのか』 松原繁生

西暦年月日	論文に記載されている内容	関係する主な作品
1849年12月	(28歳) 流刑囚としてシベリアへ	『死の家の記録』
1855年	(34歳) アレクサンドル二世が即位	『死の家の記録』
1859年10月9日	(38歳) 兄宛てのトヴェーリからの手紙	『死の家の記録』
1861年1月	(40歳) 『死の家の記録』第一部を発表	『死の家の記録』
1861年1月	兄ミハイルと『時代』創刊	『死の家の記録』
1861年2月19日	アレクサンドル二世による農奴解放令	『死の家の記録』
1861年4月	『死の家の記録』の出版社変更	『死の家の記録』
1862年1月	(41歳) 『死の家の記録』第二部を発表	『死の家の記録』
1863年	(42歳) ロシアで答刑が禁止される	『死の家の記録』
1863年5月	『時代』誌の発行停止を命ぜられる	『罪と罰』
1864年3月	(43歳) 『地下生活者の手記』を発表	『罪と罰』
1864年4月16日	最初の妻マリヤ死去	『罪と罰』
1864年6月10日	兄ミハイル死去	『罪と罰』
1865年4月14日	(44歳) ヴランゲリに宛てた借金を嘆く手紙	『罪と罰』
1865年7月	スースロフと会うために外国旅行へ	『罪と罰』
1865年8月20日	ツルゲーネフ宛ての借金受領の手紙	『罪と罰』
1865年9月10-15日	カトコフ宛ての『罪と罰』の構想の手紙	『罪と罰』
1866年1月	(45歳) 『罪と罰』を『ロシア通報』に連載開始	『罪と罰』
1867年2月15日	(46歳) 二度目の妻アンナと結婚	『おとなしい女』
1867年5月	アンナ夫人のドレスデン日記	『おとなしい女』
1867年8月16日	マイコフ宛ての手紙	『おとなしい女』
1867年9月	アンナ夫人の「速記による日記」	『おとなしい女』
1873年1月	(52歳) 『市民』誌に『作家の日記』を発表	『作家の日記』
1876年1月	(55歳) 個人雑誌『作家の日記』の出版開始	『作家の日記』
1876年4月9日	読者アルチェーフスカヤへの手紙	『カラマーゾフの兄弟』
1876年5月	コルニーロヴァ事件の最初の評論	『作家の日記』
1876年7月7日-8月6日	アンナ夫人への11通の手紙	『おとなしい女』
1876年9月30日	お針子が飛び降り自殺	『おとなしい女』
1876年10月	評論「二つの自殺」を発表	『おとなしい女』
1876年10月	評論「宣告」を発表	『おかしな人間の夢』
1876年10月	コルニーロヴァ事件の判決報告	『おかしな人間の夢』
1876年11月	『おとなしい女』を発表	『おとなしい女』
1876年12月	コルニーロヴァとの面会報告	『作家の日記』
1876年12月	評論「根拠のない確信」を発表	『おかしな人間の夢』
1877年2月13日	(56歳) ユダヤ系医師ヒンデンプルグの訃報	『おかしな人間の夢』
1877年3月	ヒンデンプルグの葬儀の報告	『おかしな人間の夢』
1877年4月22日	コルニーロヴァ事件再審で無罪判決	『おかしな人間の夢』
1877年5月2日	『おかしな人間の夢』の最終校正稿	『おかしな人間の夢』
1877年7-8月号	評論「再び偶然の家庭について」	『カラマーゾフの兄弟』
1877年10月	評論「公開陪審員制度の問題点」	『カラマーゾフの兄弟』
1877年12月	コルニーロヴァ事件の最終報告	『カラマーゾフの兄弟』
1877年12月	『作家の日記』の休刊を発表	『カラマーゾフの兄弟』
1879年1月	(58歳) 『カラマーゾフの兄弟』の連載開始	『カラマーゾフの兄弟』
1879年8月13日	アンナ夫人へのエムスからの手紙	『カラマーゾフの兄弟』
1880年11月	(59歳) 『カラマーゾフの兄弟』の連載終了	『カラマーゾフの兄弟』
1881年1月	(60歳) 『作家の日記』を復刊	『作家の日記』
1881年1月28日	ペテルブルグで急逝	